通俗画報

第四百五十号

婦人の便秘に

婦人は種々な原因の爲に便秘を起し易く便秘者は絶えず頭痛、眩暈、嘔心、腹部緊張鼓腸等を起し不愉快なるは勿論身体に悪影響を與へるものなり、故に便秘ある婦人はラキサトールを用ひて便通を調節すべし。

下劑

ラキサトール

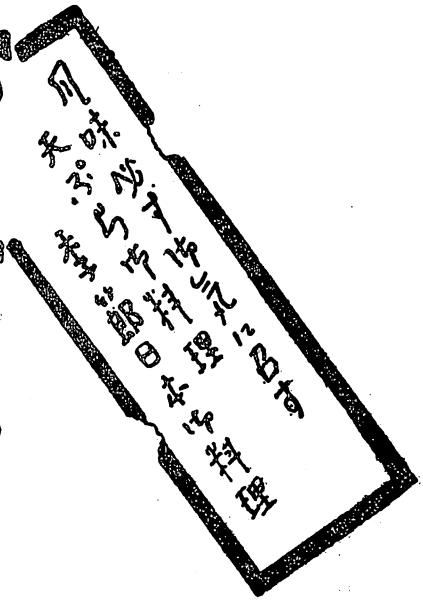
粉末錠劑、全國藥店にあり

大阪市東區道修町
發賣元 株式會社 塩野義商店
東京市日本橋區岩附町

L.O.114.

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席で是非御會食を



道頓堀戎ばし北詰

支店

大阪支店　北新地裏町

京都支店　木屋町ドングリ橋

道頓堀

昭和四年六月號　第四年　第三十三輯

◇表紙……（怪談小車草紙）……大塚克三畫

目次

◎中座六月興行上演◇伊井蓉峰の原敬◇首相官邸の應接間、喜多村緑郎の淺子夫人、小堀誠の高橋光威◇水谷八重子の夫人グレース・ロー◇「クレプトメーニヤ」の舞臺面、柳永二郎と水谷のロー夫妻◇喜多村のおつや、伊井の万吉◇小堀誠の遊び人幸次、英太郎のお久◇花柳章太郎の澤桂子◇守山の應接間、花柳の桂子、英の照子、水谷の壽美子、梅島昇の前川俊一、白河の藤木信一郎、柳の守山義雄◇柳の守山義雄と花柳の桂子◇水谷の壽美子と梅島の前川俊一◎角座六月の新聲劇◇「海の隼」富士野の春江、辻野の惣吉小波の銀之助、名越の覺円、中田の伊織、藤本の主水正◇「おいてきぼり時代」和歌浦の光子、鈴木の鈴木、中田の東海、伊川の上山、市内關所爭奪リレーへ出發の兩軍選手◎浪花座六月の淡海劇◇「親類」淡海の松本、樂太の與平◇或る日の父さん「淡海の父さん「二つの影」淡海の松島◇辨天座に出演した大衆新派劇の舞臺面

◇扉……（一）

□中座と辨天座……高安吸江（二四）

□新派の人々に寄す……高谷伸（二六）

□「原敬」と新派劇に就いて……中村吉藏（三〇）

□新派の本領と高速度演出……大關柊郎（三四）

□惠我の莊より……川村花菱（三四）

◇靈感術師と澄ます……食滿南北（三六）

◇島芝居の話……志賀迺家淡海（三八）

□芝居物語……原敬……會我迺家太郎（四〇）

……青木茂（一）

□芝居ばなし……クレプトメーニヤ……村田和緒（一〇）
□芝居漫談……怪談「小車草紙」……河上馨（一一）
□芝居物語……受難華……川上利夫（一六）
◇八軒長屋……中田正造（五二）
◇我等の前途……名越仙左衛門（五四）
◇「朝鮮朝日」の由來……辻野良一（五五）
◇お調子もの……富士野蔦枝（三七）
□臆面もなく上場……伊井蓉峰（四二）
□「小車草紙」のこと……喜多村緑郎（四九）
□「女裝を破つて……花柳章太郎（四四）
□愚感……梅島昇（四六）
□大阪の皆様へ……水谷八重子（五〇）
□「原敬」その他……小菅一夫（五七）
□僕のペエヂ……田中總一郎（五六）
◇辨天座上演脚本◇
堺事變……（八場）……食満南北（五八）
六歌仙戀愛爭奪……（四景）……中井泰孝（七四）
□劇壇その日〳〵……（八三）
□編輯後記……松本泰三（八六）
□挿繪カット……大塚克三

會旗 優勝旗
劇場幕 幟
緞帳 フラフ
梅原商店
神戸市
楠門
電話元町一六一五番

お芝居の幕間と
お歸りにはお揃で
食慾をそゝる初夏のお献立が
お待ち申してゐます

梅園

お芝居でのお食堂にて……
お歸りには白鷹にて一寸一ぷく江戸すしを……

中座食堂

本店 太左衛門橋北一丁
電話 南六二二七番

お芝居の
あいまには
高尚で趣味深い
寫眞のお道樂が
いッちよろしい！

寫眞機は
リリーカメラ
パールカメラ
アイデアカメラ
パーレットカメラ

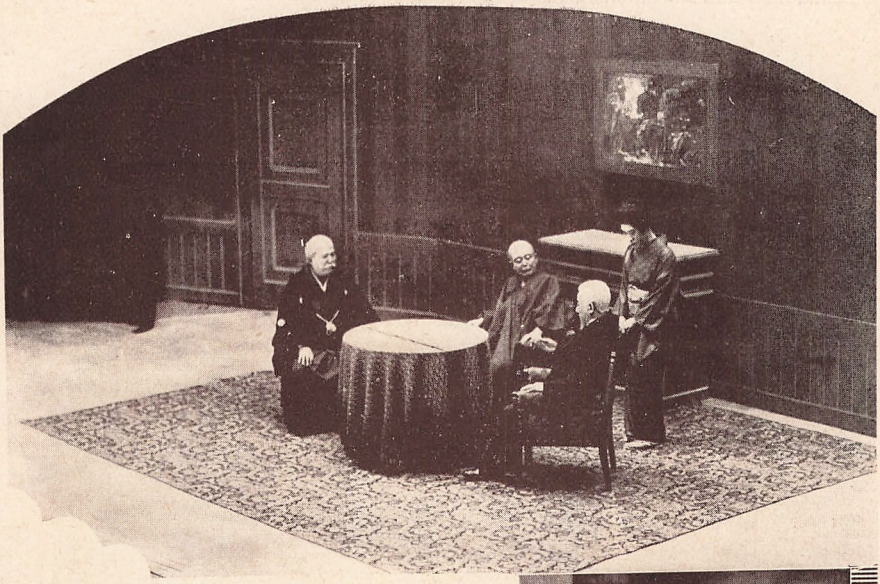
（カタログ進呈）

大阪市南區長堀橋筋一丁目
小西六大阪支店
電話 南（二二九三）（二九八二）番
本店 東京 本町二丁目

中座六月興行

「原　敬」民平相宰

伊井蓉峰の扮する原敬



中座六月興行

「原　敬」民平相宰

上……首相官邸應接間の舞臺面
中……喜多村綠郎の淺子夫人
下……小堀誠の扮する高橋光威

大阪市東區京橋三丁目七十五番地

株式會社 大林組

支店 東京、横濱、名古屋、小倉
營業所 京都、神戸、京城
工作所 大阪、東京

スキナ脂取紙（あぶら）

撰擇を誤らないで下さい！

最も久しい經驗を持ち、製造元も販賣店も收利の觀念を離れて只管

『良き實質の物を最も低廉に』

そして、皆樣の爲に徹底的に御愛用を頂き度く努力して居ります。

お顔のあぶら取紙……スキナ！

道頓堀の各座、及び各地化粧品店に販賣せり
お買求めの節は『スキナ』と御指定を乞ふ

現品縮圖
スキナあぶら取紙

本舗
スキナ屋號
中田商店
大阪

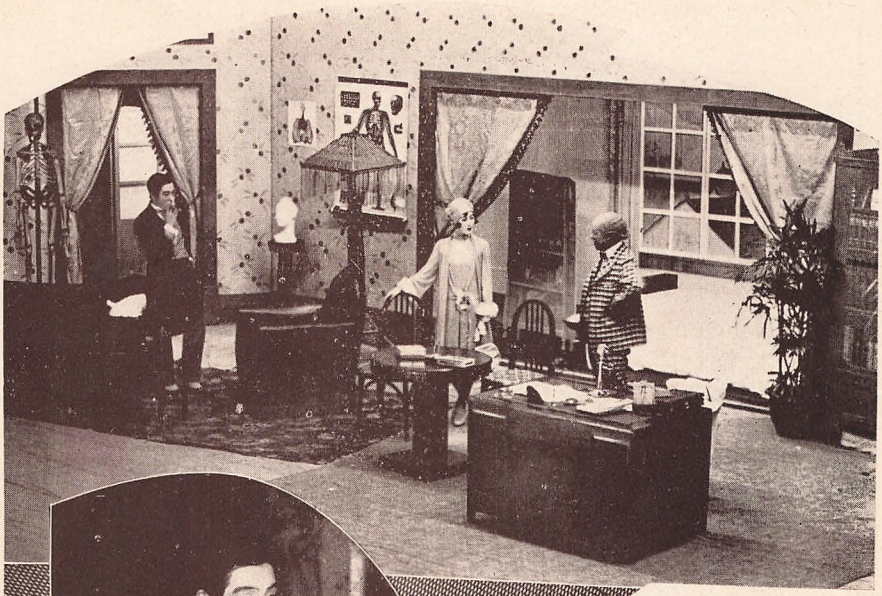
中座六月興行

第二……「クレプトメーニヤ」……作者冠郡太田益

水谷八重子の夫人グレース・ローロー

××い高香　頬なかよくふのろいゑ　瞳く履

…りの艶麗ゃゃんの八重なな的素るじ感をぎゃ息の



中座六月興行上演

第二「クレブトメーニヤ」

上……「クレブトメーニヤ」の舞臺面

下……柳永二郎の紐育の豪商フランク・ローと水谷八重子の夫人グレース・ロー

なんと明るい空氣が漂つてるぢやありませんか。どんな會話が交はされてゐるんでしせう……一言でもきゝたまりたい氣になりせんか……。

大阪名物

舟川生魚州

うなぎ御料理

道頓堀各劇場へは……

鰻まむし並に調理品一切迅速丁寧に仕出しいたします

御觀劇の砌りは何卒御電話下さいませ

電話南 シバト 四八一〇番 クイニ 九五二二番

便所の防臭に困りの方は今直ぐ

藥學士　林彪太郎氏創製

（定價一瓶　小大　金五拾錢　金壹圓）

脫臭劑　アポロ

アポロ印

足非鄰使用あれ

使用簡便

十滴奏効

無害無毒

家庭必備品

「アポロ」ハ一つの便所に大抵十滴撒布すれば充分奏効します。

「アポロ」は溶かすことがいりません、このまゝ撒布すれば宜敷いから少しも面倒でありません。

「アポロ」ハ他の藥（カンプラ油、デシン、ナフタリン、クレゾール、樟腦など）と異ひ化學的變化により放臭物を無臭とします。

「アポロ」ハ毒性がなく無害で便所にアポロの臭ひが殘らぬ爲め汲取人がイヤガリません。無論農作物にも無害です。

「アポロ」ハ使用法が輕便で奏効的確、用量が僅かですから經濟にもなります。

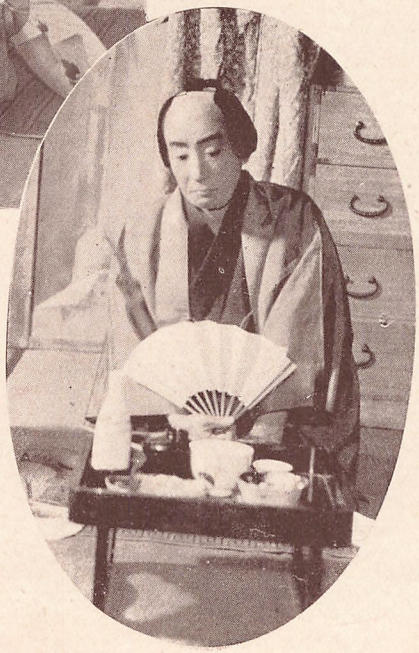
▲使用法　一回十滴乃至十數滴づゝ（場所により多少の加減を要す）一回多量に撒布するは却て効力を減ずる事あり使用後は栓を堅くし冷所に置かるべし。

到る處の藥店

各百貨店に販賣す

發賣元

大阪市東區伏見町三丁目　光榮商會　電話本局三三一五番　振替大阪三三一一七番



中座六月興行

第三「怪談小車草紙」

上……喜多村緑郎の妹おつや

下……伊井蓉峰の遊び人萬吉

中座六月興行

「怪談小車草紙」

螢のひがパッパッパッと飛んで行くところ

「小堀誠の遊び人幸次」の

妖しいまなざしがきっとおけられます

悩ましい夏の夜に

怪奇的な幻影を逐つてゐる

「英太郎のお久」

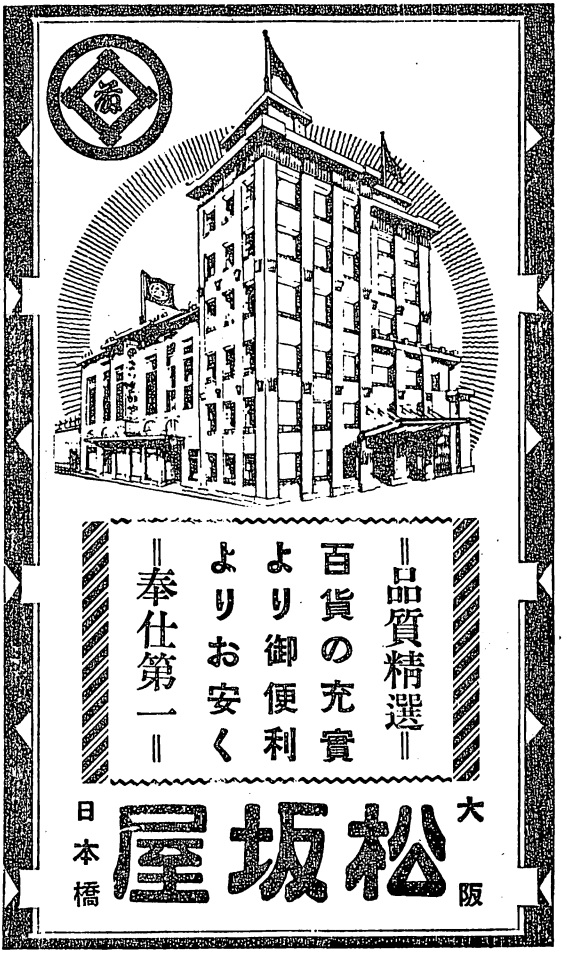
清潔(スマート)な淡化粧に

新御國水白粉

白紙・肌色・櫻色

各五十錢

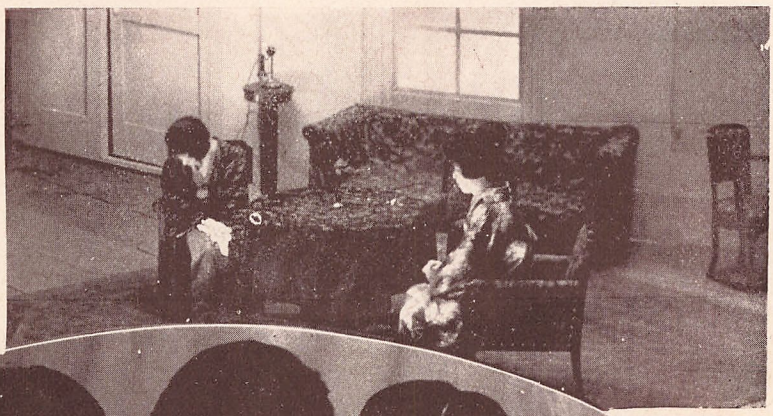
東京 伊東胡蝶園 本舗


松坂屋
大阪
日本橋
百貨の充實
より御便利
よりお安く
品質精選
奉仕第一

六月の中座

第四「受難華」

花柳章太郎の澤桂子



守山の應接間の舞臺面

右　花柳の桂子
左　瀬戸の或る女

柳永二郎の
守山義雄

中座六月の

「受難華」

中部…英の長沼照子

花柳の澤桂子

水谷の菊岡壽美子

梅島昇の

前川俊一

白河青峰の

藤木信一郎

中座「受難華」の舞臺より

―新婚の守山の家―

氣持ちのよい日本間、室の中には新しい簞笥、なんと新婚の家庭の氣分がただよってゐる事ではありませんか

守山　しかし、頭のいゝ女だな。

桂子　さう、お分りになりまして。

守山　分るさ、女の手紙は一目見れば、頭のいゝわるいは分るさ。

桂子　そんなに、いろ〳〵の女の手紙を御存じなの……。

守山　なアに、その……そりやお前。

桂子　私の手紙はどんなでせう、一度も差上げませんでしたわね。

守山　お前は、手紙をくれないでも、お前全部がみんなこの僕のものぢやないか。

柳……守山義雄

花柳……桂子

酒はサクラ

清酒

櫻正宗

當口りよし
醉地心よし

宮內省御用達

山邑酒造株式會社

潑溂たる初夏を彩る吾社の映畫陣

野村芳亭監督
「3善人」
岩田祐吉主演

牛原虛彦監督
「進軍」
オールスターキャスト

島津保次郎監督
「多情佛心」
オールスターキャスト

五所平之助監督
「新女性鑑」
オールスターキャスト

重宗務監督
「都鳥」
柳さく子主演

野村芳亭監督
「緑の朝」
岩田祐吉・筑波雪子主演

林長二郎主演・高尾光子助演
「月形半平太」
冬島泰三監督

林長二郎主演
「三味線草紙」
竹内俊一監督

阪東壽之助主演
「滅び行く武士道」
小石榮一監督

中根龍太郎監督主演
「奴道中」

犬塚稔監督
「闇後日譚」
阪東妻三郎主演

伊藤大輔監督
「一殺多生劍」
市川右太右衛門主演

近日公開

松竹キネマ株式會社

中座「受難華」の舞臺より

暗い木の下のベンチ、何處からともなく青い光がさしてゐる。

―日比谷の夜―

前川　あなたの話を冗談にして仕舞ふのは結局あなたが幸福になれることだと思つて下さいゝえ、うそです。

壽美子　うそぢやない、あなたには御主人があるぢやありませんか。

壽美子　主人なんぞすてゝ仕舞ひますわ。

前川　そんなお考へなら、何故僕に妻を捨てろと云はなかつたのです。

壽美子　妾のためにそんな事をしていたゞいては、勿體ないと思ひましたわ。

前川　そんなら、僕だつてその通りです。僕はあなたに御主人を愛していたゞきたいのです……。

水谷……壽美子

梅島……前川俊一

角座六月の新聲劇

「海の隼」五幕十場

同 舞臺面の一部

富士野の伊織の娘春江
辻野の佐野屋惣吉
小波の八幡屋忰銀之助

名越の覺円和尚
中田の三木原伊織
藤本の土屋主水正

帝國キネマ大傑作

仇討天下茶屋

松本白三郎三役主演

阪東豊昇　東良之助
中村梅太郎　千草香子　青木芳美
松葉笑子　共演

監督　山下秀一
監督　佐藤樹一郎
脚色　上島量
撮影　塚本成治

姙娠のお方に警告

安産を望まれる方難産流産の癖
初産を恐れる方は

産婦人科専門諸大醫有効御證明

木津けなし丸を

是非お服みなさい

昔から有名な産婦専門の家傳藥です

効能

惡阻が治る
流産もせぬ
胎毒も取れて
浮腫が引く
體内を温める
お産が輕い

できた子達は丈夫で美しいと日那様も大喜びです

各地藥店にあり

藥價				
五拾錢	壹圓	貳圓	參圓	五圓拾圓

腹痛トンプクニ本舗ニサンタリン

大阪高麗橋東詰

西野自在堂

電話東三九一番 ◎ 振替口座大阪一五七番

六月の角座出演に新聲劇が市内
手選軍両の發出へーレリ奪爭所關

劇聲新の月六座角

「代時りぽきていお」

和歌浦の三郎の妻光子・鈴木の
伊・郎三海東の田中・孝逸木鈴
郎伍山上の川

涙花座六月の淡海劇

上……「親　類」の舞臺面

下……淡海の松本市太郎

樂太のお種の父與平

名代の御料理
電氣旅館
天王寺公園
電話自一三三四至一三三七番
大阪一の割烹店
氣分情緒風味

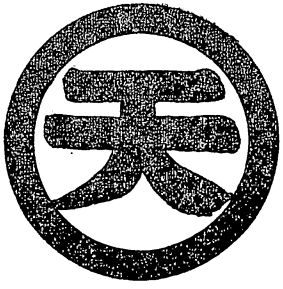
ヒゲタ醤油
九州樽詰
二リットル壜詰
御近所の酒醤油店にて御買求を乞ふ

進呈

九升樽詰一挺お買上毎ニ

宇治・ほうじ茶

香保里一罐宛



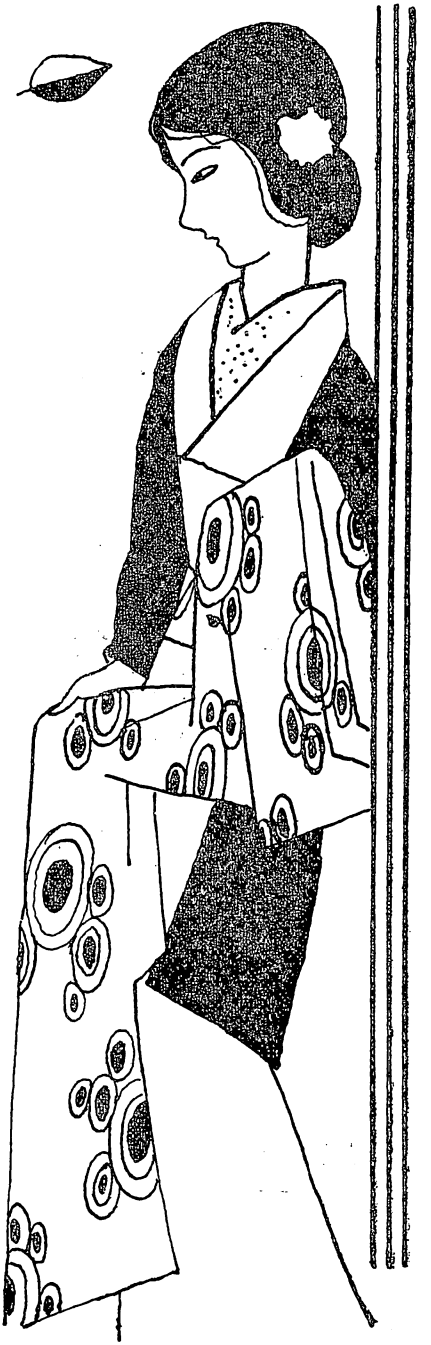
淡口ノ親玉

日本丸天醤油株式會社

大阪市東區高麗橋詰町

發賣元 柿浦佐一郎

電話東四二五六八三二二



小道具・小裁

貸衣裝

素人演藝會
宴會の催物
春秋温習會
婚禮の衣裳

松竹衣裳部

本店
大阪市南區久左衛門町八
電話 南四七一一番
八一八番

東京支店
東京市淺草區並木町十五
電話 淺草五五九九番

（其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい
御來客の御相談に應じ便利よく取計ます）

涙花座の淡海劇

上……「或る日の父さん」
淡海の父さん鈴木彌三郎

下……「二つの影」
淡海の會社員松島

—五月二十三日より六月三日まで—

辨天座の舞臺へ一年振りで出演したし

熊谷・山田・久保田等の大衆新派劇

上「故郷の家」下「懶魔艶」の舞臺面ですす

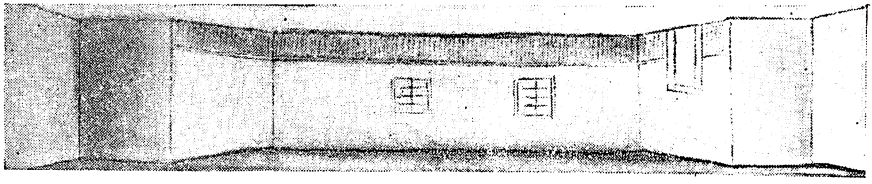
月刊·戲劇研究·雜誌

第四年

六月號

戲劇

第三十三輯



中座六月興行上演

原

中村吉郎
大關格合作

第一場　大改新報社編輯室

明治三十八年九月六日日露講和談判が日本側に不利な結果になりさうなので、國民は頓に昂奮してゐる時である。新報社の編輯室には事あれば直に活動をする意氣込みの少壯記者が机に凭れて明け易い夏の夜の夢を結んでゐる。編輯長の高橋光威は机を二つ並べた上に蒲團を布いてまだ醒やらぬビールの醉ひに所謂新聲雷の如しである。嵐の前の靜けさといふ情景が漲つてゐる。と曉の靜寂を破る號外の鈴の音、同時に群衆のどよめきが起つて來た。素破事だと一人の社員は身を起して

敬

三幕十場

青木茂

階下へ呼かけて給仕にその號外を取りにやつた。命を受た給仕は號外を手に息を切らして上つて來た。

『ヘイ號外、秋本さん日露講和談判から偉い事が持上りましたぜ、東京が燒打と云ひまつせ』

皆身を起して緊張した。

『我社も危いぞ』

『うちの社の前にも群衆が大勢取卷いてゐるぞ、コリヤ油斷がならん』

營業部長がたゞならぬ顏色で上つて來た、寢てゐる高橋に他社は已に號外を出してゐるから我社も同樣に出して呉れ、若し號外を發行してくれなければ我社の新聞を賣捌店は受付けないと騷いでゐるとヤツキとなつて高橋に迫る。階下では大勢の爭ふ聲と部長〳〵と呼ぶ聲がするので部長は階下へ走り大聲で怒鳴

りつけるのが手に取るやうに聞へてゐる。

當時の大阪新報社長原敬が悠然と上つて來た

表は群衆が大勢騒ぎ立てゝゐるものだから裏口から這入つて來たが然しやられた方が國家のためにはいゝだらうよ、國民が恁う義憤してゐるのを見ると敵國でも戰爭を續ける餘裕があると認めて講和談判にいくらかいゝ影響が與へられるだろう、そう思ふと新聞の一つや二つは潰れたつて……太ッ腹が躍如としてゐる。

ドヤ〳〵と賣捌人が大勢駈上つて原敬を取卷いて直接談判だが冷然と構へた社長の原敬は更に號外を出さうとは云はない、賣捌人は此社の新聞は一枚も賣らない事に異議を唱へる者は一人もない、果てはこんな講和談判に贊成するのは國賊だ、賣國奴だと罵つた、其處へ社員が大阪にも燒打が初まつたと報告に來た、原敬は決心の色を見せてキッと立上つた。

『では諸君一言答へて置く……、吾々は諸君が最後の一人になるまで吾々の是と信ずる主張は斷じて枉げない、講和談判は此際飽迄も進行させるのが日本の爲め國民のためだ、原敬は何處迄も唱へて止まぬのだ、倒れるまで主張して止まぬのだ』

自若として云ひ放つた、賣捌人等は憤慨して階下に去つたが屋外の群衆と一緒に猛烈な喊聲を上げた。原と高橋は緊張した面持ちで。

第二場　首相官邸應接室

龍虎の繪を描いた屏風の引廻された見るからに、人を威壓する一種の雰囲気の此室、室内には四五人の筋骨逞しい和服姿の愛國會會員といふ壯子が首相との面接を待つてゐる、やがてフロック姿の白髪宰相原敬が出て來て目禮を交して椅子についた。會員等の用件といふのは、皇太子殿下の御渡歐をお止め申さうと吾々二十萬の會員の御願ひを聞き入れる事が出來なければ、吾々は身命を賭してもお引止め申し上る。吾々二十萬の會員は、殿下御出發の當日二重橋から東京驛迄の路上に頭を並べて平伏して、御見送り致すからその頭の上、體の上を殿下の御馬車が踏越えてお通り下さる事をお願ひ致して置きます、と云ふのである。更に他の一人は……。

『その節は責任者に危害を加へるかも知れませんから、豫め御注意申しておきます』

原敬は一寸緊張した體だつたが、

『承知しました、ではそれだけですか、多忙ですからこれで失禮します』

冷靜に返つた原敬は平然と立上つた。

『一寸お待ち下さい、もう一言伺ひたい事があります、その責任者と云ふのは』

と彼等の一人は首相に詰め寄つて行つた。

『それは私です』

原敬はキッパリと云ひ放つた。さうして泰然自若として去つてしまつた。會員達は慷慨悲憤に堪えざるもの丶如く、腕を張り唇を噛んでじつと原敬の去つた方を睨んでゐる。

第三場　原首相の私邸書齋

前場に引つゞいた未明か兎に角、さう日は過ぎてゐないらしい書齋の窓の近くに置かれたテーブルに向つて、フロック姿のまゝ原敬はペンを走らしてゐるさうして書き終ると、四邊を窺ふやうに見廻して、書いた紙片を机の抽出に仕舞込んで固く鍵をかけて、ほつとしたやうに息を吐いた、死を覺悟して竊に遺言を認めたらしい。

第四場　同　茶　の　間

朝――長火鉢の横で原敬の夫人淺子が朝刊を讀んでゐる、森久保作藏が茶の間の障子をそつと明けて這入つて來る、早朝からの來訪で夫人はびつくりした樣子である。

『年をとると兎角氣が短くなりましてね、併し閣下にはお變りはありきせんか』

内外共に充分身邊の護衛に注意するやうに夫人に注意した。

『でもねえ、いくら注意をして下すつても、どうかと思ひますの、御自分の方で覺悟をきめてゐられるんですものね』

『よく解りました、あんたは偉い流石は閣下の奥さんです、だがそれはそうとして外部の事ももつと注意して貰はんといけませんな』

云ひながら森久保は電話を借るので立ちかけたが、夫人は女中に岡警視總監を呼び出すやうに命じた、やがて卓上の電話は丁度岡總監を呼び出してくれた、森久保は恐縮しながら受話器を取上げた。

『君、首相閣下の護身のことだがね、……警戒を嚴重にしてくれ玉へよ』

夫人の前では云ひ悪いので後で官舍の方へ行つて話すと電話を切つてしまつた。

『奥さんのお耳に入る積りぢやなかつたのですが、年が寄つたせいか一層氣短になりましてね……餘計なおせつかいをやくんですよ』

故　原　敬

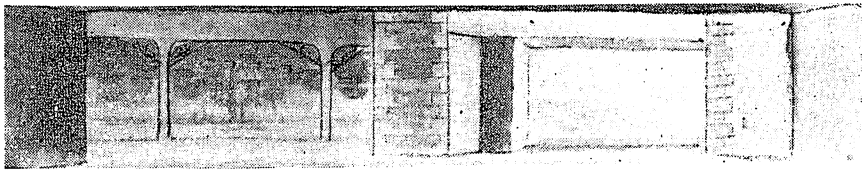
『まあほんとうに御心配くださつて恐れ入ります』
そこへ書生が來て森久保を首相の所へ案内した。

第五場　同　應接室

長閑な朝日が室に差込んでゐる、靜かな如何にも落ついた部屋だ。
森久保が案内されると、フロツク姿の原敬も這入つて來た。
森久保はせか〳〵と、ある日日蓮信者の骨相學者が首相に對して不吉な豫言をしたので、充分身邊に注意して自重してくれと哀願するやうに云つた。
『君も知つてゐる通り、刺客は護衛で妨げるものではない』と原敬は伊藤博文や星亨を例にとつて、いくら身邊を護衛して貰つても、刺客は絶えず隙を狙つてゐる、狙はれる方は、さうさう注意の屆くものではない、皆咄嗟の間にやられるので要するに天命だと、暗に自分の覺悟を仄かしたが、自分として決して油斷はしてゐない、と森久保の親切を感謝した。所へ大正の彦左衛門、三浦觀樹將軍が軍服姿でツカ〳〵と這入つて來たさうして森久保が自分と同じ目的で來てゐると知ると、將軍もなんとなく顏を曇らした。
『どうだな、君も身邊を充分警戒したら……』
と迷信と笑はれるかも知れないが、西南の役で敵彈を防いで自分の命を救つて下すつた觀音の守本尊を、肌身放さず身に附けてゐてくれと、將軍自ら首相の首にそれを掛けてやつた。
そこへ淺子夫人が將軍へ挨拶に來た。
その時あわたゞしく執事が、刺客が西園寺公爵邸を襲つたことを岡警視總監から知らせがあつたと報告した。
『わしの云ふ通りだ。一寸も油斷がならない』
三浦將軍は不安氣に改めて首相の顏を見た、原敬の緊張した眉宇の間には決心の色が見えた。

第六場　重臣會議

宮中のある重要會議をする室で、元老、重臣連が今日の會議の中心人物である原首相の來るのを待ちあぐねてゐる、やがて首相が出席する。
『遲刻して濟みません』
小聲であるが謹嚴な態度で席の前へ進んだ。と宮内大臣が立つて、皇太子殿下御渡歐の儀は既に決定してゐたのであるが元老及び重臣方に反對が出た爲に、今日重ねて審議を煩はす次第であると云つて、原首相に殿下御渡歐の說明を促した。
『吾が大日本帝國は、今日に於きましては已に東洋の一小帝國に非ずして、名實共に世界五大强國の一に躍進した次第であります、而して……』
と原首相は、歐洲大戰後世界の大勢は非常な變化を來した事であるから、皇太子殿下には今日の歐洲諸國の大勢に接しられる



事に依つて他日何等かの御參考になりはしないか、と信じて御渡歐の儀を上奏したと設明した。

『私は原總理大臣の御說には同感でありますし、併しながら今日の吾が日本の思想界はどうでありませう、非常に惡化してはゐないでせうか……』

元老筆頭の川島公は皮肉を交ぜた言辭で質問の火蓋を切つた。

『不逞の民と云ふものは何れの世に於ても根絕することは不可能でありませう。恐らく過去の閣下の內閣の時代にもあつたことゝ愚考致します』

例へ不逞の徒が居やうとも事を未前に防ぐ爲めに、最善の努力を拂ひ全責任を負ふと云つた。が直と川島公はその責任についての質問を發した。

『全責任とは文字通り全責任にして、說明の限りにあらずと思ひます』

と原首相は凜乎として云ひ放つた、と今迄默々としてゐた山下海軍大將はやをら立上つて總理大臣は責任は文字通り責任であると云はれたが、今迄も度々あつたが今日の如き重大會議の席にも遲刻されるやうな人には責任觀念は少しもないと痛論し本問題に就ては反對だと唱へた。

『山下大將は私の遲刻を辛辣に非難されましたが、遲刻と責任とはかく簡單に比較して批評すべきものだとは信じられないのであります。山下大將の目から御覽になれば御同樣に私も風月を友として樂隱居に見えるかも知れませんが』

と暗に元老連を樂隱居視して、本日は本會議と密接なる事件があつて遲刻したので、總理大臣は國事多忙で睡眠時間さへ滿足に攝られないと、大に自己辯護をしておいて、殿下御渡歐の儀に贊成御後援下さいと辭を低ふしたが、重臣達は口を緘してゐるので、例へ本會議で否決されても自分は全責任を負ふて、此事を斷行あらせられるやう、重ねて上奏致しますと云ひ切つた原敬の顏には輝きが見えた。

第七場　第四十三議會

普選卽行案の可否で天下の輿論が沸き返つてゐる時の第四十三議會の衆議院議場の幕が明いた。

『楢井柳太郎君』

と議長が麾くと、拍手に送られて當の楢井柳太郎が元氣に滿ちた態度で登壇。『よう千兩役者』『二代目大隈』と彼の所屬の憲政會側から應援すると、政友會側からは盛んな罵倒の聲が

飛ぶ。滿場ドツとばかり笑聲が起る。

『諸君靜肅に願ひます』

議長の聲に場内は次第に鎭まつた。楢井龍太郎は悠々として、憲政會が提出した普選卽行案が議會で通過しないと云ふことを充分知りながら、その是非を天下に問ふといふ口實で前議會を解散し自黨の政權の下に自黨に有利なる小選擧區制に依つて總選擧を行ひ絕對多數を得て、危機に瀕せる內閣の命脈を維持せんとする政友會一流の黨略に出たのは、橫暴非立憲の甚だしい事であると詰り首相の答辯を求めて降壇した。議長は『原總理大臣』と麾いた。

原敬は例のフロツク姿を壇上は現すと、例の如く反對黨の彌次が飛ぶがそんな事は馬事東風、サツサと原稿を展げて答辯を始めた。

『諸君、普選法提案者の云ふ如く現政府は決して普選に反對するものでなく、寧ろ必要な場合には、女子にも參政權を與へんとすら希望してゐるのである……』

で選擧法を改正して一歲も經過せぬのに再び急激なる改正をするなどとは、立法の威信を保ち憲法の森嚴を高める事が出來ない……。

『聲が小さくて聽こへない、もつと大きな聲で願ひます』

と反對黨から出た半疊だ。

『聲の小さいのは生れつきであります』

原敬は口を尖らして白いハンケチで顏を一拭き、議場は此の首相の頓智で破れるばかりに笑聲怒聲が騷然と起つた。

又議長の注意がある。原首相は語を續けて普選案は天下の輿論であつたから議會を解散して輿論に問ふたが、政府に贊成して政友會は再び最大多數黨の勝利を得たので、政府は橫暴でも非立憲でもない。と反對黨を見渡して口を一文字に結んだ。

『橫暴だ、橫暴だ』

『原の白頭を毆れ』

忽ち議場は喧々囂々、亂舞活劇の巷に化さうとした、議長は止むなく、振鈴で議事中止を命じた。

第八場　大塚驛々員室

夜の十一時と云へば都會と違つて大塚あたりでは閑散なものだ驛員は歸り支度をしてゐるもの丶、助役の小林が讀んでゐた本に依つて盛に原敬の事を罵つてゐるので、その周圍を取卷いて傾聽してゐたが、驛員の一人橋本はくさぐつたいやうな表情をして……。

助役の持論に反對を唱へた、橋本驛員は原敬は政治に立脚して總てに超越してゐる、その恬憺たる處に痛く心服してゐるらしい。

『橋本さんあんたの見方は間違つてゐます、第一普選に反對し……黨の利益の爲めに議會を解散させたぢやありません

か、彼奴は決して國家のためを思つてゐる奴ぢやありませんよ』

と突然口をはさんだものが居た、白面の青年で轉轍夫をしてゐる中岡艮一である、橋本驛員は何が小供に解るものかと云つたので中岡は昂奮した。

『君なんぞに僕の心の中が解るものか、僕は名を殘す事をして見せます』

と中岡はかう云はずにはゐられなかつた、餘り中岡と橋本驛員の口論が激しく成つたので同僚は見兼て仲裁をし、橋本を促して歸つてしまつた。中岡の昂奮は中々に鎮まらない、上着の下から小林から借た金で買つたと云ふ短刀を取出して云つた。

『小林さん僕は決心しました、名を後世に殘すために……』

『そりや偉い、君は理想家で同時に實行主義者だ、橋本はあんな事をいふが、この政黨罪惡史を讀んで見たまへ、原が如何に惡黨であるかよく解るから』

と助役は今日問題になつた本を中岡に貸た。中岡は今まで自分を待ち草臥れてゐる、弟妹をゆり起して慈愛の言葉を掛けながら、決心の顏色で室内をヂロ〳〵眺めながら……。

第九場　東京驛入口

不夜城の大伽藍東京驛の乘降車口、警官や刑事の警戒の眼は光る、平日にない有樣だ、旅立つ人、見送る人々で場内は目の廻るやうな雜沓さである、學生姿の中岡艮一は多少オド〳〵した態度で人目を避け場内へもぐり込んだ。

やがて高橋驛長の先導で原敬は小川國勢院總裁、中橋文相、元田鐵相、高橋幹長等を隨へて何時になくニコ〳〵としながら、場内へ歩を運んだ。

『大變だ』

『首相が暗殺された』

『原さんが、やられた』

警官、家の子郎黨達は目の色を變へて右往左往一大混亂が起つた。

やがて原首相の刺客中岡艮一が蒼ざめた顏色で警官等に引立てられて出て來ると、激昂した壯士連が罵聲を浴せて摑みかゝらうとするのを警官等が制しながら、中岡を引立て行つた。

平民宰相原敬の六十六年の奮鬪史は此處に閉ぢたのである、時に大正十年十一月四日の夜。

第十場　原邸奥の間

八疊の室には原首相が痛ましい永久の眠りの姿を白羽二重の蒲團の中に埋めてある、香煙低く、孤光淡く原敬の顏を照してゐる、淺子夫人は喪服を身に着け、黑髪は既に切られてゐる。

『診察の結果を申上ます、鋭利な刄物で前方から右肺部を刺され、その刀尖が心臟の右傍に達した爲め、それが致命傷となりました』

と正木主治醫の聲はうるんでゐるが謹嚴な口調で報告した。今

更に淺子夫人は涙を押えた、次の間に控へた諸大臣初め弔問客は一樣に歔欷に咽ぶのみである。

岡警視總監は原敬の亡骸の前に平伏して、

『首相、私の警備の不行屆で誠に申譯がありません』

と泣いてその靈に許しを乞ふた。森久保は諦められぬ事であると男泣きに泣いた。

『貴方には隨分お世話になりました、でも是れが運命なのでございませう』

淺子夫人はかう云ひながらもソツと涙を拭ふのである。

『しかしあれ程決心して居られた首相の事でございますから何か遺言を書き殘された物でも藏つてはないでせうか』

と云ふ森久保の言葉に、淺子夫人も思ひ當るものゝ如く原敬の弟、誠と夫の書齋へ搜しに行つた。果して『淺子と誠と立會の上、卽時開封すべし』と云ふ遺書が出て來た。

『皆樣の御好意に對してお知らせしなければならないと思ひますから、直ぐ此處で讀む事に致します』

淺子夫人は誠に讀んで呉れと云つた。

遺言狀

一死後位階勳等の陞叙授爵等の有難き思召あるとも絶對に御辭退申上ぐる事。

一葬儀は鄕里盛岡に於て執行し儀仗兵を附せらるゝ等の事あるも之を辭し香華の寄贈も辭すべし

一葬儀委員長は、高橋光威氏に依賴し、同氏差支あらば山田敬德氏に、兩氏共都合惡しき時は適當なる人

一墓標には位階勳等を不記、單に原敬墓と略記する事

一死亡廣告は別紙の文案に依る事

一葬儀時刻は夕方の事

一葬儀は母や兄の例に依りそれ以上の事をなすべからず

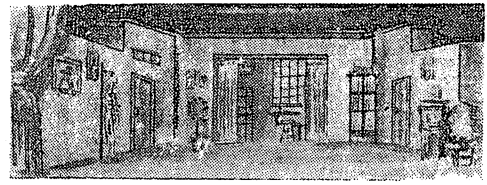
大正十年二月二十日

『何處までも平民主義の人であつたんですね』

と感歎の聲が發せられた。そこへ書記官長高橋光威が歸つて來て、宮內省へ出頭して宮相から聞いた宮中の御樣子を語り、御授爵等の御沙汰は首相平素の意志を尊重して御取計らひ下さるであらう。首相は何處までも一平民として、終始一貫その意志を通されて、さぞ本懷でありませう、と高橋光威は咽びながら報告を結んだ。一座は皆一樣に頭を低くたれて一言もない、增上寺の鐘が深沈として鳴響くうちに歔欷の聲が次第に高つて來る。

配役

原敬	伊井蓉峰
高橋光威	小堀誠
森久保作藏	梅田重朝
三浦觀樹將軍	菊波正之助
川島公爵	伊志井寬
松山公爵	南一郎
西公爵	橋本清三郎
山下大將	柳永二郎
宮內大臣	山田巳之助
楢井柳太郎	伊志井寬
中岡艮一	白河青峰
岡警視總監	梅島昇
原夫人淺子	喜多村綠郎



作者　益田太郎冠

アニーメトブレク

緒田和村

科學とか文明とか言ふ奴が、煙草の煙のやうに擴がつて大かい地球をぐる〳〵覆ひに覆ひ包むに連れて、世の中の仕組や出來事が益々煩雜になつて行く今日此頃、これは又馬鹿々々しい程單順で、しかも食入りに飽れて物が言へない位ベラボーな盗難事件が、紐育から少し離れた或る町に起つた。

うちないのとうなすやあるまいし、嫌にふやけた、そのくせ身なりだけは最新流行のピカ〳〵ぐるめの紳士のポケットから、おもむろに掴み出された財布、その中から悠々と一枚の名刺を引出して、取次の女中兼コツク兼看護婦といふ物々しい肩書付のベギーが差出す銀盆に置かれた。紐育××會社取締役××株式仲買業と麗々しく書かれてあるフランクロー夫妻の訪問が、突如、此の小靜かなる田舍町の空氣を震はすのである。所で一寸此邊で此の家の主人ドクトル、バークレーを紹介しておかう。

先生は元來女に甘い、尤も、女に甘いといふ事は男性にのみ與へられた特權ではある。そのくせ召使ひにだけは至極峻嚴は、所謂薄禿のお釋主人の體面如何なく發揮してゐる田舍紳士の典型的人物である。

ロー夫妻は一歩室内に入つて、直ドクトルの生活が乱脈である事をみて取つた。それも其の筈、都會に住む貴婦人は、夜會と芝居と訪問で神經衰弱やヒステリーは、貴婦人の誰もが五度の八度起す道樂みたやうなもので、自然其の餘德が郊外に住むドクトルの甘い儲けにもなつてゐたのである。そして假に、政府がヒステリーに稅を取るとしても、彼の女等は決して痛痒を感じないのである。それは男が拂ふ役目になつてゐるから――これは勿論フランクの愛妻グレースが、ドクトルを待つ迄の徒れ〳〵草の言葉だ。

一個の骸骨の標本がある。人間斯の如く裸體、こんなに骨ばかりの裸體になつてしまつては、素人眼には男女の區別すらつかない程醜い姿だ。吾々とても恐らく同じであらう。若し違つてゐるとしたら、それこそ違つた動物だ。すると肉の世の如何に短きかが今更の如く歎ぜられ、さてこそロー夫妻の新計畫が發表される機に達したのかも知れない――。

實は私の愛妻がクレプトメーニアといふ病氣に……ナ、成る程クレプトメーニア……無意味に盗みをする病癖、いや、判りました。幾等貴方が、青い〳〵蔦に裾を包まれた噴水塔の影から白絹の樣な肌を月明りに玩ぶ乍らと、奥樣を戀した時の愛切語をお續けなすつても駄目です。宜しい、私が引受けました貴方のお名前に傷付かぬやう極祕密に癒して進ぜませう。だから、貴方のやうに、さう興奮なすつてはいけません。

よろしい、二時にホテル、ホテル、ハンドームですね、必ず御診察に參上します。ナニ、盗みをする犬態を見せて下さる？これは願ふてもない幸ですな。大いに參考になります是非、併しいくらクレプトメーニアでも貴方の錢入や時計をそんな所に置いた所で……。ナニ大丈夫？盗癖發作の時には夫の物も他人の物も見境かつかないから……あゝ、そうですか。成る程ね、では實驗材料として私も、此の財布を此處へ置いておきませう。何に、中味は今日銀行へ預金しやうと思つて五百弗這入つてゐるのです。そら、御覽なさい。此

の通りチヤンとあるでせう。二時にホテルへ御診察に行つた時御返濟願へれば結構です。ぢや此のマントルピースの上に置いておきます……。

好漢ドクトルは頭中皺だらけにして喜んだとてシヤンの盜癖發作狀態が、艷然繪の如き不可思議な姿態を見るだけでも見ものだのに未だその卜錢儲けと來てゐるからたまつたものではない。

ではクレプトメーニアの發作が起る迄、此方で何か熱心に話してゐる風をしてゐませう……はアそうですか、よろしい、では此の繪の說明を致しませう。で、此の繪は世界的の大家レンブランドの解剖の講義といふ彼二十五歲の時の筆に成つた名畫で、光線の大膽な色の穩かな、ブラシの柔かで明確な…まだですか？。ナニまだ？もうそろ〳〵ですつて、……そうですか……その……あゝ弱つたな話が無いが、……貴方のやうに、そう、それから〳〵と急き立てられた所で……そ、それが何ですよ、彼レングランドが、卽ち其のレングランドで……あゝ、そろ〳〵始まりましたあゝ盜つた。實に手際好いものですな……。

肝要の所ですつて！そ、そりや話もしますが、發作狀態をよく見極めないと……そのレングランドは……一寸〳〵私も少し見る餘裕を與へて下さいよ。……あゝ、成る程、如何にも鮮やかですな、そして、御自分はちつとも盜ゲを意識してゐらつしやらないやうですね、實に巧き入つた大發見だ。確にコロンブス以上の發見ですよ。……はい、確に引受けました。では、午後二時にホテルバンドームへ必ず參ります。左樣なら。左樣なら奧さんどうぞよろしく〳〵

あゝ失敗した。今日二時にはブラウンと將棋を差す約束がしてあつたのだつた。こりや飛んでもない……そうだ。相手は金と時間に制限のない椋鳥だ。二時の約束を三時に延してやれ……。

扨て皆さん、電話をかけるドクターの顏は猛烈に變化して行きます。頭の中はジヤズと色電球の交錯で、ゴチヤ〳〵に火花が散る。そしてドクターの憤怒、悲痛、驚愕の顏を見ながら彼の電話をお聞き下さい。……あゝ若し〳〵……ホテル、バンドーム？あゝ支配人さん？御機嫌よう、そうです、ドクター、バークレー、エ、ハハハ……、忙しいので御無沙汰を……フン〳〵フン〳〵あゝ若し〳〵忙しいから電話を切る？冗談でせう。呼出された君の方でペラ〳〵と饒舌つて此方の話を……あゝあのね、貴方の所へ一昨夜から宿つて居られる紐育のミスター、ロー御夫婦が先刻私方へ來られましてね、實は、二時に私が其方へ診察に……ナニ、そんな人はゐない。そりや今歸られたばかりだから、お留守の事は判つてゐますが、一寸傳言して下さらんか二時のお約束を三時に……、そ、そんな人は宿泊してゐないそ、そんな筈が、ミスター、ロー、LOWEローですよ、紐育の金持で……部屋番號は七十四番ナニ、居らんそ、そんな事はない、確に貴方ところに宿つてゐると……ナニ、七十四番には老人一人だ變だな、さ、妻君の方が患者なんで、イ、エまだ診察してゐないから金は受取つてありませんがね、……エ、、何紛失物は無いか？そんなものは別に……アーツ畜生ッ、イヤ貴方を畜生だと言つたのぢやない。違ふ〳〵そう怒つちゃ不可ん。ウーン惡黨奴、イエ惡黨と言つたのは貴方ぢやない……ゞー詐欺師泥棒、騙り、外道、惡魔、クレプトーニア〳〵見す〳〵俺の眼の前で居る間で五百弗……ウーン馬鹿々々……馬鹿ッ俺の馬鹿ッ……。

配役

コック兼女中兼看護婦	西條靜子
ペーギー	
ドクトル、バークレー	小堀誠
紐育のフランク、ロー	柳永二郎
豪商	
同夫人グレース、ロー	水谷八重子

中座六月興行上演（瀬戸英一作）

囚界はめぐる 怪談小車草紙 一幕

河上馨

――漫文的に――

此處に一人の男がありました。名は孝次つてんですが。成程名前だけを聞いてゐると、どうしても、孝行息子か正しい人のつけさうな名前ですが。事實は更に奇なりつてんですから、此の男、生れつき、大の放蕩者で、飲む、うつと云ふ、實に以て手におへない、俗に世間で云ふ、やくざ者です。

朝起きるつてえと、すぐ、酒にくらひつく。ほんのり醉が體に泌みて來ると、早凝つと家に腰を据えてゐる事が出來ないといふ代物だから、論にも、くいにもかゝらない、世の廢物しろものの――ようしたものでこんな野郎でも女房はありました。そうすると、女によくふられたりする人もかなり澤山あるやうですが、決して失望したり、落膽したりするにはあたりませんな。俗に、タデ喰ふ虫も好き〳〵、と云たつ處で、谷潤の小説ではありませんが。第一こんなやくざ人間に女房があるなんて、受け取れない事ですが事實ですから仕方がありますまい。

此奴、毎日、酒に醉つてバクチに負て來ると、家に歸つて、女房お房ちやんをいぢめやがるんで。くそ！いまいましい野郎ですな。一つ横んぴたを、びんとひつぱたいてやりたい樣な氣にもなりますよ。そんな事に、理解ない人達は、さうまでは思はないか知れませんが、事實は、僕なんざァ、たまんないですよ、本當に。

その孝次の野郎、今日も、ぜいたくに蚊をさけて、蚊帳の中で、のほほんをきめこんで、チビリ、グビリとやつてゐるんで、あの酒をね。そしてアルチユウにマンセイした顏に、ギロリと嫌などんぐり目を光らしてね。女房のお房ちやんの歸つて來るのを、待つ間の酒の舌つゞみ……。

處へ、女房のお房ちやんが、うかぬ顏をして歸つて來たんでさァ。孝次は直ぐ房ちやんに云ひかゝりましたよ。そうすると、孝次の顏は見る〳〵間に變りましたね。

己れの思ふ壺にピンと來たから、孝次は顏色を變へましたよ。そして斯んな事を云ひました。

『何だ〳〵、その顏は何だ。糞面白くもねへ、僅か一兩や二兩の金の工面も出來ねえで、女房面が凄じいや』

何と皆さん、こんな大きな口のきける良夫ですかね。男の權威此處まで光れば意味はありません。よくねえしろものは根性からよくねえに決つてゐますからね——。だが皆さん可愛想なのは、お房ちやんでしたよ。全く同情しますね。

房ちやんも、歸る早々、眞向こうがみがみと來られた日にや、あきれて言葉も二の句が出ませんよ。默つて泣いてゐましたね。可憐なるべき哉、不遇の妻。ホホオ……。

るいはるいを持つて集まる、古人は良い事を云ひました。

『孝次居るかい？』——ぶらりづんと這入り込んだ一人の男、どうせろくな男でないと思つてゐると、案の定、これもやくざの万吉といふ奴。豪らさうに、肩で風を切つてやがらァ、世の敗物代物が——。話がどうまとまりやァがつたものか、和合一決。——二人妥協しやァがつて、ウン〳〵と鼻聲になりやがつたと思つてると、その筈、又賭場通ひと洒落れやがるのだから、此奴何處まで、やーくーざーに出來上つてやがるんだ、と思ひましたよ。こんな中にも、お房ちやん、フンともスツとも云はない。不思議、アラ不ー思ー議。

二人表へ出やうとしやがつた。先に出た萬吉『ファツ！』とんきやうな聲で、でんぐり返りやがつた。其處には房ちやんの妹のおつやが立つてゐたんで、此奴何の見違ひで、でんぐり返りやがつたのかつて？お房ちやんに見へたのよつて……そんなに屹驚りする程優しい奴ぢやァねえに。

孝次と、おつやの會話の中に、又不思議が持上つた。それもその筈、今日そつちへ、房ちやんに、むしんにやつた筈なのに、房ちやんは來ないと、おつやが念を押す。こいつてつきり不思議、不思議、そんな筈はないと云つても來ないものは來ない。あゝ妙な具合になつて來たぞ。そしておつや姉さんに一度會ひたいと云ふ。それで一所に内へ這入つたら、居る筈のお房ちやんの姿が見えない。

突然闇に凄光一線、ピカリツ——萬吉、キヤツと又ひつくりかへつた。二人にはそれが解らない。

『佛壇が、佛壇が——』萬吉の聲は怖へてゐる。それぢや二人も氣になると云ふもの。

『兄さん！』聲に孝次、『わつ……』三人の全身ピリゝと、冷水を頭からザアーとかけられたやう。恐怖心がますます濃くなつて來る。

『姉さんは此處にゐない』——『何？』——『確に居ない、姉さんは死んでゐ

る』三人ををそふ恐怖心、愈々急なりつて譯でさア。

『姉さんは、お前さんの身持を、大變苦にしてゐたのだから……』センチメンタルも此處まで來れば悲慘だ。

萬公の薄氣味惡い事おびたゞしい。こそ〳〵退却ときやアがつた。と入口で又人とバツタリ。『ウワー助けてくれ……。』

みつともない子供ぢやあるまいし。突當つた男の口から、いよ〳〵お房ちやんの死んだ事が傳へられた。――三人棒立の體に、頭腦亂れて、恐怖全身を駈る――。丁度前の塲がこれでしまひました。一寸一ぷく。その間にお茶なりと。

（二）

月日は巡る小車の――此んな文句がありましたつけ。一寸茶を飲むでゐる間に一年が經ちました。

お房ちやんが井戸に身を投げてから一年の時が巡りました。

今ぢや、孝次とおつやが世帶を持つて、いなせな文句ですが實の所、二人はむかしは戀仲だつたんで。姉の死後女夫になる。世間にはこんなのがはきあつめる程あります。

悪人ひるがへつて善道にかへる。やく、ざ者の萬公も、今では、かたぎですとさ。おつやと萬公が話してゐました。矢張り曲つた根性の直りつこねえ孝次の身の上に付いてね。

其處へ、孝次ほろ醉ひで、惡友、仲居に見送られて御下館と御座つた。と歸つて見るとこはそも如何に、二人差向いの、うちとけ方。ムラ〳〵と起る嫉妬の炎。よくある奴でさア。

二人は飛んだ迷惑、この上なしといふ奴。

今では、まじめに成つた萬公が、埒もない孝次に意見の名セリフ。聞く孝次の莫迦臭い事。變にいがみ文句で二人に難くせをつけにかゝりました。飛んだ處で、飛んだ難くせ。

女夫喧嘩の序幕の木頭。幕の開くとしまるのと同時の一幕。女夫喧嘩犬も喰はぬ、こいつアよく云ひましたね。

こう書いてしまへば、いたつてかんたんですが、中々女夫喧嘩にもデリケートな所がありますよ、全くネ。

おつやも、一時の意地昂奮から出るの、別れるのとしやぎり立てる。こいつ妙なもので、女からそんなに高飛車に出られて來ると、心にむず〳〵未練氣たつぷりでも、『はい、どうぞ、さう仰有らずと』てな具合には行きませんでな、人間てものは、後にも先にも感情が立働くもんですから。

『出て行くとも、別れるとも、手前の勝手にしろい』

から元氣でも、斯んな事を云つてしまふのが男の意地ではあります。

その塲の成行でさア、運命の神の顯

戯は、瞬間〳〵に、人間の四邊りをう上〳〵してゐるんですから、たまりませんや。

『出て行きますとも、誰が、誰がこんな家に……』

全く、えらいかんしやく玉ぢやありませんか。

斯うなつて來ると萬公も、凝つと第三者でみつめてゐる譯にも行かない。

マア〳〵と仲裁の勞を取るのも、これ人情といふものです。

これで座も白けて來る。居てよたつて、氣まづくて、夫婦のにがみきつたしかめ面の見くらべつこも變なもの。

『では御免よ』とじんわり下るのも人としての氣轉のきかし處つて譯か。

さて皆が歸つてしまふと、後は休戰和合の二人つきりのかち合せ。はてどんな風向になるかな。測候所ぢやあるまいが、互に顔色を、ながし目にも見さぐり合ふ。夫婦愛し。いゝもんですな。直に破裂もするが、完成もする夫婦愛。

二人は直にいろ〳〵の話に時を移してゆく。

それからの二人の會話に、有し日の懷しき戀のローマンス。

鳥渡も今の場合こんな文句は、ふさはしくありませんな、何が——戀のローマンス——だつて、まアさう云はぬもの、卽ち婚者として、かゝる體驗ある人にこそ、よるなるべし——てな譯でさア。

運命か？宿命？時刻うつさずして和合した二人が、はいと出掛るべく準備半に、あら不思議、幻想か？事實か。故なきに、孝次の袂、宙にふわり〳〵さながら誰かに引かれてゐるやう。奇怪その有樣に、孝次は叫んだ。

『何をする！今引つ張つたろう』

聞くおつやは、引張つた覺え更に御座んせんにと、表情にそれとなく一杯。

——不思議——。

おつやの顔が、お房に見へる。引つ張るお房が、おつやに見へる。

迷ひの夢のさめた孝次、女の强念の恐ろしさに戰慄した。そして自分の罪の悔を、面一杯にして、口から吐き出る言葉にも、惡黨らしき言葉はなかりけりと云ふ奴でさア。

又しても引戻すお房の恨みの顔。サツと振り上げた庖丁の下は地獄なれ。

『人殺し……あれ……』おつやは果敢なく、男の爲めに……キリ〳〵と眩暈を感じた孝次は井戸へザンブリ……怪談小車草紙の長演ではこれにて…。

配役

一主人幸次　小堀誠
一お房の亡靈　喜多村緑郎
一遊び人萬吉　伊井蓉峰
一お房の妹おつや　喜多村緑郎
一番太郎　雲岡光次郎
一遊び人正太　菊波正之助
一遊び人釜吉　伊志井寛
一女將お久　英太郎
一遊び人秀助　藤井六輔

中座六月興行上演

菊地寛原作
川村花菱脚色

受難華

二十一場

川上利夫

重なる役劇

長沼照子　英太郎
澤桂子　花柳章太郎
菊岡壽美子　水谷八重子
前川俊一　梅島昇
藤木信一郎　白河青峰
守山義雄　柳永二郎
林健一　花柳章太郎
望月敏三　伊志井寛

序幕第一場

『螢の光、窓の雪……』と彼方の音樂室から合唱する聲が、ゆるやかに聞えて來る——春淺き校庭の芝生の上に、互に將來の夢に胸を躍らす、三人の乙女——。

微笑ましき、彼女等の唇から、次ぎの樣な約束が成立つた。

〃三人が皆結婚してから、一年目に、三人で會つて、結婚生活の報告をすること〃

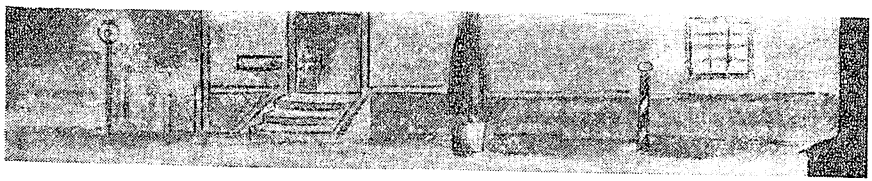
桂子。——照子。——壽美子。

溫かき慈母の懷ろにはぐくみ、樂しかるべき學窓に成人なせし彼女等の總てに、かくも罪なき約束が成立するとは。——實社會に何の知識もなき、あどけなき乙女の口から、頭腦から、斯うした宿命的にからまれる誓約がかもし出されるとは。

芝居の序幕は此處に開かれて、此等罪なき乙女三人のやがてたどるべき——人生行路——への旅へ……。

嫁ぐ者。——去る者。——羨む者。

『螢の光、窓の雪……』袂別の哀調をこめた唱の音が、彼女



等の身邊に…ゆるやかにたゞよひはじめた。

序幕　第二場

其處からは、ずつと淺草一帶を見下す事が出來た。——

場所は上野驛構内。夕靄は靜かに四邊を抱擁してゐる。

待つ者。待たるゝ者。今人目をはばかるかのやうに密かに、相寄つた男女の影。男は前川俊一、女は先の誓約者の一人、菊岡壽美子その人であつた。——二人の仲には淸淨そのものゝ如き戀が宿されてゐた——。だが俊一はすでに妻子ある身だつた。俊一は今日仙臺へ旅に登つたのである。壽美子も又、躰て卒業と共に大阪へ歸つて行く身であつた。壽美子はさつきも、生涯結婚する事に就ては極力否認した。寄らんとして寄る事の出來ない二人は、——淸く別れてしまひたい——只それだけが、今の彼等にとつては唯一のあきらめだつた。

沒義道な運命にからまるよりは、總ての思ひを忘失して、たゞ淸く別れて行く——其處に人生の涙す淸淨さが在るのではあるまいか

發車のベルはけたゝましく鳴り響いた。凝つと夕靄の底に懷しき人を見贈る壽美子の瞳には白いものさへ光つてゐた。

第二幕、第一場

照子の居間。——チューリップが春の陽をあびては我物顔に咲きほこつてゐる。今照子と壽美子は桂子の結婚披露の招待狀を受取つたのであつた。——萬障御繰合せ——その文面に二人は沸きつけられた。照子には早、藤木と云ふ婚約者が出來てゐた。だが、壽美子にはそんな人はなかつた。で勢ひ——萬障御繰合せ——と云ふ文字が如何にも自分を皮肉つてゐるかの樣にさへ思はれた。互につい先まで同じ教室の人と成つてゐたのが今は早、人の妻として嫁す友の身の上を想つて離れて行くやうに思はれて、彼女は淋しく感じた。そして目前の照子も、すでに婚約者が出來てゐるのではないか。嬉しさに微笑んだ友の顏を寂しくうち見まもるより他に道がなかつた。

二人して桂子にお祝ひをする。嬉しい時。羨むべき時。悲しむ可き時。惱むべき時。その時々に、永久に變りなき音をきざむ時計を思ひ浮べて、桂子のお祝ひとして時計を送る事に決めてしまつた。二人が斯うして互に友の身の上に就いて想をはせてゐる時、

照子の婚約者、藤木信一郎が靜かに這入つて來た。藤木と照子とが相對する時、第三者の壽美子は其場を退かなければならなかつた。——藤木は近日に英國大使館附として渡英しなくて

はならなかつた。婚期を前にする二人に取つて、如何に悲しむべき離別だらうか。相愛し共に思ふ二人の心にも、二年間の離別は大きな恐怖でなければならなかつた。其爲めには二人は、互に胸の中をさぐり合はなければならなかつた。藤木は出發前に僕のものになつてもらひ度い。――二人の間で、事實上の結婚をして貰ひ度い。そして、二人丈けしか知らない、二人だけの約束をかためたい。

照子さん……。照子は藤木のそんな事を云ふ心持ははつきり判つてゐた。――どうでもあなたのいゝやうにして……。照子さん……藤木は歡喜して照子の肩を、きつく抱きしめた。

第二幕、第二場

時計が鳴つてゐる。照子と壽美子の送りとゞけた時計が、新婚の彼等を羨んだかのやうに――。

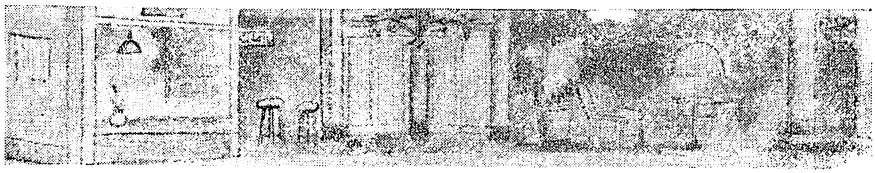
守山は會社が引けると走りたいやうな氣持で一杯になつて桂子の懷ろに飛び込むのであつた。戀愛結婚でない二人には、曾て戀愛結婚に歡喜した者より以上の、歡喜と幸福とを感じた。子供〳〵した桂子のあどけない新妻振を、守山には可愛くてならなかつた。桂子は桂子で、想像以上の結婚生活の實際に、恍惚として蕩醉してゐた。そして結婚を否定した壽美子の事を思つて、三度目の結婚を斷つた彼女に、幸福の實際を報らさんとしたのであつた。守山の入浴の後に、はからずも良人の洋服のポケットトの中から、藝者が守山にあてた手紙を發見した。桂子はグラ〳〵とめまひを感じた。藤木はその辯解の爲めに、如何に陳謝しなくてはならなかつたか。何等社會に知識ない桂子は、良人の言葉巧な解答に、それを尤もとして聞入れなければならなかつた。

自分の愛する者を、獨占したい初生な桂子には、守山の心盡しの陳情に、すつかり卷込まれてしまつたのであつた。

第二幕第三場

桂子は、彼女の家の前を行つたり來たりする一人の女の姿を見とめた。その婦人は守山に會ひたいといふ事を召使の者に聞かされて、不安と輕い嫉妬を感じ乍ら、その婦人に會つたのであつた。以外な話をその婦人の口から聞かされた時、桂子は、前日ポケットから手紙を發見した時よりも、より以上に愕然とした。守山が未だ京大に學んでゐた時分、その婦人の家に下宿してゐたのであつた。其間に二人の仲に戀が生じ、その上、子供まで出來たのであつた。今その子供は重病に惱むでゐる。

以前別れた時は、手切金として五百圓を受取つたのであつた



が、今瀕死の床に在る子供の身を思つては、言はれた義理ではないが、守山の情にすがるより外に道はないので、それで女の身としておこがましいが、恥も外聞も忘れて情にすがりたいむねを打明けたのであつた。それを聞かされた桂子は茫然と自失するより外にすべはなかつた。彼女は立つて、千圓の金を持つて來て婦人に渡した。婦人はそれをこばむだけれど桂子は、男の罪悪を泌々と感知して、只一人の同情ある女からとして、金を婦人に渡したのであつた。婦人は感泣してその場を去つた。

桂子は、守山の事を思つて、呪詛とも嫌悪ともつかぬ腹立たしさを感じた。そして、直ぐ自動車の用意を命じた。

守山が歸つて來た時、早邸の内に桂子の姿らしいものを見出す事が出來なかつた。只テーブルの上に、桂子の置手紙丈けが寂しく彼を待迎へてゐた。

第三幕、第一場

照子は久々に桂子の實家へ尋ねて來た。先日の一件から桂子は實家へ歸つたきり再び守山の元へ歸るまいとまで決心してゐたのであつた。守山はあれから再三再四、桂子に歸つて呉れるやうにと願したが、一度決心した桂子の心は元へは戻らなかつた。

初終の樣子を聞いた照子は何とかしてことに子供まで出來てゐる桂子を元のサヤへおさめやうとせつに桂子を說いた。此時照子の父があはたゞしく訪れて來た。以外な悲報をもたらして——

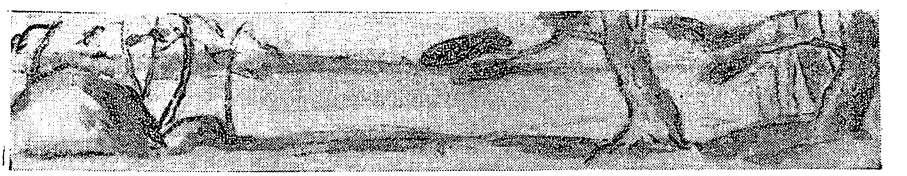
それは照子が身も魂も共にゆだねた戀人藤木信一郎の客死の電報だつた。瞬間の夢は破れ、見るも痛ましき運命の奔流に照子はその場に昏倒してしまつた。それをまの當り見た桂子は共に倒れたのであつた……。

劇は此處に進展して、いよ〳〵高潮に……

第三幕、第二場

此處は高松栗林公園——靜かに逍遙する男女二人、それは林健一と、菊岡壽美子の新婚旅行の途であつた。あくまでも結婚を否定せし壽美子が今新妻として、樂かる可き旅の路にある。

——だが自分の思想と正反對な、無智な良人林健一の事を考へるとどうしても心からうちとける事が出來なかつた。樂かるべき旅が、彼女にはむしろ懶い旅でもあつた。事毎に壽美子に取入れられる可き彼の動作が、又壽美子をしてよけいに憂鬱たらしむるものであつた。夫婦愛——そうだ、その文字のあてはまるものは、ゴウも見いだす事は出來なかつた。そぐはない心の



はへ。此處にも人としての惱みがあり、宿命があつた。

第四幕、第一場

少しでも妻の心を、自分に和しめんと、日夜それのみに健一は頭をしぼつた。世の中は物質に依つて支配されるものとのみ自覺する彼は、今日寶石屋から日本中に二つとなきダイヤの指輪を買取つたのであつた。今では大阪社交會の明星とまで讃へられる壽美子を嬉ばしめん爲に。けれど壽美子は、彼の思ふ程嬉びもしなかつた。彼女は今日中之島公會堂で開かれる講演會に行くと云ふのであつた。健一も一所に壽美子と歩きたかつた。けれど壽美子はどうしても同伴を許さなかつた。

昔に返る女學生の氣持――さうだ妻となつた今日でも、過去を偲び今の生活を忘れるのが、彼女に取つて唯一の幸福でもあり、あきらめでもあつた。意に反した生活の總てに、かくも心の中に盡きせぬ懷しき昔日の影が宿つてゐたのか――。

第四幕、第二場

中之島公會堂裏口――外套の襟を立てゝ、足早に去る一人の紳士。それは誰であらう、前川俊一その人であつた。

それに殆び入れ違に壽美子が急いで裏口に駈付けて來る。守衛に向つて、――前川先生にお目にかゝりたいのですが、けれど守衛の言葉は壽美子に取つて、失望と落膽をあたへるものだつた。――今橋ホテルへ――さうだ、直にも行つて俊一に逢はなくてはならない……。

第四幕、第三場

今橋ホテル玄關内――左右にエレベーター、俊一の居間を聞くと壽美子は心も空にエレベーターにたくして上へ――。

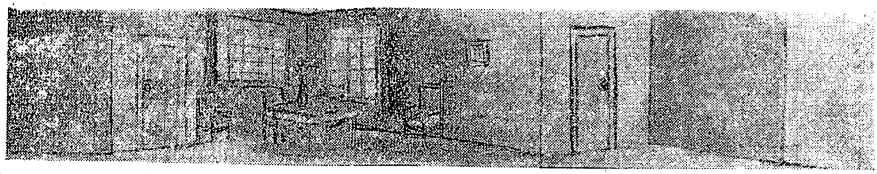
と、反對のエレベーター上り前川俊一が降りて來て外へ急ぎ早に立去る。運命の奔流――此處にも人生の宿命がかもし出された神の惡戯――。

壽美子は受付より事の總てを聞いた。――前川の奥様が重態との電報で――。

會はむが爲めに來たものを。――一度ならず、二度までも、僅な事の行違から――壽美子は茫然たるを得なかつた。そして何故か彼女は頬に溫かいものを感じてゐた。忍びやかに背後のエレベーターの音が彼女を促した。

第五幕、第一場

照子は今夢心地の中に、無き戀人藤木と言葉を交してゐた。今の彼女には、藤木は此の世に亡き者とは、どうしてもうけと



れなかつた。幻想の藤木は、照子に日記を讀ませた。其處にゑがかれた文字の總ては、一々照子の胸を衝つ藤木の心の一切であつた。それを讀む照子は涙なしには讀み續けられなかつた。瞬間の幸福、迷路の幻想は忽ちにして破れ、たゞ後に殘るは寂しくも果敢ない自分の姿許りであつた。軈て背後に溫かい人の息を感じた。それは友人望月の情熱に燃えた瞳であつた。

望月は藤木とは無二の親友だつた。そして二人の戀の理解者だつた。その望月が今新しく照子に戀人として、はたまた婚約者として照子にその返事の有無を正すのであつた。その厚い眞情に照子の心にうるみ始めたのは今先ではなかつた。照子にもそれを求める望月の心持はよく判つてゐた。何處〳〵までも眞劍な望月の態度には照子の心の動かぬ筈はなかつた。

――堅い約束が動作となつて……互にしつかと相抱擁したのはそれから間も無い時だつた。

第五幕、第二場

風の吹くかすかなる音に、遠く波の響が松の木を通して聞へて來る。美しい月が海面に輝り映える。

〃何で似合ふで、その衲襠が、男こさへた
嫁ぢやもの〃

何處からともなく唄ふ聲が、聞へて來る。松の木に戯れる二人の男女。時として松の木も愛情の楯と成るか？

何事にも嬉しい樂しづくめの新婚當時。先日まで戀人に別れし照子が、今、その戀人との仲の理解者たりし望月と結婚して月もぬたむ沼津の濱邊に、愛の交響樂をかなでるとは？

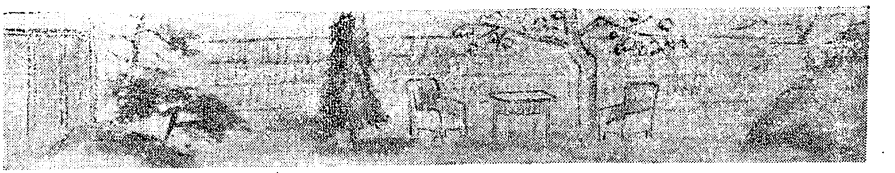
緣程不思議なる、又味なものは他になし。月の夜に、二人が熱情を言葉にこめて囁く睦言は、岸邊に碎く波の音にも嫉妬はあつた。藤木が華やかなりし過去の外交官生活の告白に、處女とのみ信ずる照子の前に、童貞であらぬ自分の罪を如何に悔たか。けれど以外や、處女とのみ信ぜし照子が、藤木の爲めにその誇りを。……

照子は泣いた。――望月は絶望の爲めに、危く倒れんとした期待は此處に敗れたり――あゝ悲痛な聲のみが、ほとばしる。最前の睦言に變る今の歎き、何のわだかまりなき――波の音のみが響く……。

第五幕、第三場

――文化の醉。都會の誇。帝國ホテルの一室。

妻に容れられなき林健一、良人にそぐはなき壽子――。



此程家庭的倦怠と矛盾は又とあるまい。男が女と相反對せる時、女の氣を取入れる事の如何に困難なるか？又女の愛せざる男を愛せんとするの如何に至難なるか？

壽美子には、たより無きお坊つちやん良人健一を思ふと少しの愛情も呼起す事が出來なかつた。只表面斗りの夫婦と云ふに過なかつた。

對座してゐても、鳥渡の幸福も嬉こびもなかつた。この沈滯せる二人の中へ、突然、戀愛の破綻者、照子の出現。——

懷き二人の胸に、そも如何なる言葉が交されたか？

壽美子の胸に泣きくずれし照子の口から、はたして如何なる事が訴へられたか？

第六幕、第一場

〃汝等いかに困難なりとも希望せよ……〃

望月の應接室に今通された斗りの美しい壽美子の眉根がビリ〳〵ひきつゝた。——

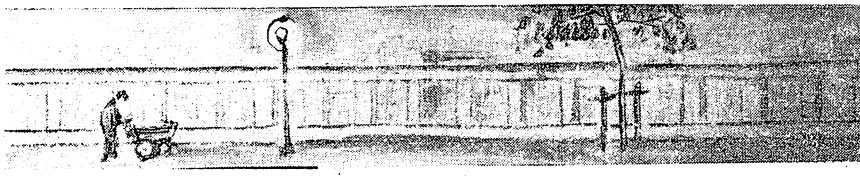
望月と壽美子は間もなく、前者は眞劍に、後者は冷膽に會話を續けてゐた。問題は云はぬもがな照子の事であつた。

望月は先夜沼津の海岸で、はからずも照子とあゝした事から一時の昂奮の爲めに、照子を實家へ歸るやうに云つたのであつたが、後で考へて見ると、輕率だつた自分を非難するより他に道がなかつた。そして心ひそかに照子の身を案じてゐたのであつた。たとへ一時の昂奮にもせよ、大切な人間を弄弄するの如何に非惡なるかを壽美子は望月にせめた。望月はたゞ陳謝するよりすべがなかつた。壽美子が充分望月の後悔せるを見屆けて——それでも無理にその塲を辭さんとした時、突然行手のドアーを開けて立つた一人の紳士、そも誰あらう、寸時も忘れ得ぬ懷しの人前川俊一その人だつた。二人は餘りの事に言葉も出なかつた。互に凝つと顏と顏とを見合す斗りに……。

第六幕、第二場

常磐木の間から、櫻花月の光に浮び出されてゐる。靜かな日比谷の宵である。二人は偶然にも久方振に巡り會つたのであつた。

壽美子が多年の惱み……それは今夜を待つ爲めの惱みではなかつたか？愛せんとしても愛する事の出來ぬ良人への彼女の心彼女は前川に絶ち難き愛着が藏されてゐたのであつた。總ての告白を、壽美子の口から聞かされた前川は、事の總てに茫然たるを得なかつた。人の世の妻としての如何なるものかを說く俊一もさすがに心苦しかつた。聞かされる壽美子も又感なきにあらずであつた。前川は人として眞の道に生きる可きを說いた。



最後に、共に離れし二人が、如何に結ばれんとしても、それは運命が許さぬ事であつた。結ばれざる者は永遠に離れる可き者であつた。

その二人の會話に涙して聞き入る一人の男があつた。それは愛されざる不遇の良人林健一その人であつた……。

第七幕、

良人守山の無情を恨み暮す桂子は、たゞ生れた幼子にのみよつて救はれてゐた。——或日、以前千圓をあたへし婦人が、其の厚情にむくゆる可く、千圓の金を持つて禮を述べに來たのであつた。そしてはしなくも良人守山の近狀を詳細に桂子に物語つたのであつた。その話に依れば守山は、すつかり近頃は謹愼して、ひたすら桂子の許しある日を待記てゐると云ふのであつた——。

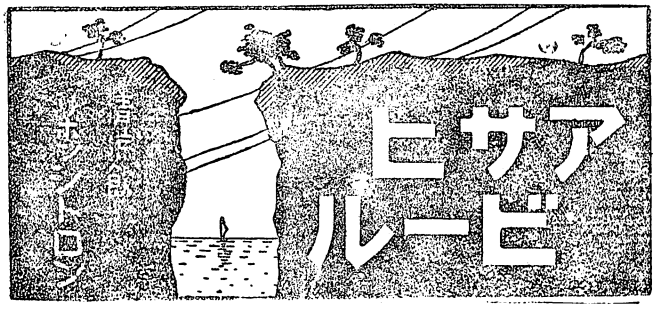
其れから間もなく、桂子は公園に於て、目の當り親子の愛情の如何に尊いかを見せつけられた。今自分の手に抱く幼子の顔を泌々と打見まもつた。——この子に父親がない。あゝ……さうだ、さうするんだつたわ——。

前後の罪を悔し守山と、總てを默忍せし桂子の再び甦へる愛の結合——此處で劇はまつしぐらに大詰へ——

第八幕、

愛の甦生——照子は再び望月の愛の懷に抱かれ、離れし者の人生發作の動起より結合へ林健一と壽美子の握手——。

幾多運命の惡戯に奔弄されし若人達が、今新しき愛の巢に相擁せんとする時、遠く異國に旅立たんとする評論家前川俊一、それを見送る只一人の女性、壽美子の瞳に新しく涙するものがあつた〃最後まで清く別れませう〃上野の驛で言ひ交した言葉が、そも永久の別れの言葉に成らうとは運命は運命を追ひ、幾多の惱みも解結して幸福への道へ。——送る者、送らるゝ者。今出帆を報ずる氣笛が高く鳴り響いた。



六月の道頓堀から

中座と辨天座

高安吸江

此一月から五月まで引續き休みなしの奮闘、敢て孤軍とはいへませんが、少くともピカ一式活躍を首尾よく終つて旅に出た雁治郎のあとへ、久しぶりの新派大合同は、此間の浪花座に於ける河合の成績から推して時宜を得た策戦だと肯かれます。

それで此機會に新派についての感想を何か書けとの御註文ですが、それは今の私には少々無理で、私の手元にはそういつた考察に關して必要な材料があまりに少過ぎるのです。イヤそれ處ではなく、今度の中座だけでも、それに就いて語るべき何ものをも持たぬ、といふ力が當つて居ります。其出しものにしても、小車草紙をはじめ受難華、クレプトメーニア原敬と、何れも私には初見榮で舞臺はおろかまだ原作さへ拜見して居ない始末ですから、萬事御推察を願ひます。それは不都合だとおつしやるなら萬已むを得ません。併し私等のやうに日々俗務に追ひまはされてゐる者は、中々そこまで手をのばす程の餘裕もない事を考へて下さい。それで出來るなら古典劇、歌舞伎劇でも左樣ですが、此等はあまり知り過ぎてゐますから別として、一般に新作物では強て其内容を前以て知ることを求めず、所謂白紙の態度で見物したいと私は思ひ又そうして居りますが、此場合殊にその第一印象に尊重すべきものがあります。現代の若い人々は出來たぼかりで、まだ〳〵我國へは輸入もされてゐない映畫に向つて驚歎すべき豫備知識を有つて居られますが、私はそれと反對で、故意に富な知識を有つて居られますが、私はそれと反對で、故意に何等豫備知識を求める事を避け、それとなしにどの程度まで作意を理解し、且興味を感じ得らるゝかの點について常に考慮して居りますが、新作物に對しても多少それと似た態度を

とつて居ります、斷つておきますが、キネマと劇とを混同してお話するわけでないのを御承知おき下さい。

こんな譯ですから見物後の感じならばともかく、豫想なんかは到底不可能なことで、又その俳優にしてからが、一切の歌舞伎臭味から脱すべく最善の努力を拂つて、出來るだけ自然に何處までも内面的に精力を集中し、艶やかでしかも澁い喜多村や纎細で器用だが小型で、丁度サロン、ミュージックの感がする伊井にしても、隨分暫く見なかつた間に變つてゐるでしやうし、かの巧緻で壮麗な水谷も恐らく以前の八重ちやんでなく、もうとつくに其殼を破り去つてゐるでしやう。

他の諸優も亦同樣の事と察せられますから、此等の特色ある各個が其後如何なる進境を示し得たか、彼等群雄が如何にして融和せられた一團となり得たか、その又一團が我等の昔見た新派劇なるものを如何に變化し、果して是を向上純化せしめ得たか。是等の諸點は今度の中座に於ける尤も興味深い問題であつて、私は白紙式の見物によつてそれに關する何等かのヒントを得たいと望むのであります。

辨天座の方は技藝座の人々が中心になつてゐるやうですが輔導役の壽三郎等もその一人である點から見て寧ろ次の時代會員劇とでもいふべきです。こゝで上演せられる種々の出しものゝ中で純舊劇ものとして狐火やお染があります。是等は無論人形振でありましやうが、元來人形劇の模倣になつて始められた此振も、後には人間が人形の眞似する愚さ（？）を悟つて、之を廢しやうとした人もありましたが、今日では漸く理智的に傾いた大衆の興味を引くべくあまりに非現實的と見られる一方、その超人的形式美に復活的淘醉の威力を認め得るやうにもなつたのです。無表情に近いが美しい顔と、軟かい線で出來た麗しい容姿をもつひとしが、今度此役を演ずるについて、習作以上に如何なる點までの効果を示し得るかといふ處に面白味があります。

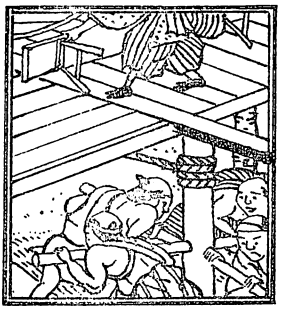
柔かでしかも底力のある太い線の持主、政治郎が演ずるだらふと想像せられる藤彌太や辨慶も是に似た事が考へられます。彼等の外今回出演の會員並に會自身に就て小生も會員である關係上、多少共何か一言あるべき筈の筋合ではありますが、今はまだその時期でないと信じますので他日に讓ることに致します。

序ながら安宅の松に就て一言します。大正十五年に飯塚氏が編せられた歌舞伎細見を見ますと、安宅の松は明治卅七年に市川中車の爲めに新しく脚色され、十一月京都歌舞伎座の中幕に上演せられたと出て居ます。併し私が鐵頓堀浪花座（？）で女團洲と稱せられた、故市川粂八のを見たのは、上記よりも約十年前の日清戰爭頃で、勸進帳は宗家（無論九代目

は健在でした）が許可せぬから近松のをやるのだとの話で、私もその時はじめて癈靜胎内捃を一讀したのです。尤も古い事ですから其時のが中車のと一字一句同じとは申兼ますが、大體に於て近松通であつたから、少く共中車が元祖とはいひ得ないわけです。

此の胎内捃は謠曲安宅の裏を行つた形で、勸進帳を蔭にし金剛杖で打つかはりに足蹴にするなどゝ一寸目先が變つて居ますが、それは近松の創意ではありません、但いつものやうに謠曲からではなく、こゝでは幸若舞が種に用ひられたのを面白いと思はれます。舞の本とがし及び笈さがしでは、安宅の松で判官の一行は先づ松の葉寄する童共から、松の名や、平泉の順道を尋ねます。其答から關の樣子を物語る中で、義經の相を、向ふ齒反つて猿眼に、小鬢の髮の縮んで色の白き（色白に猿眼向齒少し出たる、近）などと云ひ、それから先づ辨慶一人出かけ其結果次第で悄びか最後の貝吹く約束をするのも皆同樣です。唯此關所では勸進帳が首尾よく奏功して無事通過を許されますが、後に直江津で直江の太郎から笈の中を探がされる條に、判官が却つて貝を吹く事になつて居ます。

判官打擲の件は普通刊本には、異本（上田萬年氏拔打舞の本）にだけありきすが、義經記には二ケ所も出てゐます。舞の本と義經記、並にそれ等と謠曲安宅の比較、其後先等に就て種々話すべきこともありますが、餘談ですから又の事にし此處で切り上と致しませう。



十年一と昔といふ。

新派の人々に寄す

高谷　伸

熊谷次郎直實は十八年は一と、昔夢だ。夢だ、といふ。

今のやうに世の中の速度が早くなると、五年一と、昔三年一と昔、しまひには、『昔といつたつて先月のことだがね』などゝ言ひかねない時節がくるかも知れない。

まごまごしてゐると、三十四歳の私が、老人の部へほりこまれる。

その時節に『新派』川上音二郎以來、角藤定憲以來の新派はだう見たつて『新』ぢやない。四十餘年の歴史があるのだ

伊井蓉峰、河合武雄、喜多村緑郎、等、等、等、實にうまい。立派な俳優だ。このうまい役者が、ともすると駈だしの新劇俳優に押れやうとする。

けしからぬ話である。だが、無理のない所もある。

何故だ。

『新』といふ字に、災されてゐるんだ。

今の經薄な世の中では、敢て、女房と疊の表に限らない。何だつて新しければいゝと考へられてゐるんだ。その癖、すこし目先をかへれば新しいで通る世の中なんだから甘い。

拙くつても、粗雑でも、しまひには芝居でなくつても新しければよいときては、伊井、河合、喜多村なんて巧い役者はみじめなものさ。

『新派』だなんて、ちつとも新しくねえ。と言はれりや一言もなからう。『新』の字に災されてゐるんだ。

現代に於ては、手つとり早く、資本家はわるい奴、プロレタリアは偉い。といふことを、宣傳文の物眞似的進行で見せりや新しいんだ。

落ついて味はう。そんな暇はねえ。ぱつたりでいゝんだ。若い奴をサモワールにかけて沸騰させりや新しいんだ。

實のところをいふと、新派だつて、似たり寄つたりの道を歩いてきたのだつた。

飛ぶ唄といふ劇で、困りものゝ數へ唄が唄はれるより、もつと露骨に、川上音二郎はオツペケペヱを唄つたんだ。

劍劇が舞臺を氣塲と心得云々といふ宣傳文に先だつて、明治二十四年の川上一座の番附には『壯士擧而必死働』の七字が『佐賀暴動記』といふ藝題の頭に、のつかつてゐる。

熱といふよりは押の一手で見物にぶつかりや藝は第二だ。際ものを捉まへりや藝より早い。といふ手もあつた。

しかし、劇は政治運動や社會運動でも無ければ、スポーツでも無いことは言ふまでもない。

新派は文壇の自然主義の風潮と並行して、寫實的効果をめざして進んだ。そして、それは條件附きの寫實主義ではあつたが特殊の舞臺樣式を完成した。

伊井、河合、喜多村、井上正夫の巧さは、だん〴〵蔭の光りを添へて行つた。故人高田實、藤澤淺二郎、村田正雄など

〻共に、明治四十年代の黄金時代を現出した。三百年の傳統を持つた歌舞伎でさへ、たぢ〳〵とするばかりの勢ひであつた。

世は大正を經て昭和となつた。

伊井河合喜多村三頭目をいふ名でますます巧緻な藝を深めて行つたが、後につゞくものは花柳章太郎外二三を數へるばかりであつた。明治末期から大正へ、各種の新劇運動が勃興した。映畫の普及はすばらしいものであつた。歌舞伎の傳統の力は牢として拔くことができなかつた。

『新』を求めるなら新派より新劇だつた。單に安價な涙を誘ふのなら、新派より映畫の方が手つとり早かつた。こゝのある芝居はやはり歌舞伎だ。三方より挾み擊をかけられて、こゝに新派不振の聲が起つた。

新派の人々の藝を見ると、次第に圓熟期に入つて毫も不振の蔭のさすべき理由は認められない。それに何故かうなつたか。

そこに時代の惱みがある。

明治といふ時代は、純粹日本から、アイノコ日本への過渡期であつた。昭和時代のアイノコ日本を形成するまでの、まだ日本らしさの多分にあつた時代であつた。新派劇はこの時代に生長して現代劇を表榜してゐたのである。

現在といふものは、瞬間の後には過去になる。

昭和といふ時代が來た以上、劇は昭和時代を表さねばならないといふ要求が出るのは當然であらう。

しかし、私は一得一失はあつても、いろいろの意味で、殊に日本として、昭和より大正が、大正より明治が、よりよき時代であつたといふ回想を持つ。

新派の人々も言はず語らずのうちに、かうした氣持を持つてゐたかも知れない。

齒の浮くやうな生活に、馬鹿々々しさを感じはしなかつたか。しかし、時代は刻々として齒の浮くやうな青年を造つて行く。

新派の惱みはこゝに無かつたか。

氣障つ氣たつぷりな現代の生活より寧ろ江戸時代の生活の方が純粹だ。

新派の演ずる脚物には、かうした心理がはたらいてゐはしないか。

伊井、河合、喜多村などの人々の描き出す明治時代の生活は私には特殊の魅力を感じる。

それは國貞ゑがくではなくとも、清親ゑがく風景畫である鏡花の筆の人情の世界がある。

婦系圖、南地心中、通夜物語などの美しさがある。

藝妓風俗の美しい一面をはつきり描きだし得るのは、新派の人々を除いてはあるまいとさへ思ふ。

藝妓といへば、蹠季末法の不見轉より知らない人にとつてはそれは輕蔑そのものに當るかも知れないが、本當の藝妓を知るものには、その美しさは百倍する。

少くとも明治時代は、現今のやうに、日本人をさがすのに、骨の折れる時代ではなかつた。

新派の人々はこの最後の日本人をあらはすのに特殊の手腕のある人たちである。

同じ明治時代でも華族の御家騷動を扱つたものは、時代違ひの主題が、風俗だけ變へて現れてくるだけ、矛盾の馬鹿らしさが見え、あまりに子役を使ひすぎるものは涙の强要が不快になるが、意氣と張とのピンとくるものは流石に捨てられぬ味がある。

しかし、これとても、花街そのものが墮落し、藝妓のよさを知るものが、次第に乏しくなり、河合、喜多村百年の後には、如何なるかわからない。

それを考へても、かうした特殊のものは今の間にしみじみと味はつて置きたいものだ。

私は、先月浪花座で、河合武雄の今樣かしくを見て、膝を打つたものである。新派の味はこゝにある。

しかし、新派の藝は勿論それだけではない。たゞ、現代に迎合しやうとするよりは、遡つて江戸時代に歸つた方がその藝を生かすものだといふことを斷言する。

伊井でも河合でも喜多村でも立派な江戸ツ兒だ。日本人だかァイノコだかわからない者をやるより、本當の日本人をやつてくれ。

髷ものでも、伊井の次郎長や、喜多村の大瀨の半五郎は今だにうまさが目に殘つてゐる。

この意味で、受難華より小車草紙を歡迎する。

昨年東京明治座で好評を博した喜多村の怪談小車草紙は友右衛門が遊び人幸次で出てゐた。こんどは誰がやるかどんな出來を見せるか。きつと面白いものだと信ずる。

讀者倶樂部募集

讀者倶樂部は、松竹經營各座の名優と言はず新名題と言はずあるひは劍劇、新劇、新派のあらゆる俳優演劇を各自勝手に選んで公開狀なり批評なり、御自由に投稿して頂きたいのです。

○應募原稿は（二十字二十行以內、每輯十七日締切）

大阪市南區久左衛門町（松竹本社內）

道頓堀編輯部

「原敬」と新派に就いて

中村吉藏
大關柊郎

原敬が政友會總裁として、日本に初めて純政黨内閣を組織した時には、私は海外にあつたので彼の動靜をあまり知つてゐない。併し大正十年の春の議會の開かれた頃は、彼の評判は新聞紙上では、非常に惡かつた。

で、私も原敬の人物や、彼の國家に對しての効罪の如何といふことを研究することもなく、たゞ漠然と、また何となく彼に對して反感を抱くやうになつた。

併し私の彼を嫌つた原因は、たゞに彼が大政黨の總裁で、横暴であつたといふ世評にばかり因るのではなかつたやうである。卽ち當時の政友會の政敵であつた國民黨に、私の先輩で敬愛する相島勘次郎氏がゐたことが、私が彼を嫌ふ動機でもあり、また大なる原因であつたやうに思はれるのである。つまり私は相島氏を愛するのあまり政友會を憎み、政友會を憎むと同時に、その總裁を嫌つたやうである。何故といふにその後國民黨が政友會に合併されて、相島氏が政友會となつた今日では、政友會は可なり世評はよくないが、相島氏を愛するあまりか、私は政友會に好感を抱かれるやうになつたからである。

◇

丁度その時である。中村吉藏氏から『原敬』を書かないかと云はれたのは。併し私は一寸躊躇した。何故といふに政友會には好感を持つても、未だ原敬が好きになれなかつたから

である。それに私はその時まで頗るつきの理想家であつたからである。史劇などは書きたくない。英雄などをテーマにしたくない。もつと平凡な、普通ありきたりの人物を主題した現代劇を書きたい。未來に對する戯曲は書いても、現在の舞臺と妥協した戯曲は決して書くまい。どんなことがあつても自分の信じない戯曲は書くまいと決心してゐたからである。

併しかく思ふ私の心の中にも、そう理想家であり過ぎてはいけない。現實の日本の劇壇を見ろ。君の云つてゐるやうな君の好きなやうな戯曲を書いてゐたつて、また書いたからつて、劇場では上演してくれないではないか。また新劇の世界を全盛にするには、それではいけない。少しは妥協して現在の劇場で上演するものを書かねば、いつまでたつても、我々の希望する新しい演劇の世界は來ないのだ。それには英雄主題の戯曲も書け。新しい史劇も書け。それだからと云つて、決して恥ずべきことでないと云ふ、聲が心の耳にきこえるのである。それに原敬は人物としても——あの白髪蒜顔、お召縮緬の羽織に、白足袋姿——を思ひ出しても面白くないか、と私は反問したのである。また一方では或事情があつたのでとにかく原敬を書くことに決心したのである。

◇

斯くて私は作家として、彼の身の上に思ひを走らせるやうになると、漠然と思つてゐた時より劇的人物であると思はれた。第一に彼が無爵であつたことに興味が惹いたのがある。そして彼の傳記を調べたり、知人に尋ねたりすれば、する程彼に興味を覺えるやうになつた。

だから『原敬なんぞ劇になりやしないよ』といふ多くの人に對して、そんな人は、私が以前にそうであつたやうに、原敬を漠然と嫌なのだな。まだ原敬を研究してゐないのだな、と私は心竊に思ふやうになつた。そして私は彼を戯曲になる彼は立派な劇中の人物である。何等の空想を附加せず、また誇張せずとも、傳記そのまゝでも、立派な戯曲になると信ずるやうになつたのである。

私の調べた範圍では原敬は尊敬のできる人物であつた。彼は理想家でなくどうかといふと現實主義の實行家であつたやうである、だから彼は實行のできない高遠な理想を說いたり大言壯語する政治家を嫌つたやうである。常に寡默にして意志の強い人であつたやうである。彼は未來と理想を說かない爲めに反對の立場にある人達からは、平凡な政治家と見られたやうである。また彼は眞の立憲政治を確立したいために政黨の力を絕大にするために藩閥や官僚政治を排斥したゝめに横暴であり、腹黑き人間であると誤解されたやうである。併し過去時代の政治家でありながら、金も貯へず、また爵位な

ども拒んだ點から推しても、彼は決して野心家でもなく、利己主義者でもなく、常に國家の幸福といふことを考へてゐた、尊敬すべき政治家であつたやうに思はれてならないのである。彼は大に術策を廻らしたり意地惡もやつたらう。また大きな善のためには、小さな善を排擊するやうなこともあつたらう。が、併し彼は常に誠意を持つてゐた人間のやうに思はれるのである。彼は區々たる世評などに耳をかさず、自ら信ずる所を默々として斷行する、信賴にたる人物のやうに思はれるのである。

◇

以上私の批判と觀察が間違つてゐるか、ゐないかは人々によつて、どうにでも見られるであらうが、併し、彼がたゞ一平民で始終したといふだけで、私は現在の昭和三、四年に於いて、彼を戲曲上の人物とすることに意義あることゝ信ずるのである。

だから卓越個人主人公の戲曲を攻擊し、また衒氣と野心と流行とから、さかんに左傾化した作品を發表する作家もあるが、私は敢てこの戲曲を發表しても恥だとは思つてゐない。殊に歌舞伎劇全盛であり、また現代劇の不振の現在の劇壇にあつて營利劇場に上演されるものとしては、將來の新劇のために何等かの意義を有するものだと思つてゐる。

彼は野にあり、未來を說く哲人でもなく、思想家でもないまた勇敢な革命家でもない。現實の政治を行ふ一歩進歩主義の人物であつた。だから彼の思想や哲學に對して私は興味を持たない。併し彼の平民的な——或は無理に平民で押通そうとする性格に大に興味を感ずるのである。で、私は性格劇としての『原敬』を自分の思ふ通りの技巧で書きたいのであるいや何れ機會を見て書く積りである。

此度の『原敬』も傳記を基として、自分の感じたまゝを少しも誇張せず、性格劇として書いた積りである。だから筋を作らずに挿話的にして性格を現そうと努力した。これでも現在の劇場に上演するため、自分としてはいやなのではあるが成るべく劇的の場面を描出するやうにした。つまり現在の舞臺と妥協した所があるのである。そこに私としてはこの作に不滿がないことはないのである。

◇

新派俳優諸氏の演技の上手であることは世の定評である。私も實に甘いものだと思つてゐた。殊に私は原敬の上演に就いて諸君と親く接して、その上手さに一層感心させられた、これが永年の間不遇であつた。その原因は新劇や、歌舞伎、映畫等の狹擊を受けたことにもよらうが、私は第一に出しものゝ選定が誤つてゐたやうに思ふ。その例はいくらでも擧げ

て説明せられるが、與へられた紙數も正に盡きやうとしてゐるから簡單に書いてみやう。

外國に於いて沙翁劇に對する興味なども色々と變化をしてゐる。最初は翁自身が作者であり、役者であつたから、作と作者の沙翁とに興味を持たれた。併し沙翁沒後はどうであるかといふに、この興味は衣裳や道具等の考古的詮索に變化していつた。次は沙翁劇を演ずる役者そのものに依つて興味を持たれたが、近來は舞臺裝置と演出者に興味を持たれるやうになつたのである。

今日では外國でも役者の人氣ばかりでは客が呼べないのである。その出しもの〻作品のいかんによつて、常に結果を左右されるのである、人氣があるから何を出してもい〻といふことはできない。近くの例では、澤正である、その出しもの〻如何によつて、常に大入不入の變化があつた。

映畫などもその演出のいかんに依つて非常に影響が違ふやうである。だからこれから演出といふことに就て、大に研究と注意をしなければなるまいと思ふのである。才能があれば三派の頭目自身——伊井、河合、喜多村其他だれでもが、澤正のやうに演出者になるのもよからう。また新派俳優諸君は何の役、どんな性格でも立派に演出し得る、技倆があるのであるから、これから舞臺といふよりも、自己と社會といふものを研究したらば、い〻のではないかと私は思ふのである。

いふまでもなく時代は急速度で進轉してゐる。大衆は決して歌舞伎劇ばかりをよろこぶものでない。また映畫ばかりを歡迎するものでない。いやこれよりも現代劇をよろこぶ觀衆のあることを私は信ずるものである。その現代劇を演ずるに適する俳優は諸君を除いて外に多くはゐないのである。だから諸君の努力如何によつて、再び諸君の黃金時代が來ると信ずるのである。この數ケ月の市村座に於ける成功を見ても新派の世界は更に來ると思ふのである。併し市村座の成功はたゞで來たのではない。また諸君の伎倆が上達したからでもない。また人氣そのものが復活したのではない。つまり出しもの〻選定がよかつたからであると私は信ずる。諸君は最早や古い新派俳優であつてならないのである。新派俳優であらぬばならないのである。これには自分自身の立場を自覺して新劇の戲曲と新演出に努力しなければならないと私は思ふのである。

新派の本領と高速度演出

川村花菱

高速度の演出と云ふ事は、單時間に多くの場面を連續的に見せるといふだけのことでは無いと思ふ。場面の轉換も又その演出の樣式も共に高速度的に行はれる所にはじめて意義があるので、たとへば長篇小說の脚色の場合に只その原作の筋の進むまゝに從つてその通りに芝居が進んで行くといふやうなやり方は、素人にも誰にも出來る最も初步の劇化術である。と思ふ。けれど、一般芝居興行者が求める所の高速度といふものは、單に時流に投じた一つの新樣式であればいゝので、そこに劇作家が非常に苦しんで考へるいふやうな作劇法について、あまり多く考へないやうな風である。

時代を見る事、流行をつかまへる事、大衆の好みを感じる事によつて新案された興行法が、時に作者に本格的の芝居を求め、次に又高速度的のものを求める、劇作これが大きい現代の劇界について苦しみなやんでゐる所から生れる作品を鑑賞するといふ事は、劇場關係者は全く無い事のやうに考へられる。

高速度劇といふ事は、決して今日にはじまつた樣式では無いが、小山内さんが實行せられたハイスピードの芝居には、演出者の深い意圖があるが、一般に行はれてゐるレビウ式などと稱する珍劇に於いては、片田舍で行はれる新舊兩面劇と云ふ風な新派の芝居がぐるりと廻ると舊派の芝居になり、その中に次の道具が出來て又新派のつゞきをやる——かくて一夜の中に幕なしで、新派と舊派の筋が通ると云ふやうなやり方、又は幕なし三十何場ぐる〳〵まはしなどとその出發を同じうして、要は見物の前にいつも芝居がある、あきさせないと云ふ丈の方法であつて、そこに何等の藝術的なものは無

い。

芝居には幕はあるべきもので、幕合が又一種の効果をあらはす事が度々ある。幕のあるのが古くつて、幕の無いのが新しければお神樂は尤も新しい演出でなくてはならない。

私が『受難華』を脚色するに當つて考へた事は、只場面の連續に由つて、長篇小說の筋を運ばうと云ふ事で無しに、great moment of its, great play と云ふ古くからある形式を眞似て、どんな短い場面にも壓搾した芝居のあるやうにとやつて見た。只はなしだけでつなげる事を求めて避けて、一場面でも面白いやうにと考へて見た。が、結果はあまり大したものでも無かつたが、部分的には自分にも氣に入つた所がある。

ところが、この演出を見るに於て、私は新派の俳優諸君に向つて、此の高速度的の芝居をさせると云ふ事は間違つて居ると思つた。新派の人々の技藝の力は、じつと舞臺をしめて三十分でも一時間でも持ちつゞけて行くと云ふ所にある。歌舞伎の人々が、云はんとせしがと云ふ床に由つて表現する事を、新派の人々は、いかに自然に、いかに力强く此の心持を表さうかとする所に苦しんで居る。これは脚本に於てもさうであるし、演技に於てもさうである。けれど、高速度の演出に於ては、そんな事は考へて居れない。少し芝居になりかけると暗轉又は幕になつて仕舞ふ。これを俳優から云はせれば自分の本領を全く發揮する事が出來ず、見物から云はせれば極めて喰ひたりないものになる。私は、やつぱり新派は、それに由つて育つて來た立派な技藝がある以上は、それを力として生きて行かなくては駄目だと思ふ。それにふさはしい脚本を選定する事々に由つて、自分の道を進まなければならないと思ふ。

高速度必ずしもわるいとは云はない。然しでたらめな高速度は芝居をわるい方に惡い方にと導き、俳優を中途半端なものに育てゝ行く傾向がある。新派に向つて、高速度のものをやらせる事は、角をひめて牛を殺すの形がある。

時流に投ずると云ふ事は、興行價値の上に非常に大きい意義がある事は云ふまでも無いが瓜の畑から茄子を求める事をつゞけて行く中には、しまひに取かへしのつかないものになりはしまいかと考へる。

新派の本領は立派なものがある。私はやつぱりそれに向つて進んで行きたいと考へる。

× × × × ×

× × × × ×

× × × × ×

惠我の莊より

食滿南北

▲惠我の莊には、劇場がない、ひいては映畫館もない。淋みしい筈だが、さうした處に少し食傷を感じてゐる私には、スイトピーや、ダリヤや、ベコニヤや、萩や、蛙や、螢の方が賑かな氣がしてならない。

▲はるかに大阪と云ふ街を觀る。鷄はカシワである、松茸は松茸である、カシワと松茸とは出合ひものである、食指動く、誰かゞ表の鷄の箱を見て、

『地玉あり升』

といふた男がある、獅子身中の蟲である。

▲次の時代の會の連中喜んで座によつて、新しき脚本を演じ新しく生きやうとしてゐる、議論は不必要である、大阪のすべての人はこれを贔負にし、これを引立て、アもつと新しい言葉によれば、これをヨウゴし、これを育てなければならない。

▲マタタビワラヂといふ物、其筋のキヒに觸れカツトさる、舞臺カントク、フンガイし、其是非を問はんとす、吾は其是非を論ずるの資格はない、吾はかつてわが脚本のキヒに觸れるほど新しきものを描きたる事がないからである。

▲堺事變の挿畫を描かうとする、主筆カツカ、またポンチ畫みたいなのだすか、やめとくなはれと、其處で僕大にフンガイして、とみや君の如く彩を描き、八つ手をあしらふ。

『どや』

主筆カツカ見て

『よろしあすな』

もつて紙上を賑はす、讀者は何といふ幸福な事であらうこの號、爲めに

ラクヨウノシカタカクナル

電報でない。

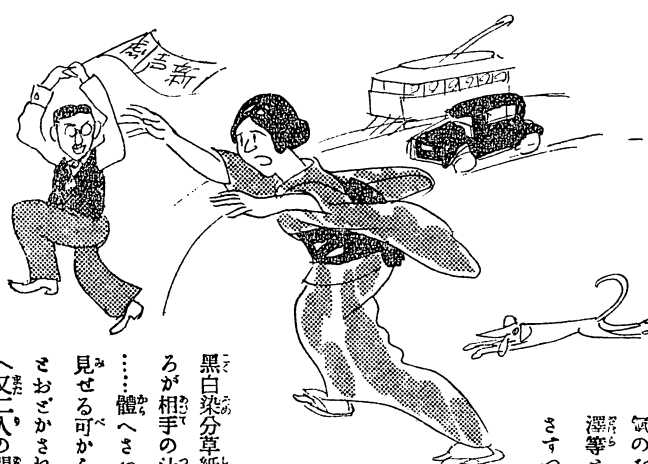
＝漫畫＝

お調子もの

＝漫文＝ 富士野蔦枝

五月二十八日

京都座興行宣傳のためリレーをする。但し女は弱い者であるから決して無理はさせないと文藝部で受あつたので一同京都日々新聞社を振出しに各々のコースを走つた。私は京都座から大丸屋上迄行くために早くから新京極で待つ。丁度日曜日なので大變な人出で電車は何れもおすな〳〵の滿員。電車は許されて居たが、此人出の中を四條で乘りかへて、グズ〳〵するより走る方が早い。走れはしれと言はれたので「オチョウシ」者の私は神經痛の足を引づり引づり男優諸氏と共にフラ〳〵になりながらかけた〳〵我紅軍一着と知つてバンザイとは言つたが扨歸宅して見ると足と言はず腰と言はず痛いの痛くないのつて、よふ〳〵錢湯へ行つて足をもんだが翌日の初日には歩くとひざがしらがガン〴〵して今にもへタ〳〵と座つてしまひさう。階段の上り下りは兩手でつかまつてドッコイショノショと言ふ騒ぎ。アルコールでもむと好いと聞いてつけた〳〵、體中まるでアルコール漬。これでビンの中へでも入つたら何かの標本よろしく。萬化地獄の笹子峠で刀を拾ふところ等はひざが曲らず手を延ばしてやつとへッピリ腰で立つ情なさ。私一人かと思つたら老年の中村氏は元より、誰もかれも舞臺で元氣のない事。男優諸氏でも小波武澤等と言ふ年少なる人達すら足をさすつて痛い〳〵と顏をしかめて何時もの勢ひ何處へやら一週間程たつてやつと階段の一人歩きが出來る樣になりましたが……「アー苦しかつたリレー……痛かつたリレー！……」



黑白染分草紙を京都座で上演した。ところが相手の辻野氏とは手を取るべからず……體へさわるべからず……。色氣を見せる可からず……。餘り可からず〳〵とおどかされたので目を白黑……。其處へ又二人の間は五寸づゝへだてる事……面くらつた二人。臺詞につれてうつかり傍へよつてアッより過る。ものさしものさし。

―巡業餘談―

霊感術師と澄まず

志賀廼家淡海

虚から出た誠もあるからには喜劇が取り持つ悲哀も珍としくはあるまい。これは又一寸珍妙な刄傷沙汰、事は聊か舊聞に屬するが、一昨年の名古屋巡業の時七十幾才と云ふ老人が、六十何才のお婆さんを出双庖丁で切り付け、其場で直に取押へられた事が同地の各新聞の三面記事を賑はした。然も係り官の取調に對し、其兇行を演じるに至つた動機は、淡海劇を見たからと申立てゝ居るのには尠からず驚かされたのです老人の申立てによると被害者のお婆さんは、以前自分の妻であつたが自分の素行が悪いため、愛憎をつかして數年前離縁を迫り、自分も結局氣樂でよいと其後別れて暮してゐますが平素は滅多に見た事もない芝居を餘り面白いからと云ふ評判に、不圖御園座へ淡海劇を見に行きました。初戀と云ふ狂言を見てから俄に離縁した婆さんが戀しうなり、其足で婆さんの許へ行つて色々と復縁を迫つて見ましたが、何うしても婆さんはうむと云はず、一旦はすご〳〵引下りましたが、婆さん戀しの念は募る斗り、氣を紛らさうと思ふて一寸一杯呑んだ酒が益々思慕の情をそゝり立て、叶はぬ時はあの世でもと覺悟を極め、双物を用意して出直し又候かき口説いて見たが、何うしても聞入れぬ爲め、つい赫となつて思はず知らず切り付けました。

飛んでもない悲劇を生み出したものであります。『初戀』は嘗て大阪でも再三上演した狂言で、皆様も御承知でせうが親々が取り極めた縁談に押し付けられ、其配偶者からは少しの愛情も惠まれず、只人生はこんなものと味氣ない日を過す事幾十年。今は其の情なかつた配偶者も見送つて人生の春を知らずに餘命を送るお爺さんとお婆さん、お説教の席で顔見合したのが縁の端互に語り合へば同じ徑路を辿つて來た二人思ひ遣つたり遣られたり、そこに遲蒔乍ら暖かい春が訪れて人目を忍んで慰め合ふ仲となり、適の逢ふ瀬のもどかしく二人示し合せて落人と洒落る處を、漸う心付いて息子達の計らひで天下晴れて二人連れ立つ四國參り、珍妙なホネームーンが出來上ると云ふ脚色で。私が説教坊主と老婆の二役に扮したもの、それを何所を何う見間違へられたものやら、こんな間違ひを起される原因になつたとは恐縮の至り。

最う一つ恐縮をした例ですが、これはずつと以前肥後の人吉へ巡業の際、狂言は何であつたやら今一寸記憶に浮びません。何でも手に負へぬ放蕩者が改悛する筋のものでありまし

た。其幕が閉ると部屋へ這入つて來た三十搦みの意氣な男、淡海さんは貴君ですかと云ふ。左樣ですと答へると突然わつと手放しで泣き出したので驚きました。だん〳〵譯を聞いて見ると土地でも相當の資產家に生れ乍ら、物心付く頃から味を覺えた茶屋酒の香が身に泌みて、親の意見も何のその次第に募る放蕩に、家財は素よりたつた一つの我身迄持ち崩して、今は小料理屋の料理人になつて居るが、所の人は毛蟲扱で對手にする者がない程のならず者。今の狂言を見て染々と感じました。眞面目に働いて意義ある生活をしなければならんと改心をしましたが今迄が今迄丈けに己れの覺悟は極つても、誰一人信用して呉る人がないせめて改心をした事丈けを貴君の前に誓つてこれからは、土に嚙り付いても眞面目に世渡りをします今度來演せられる迄には屹度何かの効果を擧げて置きますと涙と共の懺悔話。只一夕のお笑ひ劇も見樣に依つては斯う迄強く人の力を動かす事が出來るものかと同じ恐縮乍ら此時斗りは私も貰ひ泣を致しました。定めて其人は其後立派に成功して居られる事と信じます。其時の御決心は實に力強いものに見受けました。人は信念次第で隨分非凡な仕事を成し遂げる者ですから、此事に就てはもう一つ恐縮の實例があります。

それは前申した一昨年名古屋巡業の歸途伊勢の山田に乘込みました其晩の舞臺に、何故か座員がクツ〳〵と笑ひます。幕になつてから原因を訊して見ると、かぶり付の處に見て居る子供が疳の病で妙に首や手を振り廻すのが可笑しうて笑はずには居られぬと云ふ。そこで密と覗いて見ると、成程滑稽な身振で首を振廻す。然し私には笑へなかつた。見れば十二三才の可愛い男の子、定めて今迄には醫者上藥と親達が手を盡された上に、心を惱まされた事だろう。本人も自分の病氣を恥てか、努めて隱さうと努力してゐる樣が、涙ぐましい迄にいぢらしく、笑ふ人達を誡しめて私は部屋で靜かに其子の宿痾を悲しんでやつた。其内に次の狂言が初まる戀愛測量器と云ふ笑劇で、私の扮して居る醫學博士が、戀愛病患者に、靈感術を施して治癒すると云ふ場面です。不圖私は思ひ付いた手段があつたので、幕が閉つてから博士の扮裝を解かず其子を呼んで親く尋ねて見ると、本人も其病氣が何より辛いと云ふ。そこで私は俳優ではあるが一力靈感術の先生で、如何なる難病も一回の氣合で全治するのだから、私を信じて自分でも病氣を癒すと云ふ信念を固める樣と、懇ろに諭して置いて、扨て威儀を正して氣合を掛ました。尤も私も其時は眞劍に力を罩めて居ましたが、不思議や其晩からは一回も其の發作を見ず、翌日は其子の母御が禮旁其子を連て來られたので、幾分の効果を信じた私は、今一度氣合を掛て別れました

が、昨年山田市へ行つた時はすつかり全癒した子供を連て母御が丁重な禮に來られました。飽迄私を靈感術師と信ぜられて居るのには密かに恐縮しました。久方振の道頓堀誌上に變つたお土産話も無い事は最後の恐縮です。

――巡業餘談――

嶋芝居の話し

曾我廼家太郎

夫は日露戰爭前七月の事でした。三桝源五郎大谷友吉一座で伊豫の宇和島へ行きました其所で私は一座を拔け四國の在廻りをして居た嵐三津十郎一座に加入して島芝居に行きました この島芝居に付て簡單にお話しますがその時は宇和島より三里先き岩松と云ふ處から船を仕立てゝ大分と伊豫の間水が浦と云ふ島へ行きました（尤もこれは約束も何もない所へ此方が勝手に出掛ます。目指す島の沖合一里ばかりの所から大鼓を打こみます。これは、魚を追込むと云ふ意味で、一座の土産としては丈五寸巾三寸位の紙に木版で大漁を上に下には三番叟を踊つて居る畵が摺り込んであるのをお守りとして頭立つた家に配つて門口の柱に貼り付けます。その代り芝居をするとせぬに係はらず一晩泊めた上行く先まで船で送つて呉れます）島へ着けば船は返して仕舞ひます。頭取は島の總代へ掛合に行く其間一座は荷物と共に濱に待つて居ると漁師達が大勢寄つて來て色々と批評をします。

『幕も餘計持つとらせんし、このしばやはぼうふらしばやだぞ』（幕は背景の事、ぼうふらは大根役者、しばやは芝居です）そこで此方も大きく出ます『貴方がたは知らんからぢや吾々は大阪の道頓堀で大芝居の豪い役者ばかりぢや、宇和島へ來た序に島廻りをするが大阪へ歸つたら滅多に來やせん、こんなよい芝居は二度と見られやせん。大阪から來たので荷物になるから幕も餘計は持たぬのぢや、それがよい芝居の證據じや』『そうかな、そんなえいしばやなら俺らも出來る樣に氣張るだ』とすつかり信用して呉れる。そこで頭取が一日芋何俵に金何圓と極める（芋は薄く切つて俵に詰めたもので時の相場で問屋へ賣る）寺の本堂へ世話方や、俳優が集まつて狂言の相談になる。世『何でも出來るかね』頭『豪い役者許りですから何でもします』そこで世話方から色々な狂言の註文が出る頭『よろしい、その狂言をしませうが、それには晒し十本買ふて貰はねばならず、白粉や紅も澤山要るので別に金を貰はねばならぬ。それよりは、この一座が道頓堀で大

當りを取つた十八番の佐野鹿十郎武勇傳か先代萩にして置きなさい、それなら一文も餘分の金は要らぬし、よい事は受合つて置く、（その實衣裳は佐野鹿と先代萩より出來ぬ）世『金が要らいでよいしばやなら、佐野鹿十郎の敲討をして貰ふ』で話がつく籤引きで役者の宿が極る。私の宿は加田と云ふ漁師の家でした。夫婦と妻君の妹と三人暮しで此邊の習慣で疊は法事か、お祝ひの他は敷かず、平素は積み上げて、根太板には、むしろが敷いてある。門口には芋の俵を積み、米の取れぬ所とて爐の傍には　大きな笊に芋を盛上げ、時搆はずに、それを喰ふ。吾々には太夫元から、白米五合呉たのを賴んで炊いて貰ふ。中には芋で腹をふくらせて米を賣る役者もある。私は離れの小屋で寢た。翌日海を後に西向の舞臺が出來る。家根は船の帆で張る晝十一時頃から始めて三幕目非人小屋民助返り討の幕が閉ると餘り衣裳も出ず汚いから先代萩と替へて呉れと世話方からの註文、そこで狂言を替へて先代の竹の間から初める。處が西日が舞臺一面にさし込む七月の暑さで汗は瀧の樣に流れる。白粉は脱げる、目にしみるので目を明いて台詞も云はれず、政岡も腰元も扇をかざして日除けをするので、見物からは扇を除けて見せ〳〵と八釜しくて芝居が出來ず、世話方に交渉して日の入り迄、休憩して、漸く無事對決迄濟まして宿へ歸つた。その時私の役は、沖の井と民部で奇麗な所を見せて居た細君の妹は二十二三一寸よい女でしたが、これに當つて見ると滿更でもない樣子寢床を聞いて置いて寢ました、家内中寢靜まるを待つて、そろ〳〵ランプは全部消した暗がりを出掛ました。蚊帳の外から手探りに撫廻ると足に障つた、とその上に又一本十文字に足がある。これは不思議と尙探ると又一本終に四本目の足を探り當た時には驚きと癪に障るのとごつちやになつて思はず其足を力任せに抓つた、痛いッと男の聲と同時に其足で蹴られた私も襁はず飛付いて行く。女は二人を分けやうとする、眞ツ暗闇での摑み合ひ、面白い事には毆る者も、毆られる者も止める者も一切が無言です。然し根太はどし〳〵と鳴るので奥に寢て居た主人が何誰じやと大聲かけたので、對手の男は逃出す。私も自分の床へ逃げ歸りました（島の習慣として戸締りをせず男女關係が出來れば、上下を論ぜず夫婦にする故、深夜若者が娘の所へ忍んで來るのは大目に見てあるのです）私も翌朝主人に別れの挨拶をした際、昨夜は親切に大阪の役者さんが妹の處へ來て呉れたのに地下の若い者が先きへ來て居て濟まなんだと云はれた時は打たれた跡を擦り乍ら痛み入りますと云ふより返事はなかつた。これから三津十郎の仁木彈正の廣告くばり、太十の光秀の蛙押へと色々の珍談もありますが、又御緣があればお目に掛ませう、御退屈樣。

臆面もなく上場

伊井蓉峰

東京におまましての新派も、昨年の秋から從前の如に松竹の經營に復り、本年は、一月から五月まで、休みなしで市村座の舞臺に現れ加へて皆様方の御引き立で、引き續き近年に珍しくも開場いたされたといふやうな幸福な廻り合の圏内へ踏入つてまゐりました。所でこの六月いよ〳〵御地へお目通りの出來まする運びにもなりまして、是又いよ〳〵有難い仕合と存じます就きまして、第一番目に『原敬』が上場される事になりましたこの『原敬』劇は、昨年の八月新橋演舞場で、木内氏が經營されると同時に、又是につい盡力される方々の御案出で、原様の御遺族、又政友會の御了解を得、材料の話は、高橋光威先生からといふやうな順序で、夫を又木内氏より作者にお願ひして作者は作者でお書になつた次第です。

その節、私はこの御主人公に扮する事を御辭退したのです。申すまでもなく私の身長よりは四寸から上、俱うて堂々と御立派です。それは別と致しまして、是も申上るまでもない事ですが、實に近世に於ける偉大なお方であります。私の又聞の學説に、ストリンドベルヒの俳優論があります、『俳優の藝術は模倣ではない。何故ならば、下らない俳優が屢々著名なる人物を模倣する事に於いて、驚くべき才能を持つてゐるのに反し、眞の藝術の俳優は、この才に缺けてゐる事がある。』鵜呑にして私も似る似ないといふ事は未節である、役者は、生人形ではない、と逃辭を頓智に逃げを張りたい、が偖然しとして役者としては無論外觀ばかり可くても夫が決して藝ではないもの丶『政友會總裁原敬』まづ寫眞でお顔は知れ渡つてゐる。これが登場して、まるで似ても似つかぬ風貌であつたら、當時の世相を語る劇の上からは、所謂、寫實眼から觀じ來りて果してどんな結果が獲られるでせうか。結果は舞臺効果を殺ぐ事になります。歴史劇にしても、余程の過去にわたつてあつてその人物が想像

をもとに、構造ぜられるものは別として、現代より程遠からぬ社會劇であるとすると、その風俗なり、容子なり、色彩なり、背景なりが、あまりに隔け離れて居るといふ事は、純藝術上の議論からは容されるとしても、通俗に立つ藝術の演劇の上からは、前申た實感が客してくれない。それが私の辭退の理由の一つ、第二は、如上の事が、護摩化して強ても通過さして貰ふとして、肝要の其人物、卽偉大なる原敬、そのお方の含蓄せる包容せる、氣、力、光、此等が凡て、上つ面の眞似にしても出來ない。

つまりそれが未熟の私には、到底寫し出ぜないとする。實を申うせば役者の藝は模倣が要素の一つであつて、但しそれが巧に演技されて、所謂虛に居て實を示す、かうなれば上乘、其に近づけば、マアいゝとはして下さるものゝ、しかしながら此とても、大根本からいへば藝の眞隨は充實の心でなければならぬ事で、其處で外觀よりは內容を貴ぶ。そして扮する間は、その心になりきつて、等しくそれから身體の上に現れる　圍氣、現れる擧動、また口舌の端とならなければならない。到りて外觀內容備はつて妙とするのである。

原敬様がお亡くなりになられてから、約十年、御生前中親く接しられてゐた方は現代に於て數多い。尙、道理は世話狂言を見る看衆は寫實眼からは離れない。

辭退し切れなくなつて、愈々演る事になつた私は、嘗てお目にかゝれ得られる傳手があつたにもかゝはらず無精者の私は、一度も御拜顏の榮を得ませんでした。その御緣と申をすのは、原様の舅御で奇行家で知られた櫻州山人中井弘氏が、是も奇行で世を茶化した、私の父とは御懇意であつた。そして當時の中井さんの御贔負の築地の大椿樓、明治の中年に大官連中の往來した待合の主人は、稼業を止めた後に、引き續き原さんに御贔負で出入して居つた。その人の長男（現在某會社の重役）には故人にはなつたが私の從妹が嫁いで居た。其從妹は永い間、原邸には伺候してゐた。大椿樓の隱居は其昔建築家であつた所から構圖がうまい、原様の盛岡の別莊は、その人の圖によつて山崎と申す建築家が築き上た、此方は又私の爲の伊井仲連の古い幹事であつた。あういふ御緣がありましたに關はらず、といふ次第です。但しこの間に、明治天皇御不例の砌、市民に宮內省までお見舞を許された時、罷り出でてこの廊下で、御通りになられたお姿、それを前にして虎の門にブロース刈の名手に森喜といふ理髮師があつて、その門口で入違ひにお見掛した。今更に面窶さへ忍ばれぬ私を高橋光威先生はじめ、その他の方にいろ〳〵と御指敎を願つて、で、當時臆面もなく舞臺へ現れました。また、それを臆面もなく御當地へ現れる次第でございます。

私が原敬様のお話を伺つて、切に感じました事は、原敬其方が平靜な、柔和しい、行儀のいゝ、そして親切な、申をせば召

使ひにも叱言一ついはず、よし御自分が苦しい事があつても、その不平を他にうつさず。もう一つ立入つて申をせば、御愛妾の許へ行かれても膝も崩さず在らせられたまで分つて。一時世間に喧傳された事とは餘りの相違におどろいた。で、私も輕々しく人の口や筆に依つて動じてはならぬといふ誨を受けました同時に、中岡艮一のやうな單なる感情から、いはゞ一本氣で、爲に大切な人間を亡す。取り返しのつかぬ事の一大事を懼れて出來ないながらも、この『原敬』劇で、その點を夫となく諷訓される事であれば、私の臆面もなく扮する潛越な心も許して頂けると度胸も定まり、恐らくこの脚本の上には、作者の御意見も別にあつて或は其點からは御不滿は必ず多大としても、私の心持はその意氣で演出してゐる次第でございます。

女裝を破つて

花柳章太郎

舊の芝居ならば別ですが私共の立場では女型の女に終始して居ることは出來ません『現代劇である場谷女優に素質のある者が居る以上それに女を讓つた方が自然なのであります。

然し新派の芝居もこれ迄女型で出來上つた狂言があります。そう云ふものは女優では力がありませんので、矢張り女型に依つた方が効果があります。私は決して二筋の道をまたぐのではありません。こうして居る間に、男役になり得る本質をつけたいと思つて居ります。

と云つて私が荒尾讓介をやり、月形半兵衛太をやるわけにもゆきますまい。これ迄の男役にあまり見受なかつた明るい新喜劇、いはゆる映畫の方でやつて居るデューであり、ロイドであり、チャップリンなどの製作にかゝる機智にとんだ輕快な新喜劇や、岸田國士氏の作品にある、味のものを私の進出するモットーとしたいものであります。

すでに昨秋本郷座でやつた『私のパパさん』なぞは、映畫から材を得て、演つた新喜劇であります。その後この春になつて連續的に喜劇の上演に努めました。

岸田氏作『長閑なる反目』『百卅二番地の借家』金子氏作『

動物園近く』なぞ狂言の並びに一つはどうしてもなくてはならぬものとして、私はそこへ行きたく思つて居ます。

不幸にしてこの種の喜劇ものが、狂言の並びの都合で上演されなかつたのが殘念でなりません。

近く大阪で夏などこうしたものをならべて、新喜劇の夕として、公開したいと存じて居ります。

今度の『受難華』の壽美子の夫林健一なぞは、もつとも好意のもてる役として、私の好きな役の一つです。その役によつて私の喜劇へ進まうとして居る氣持が、うかがえたら私の今迄申して居ることがおわかりと存じます。

一年〳〵に變つてゆく思想や文化のめまぐるしさ、去年に比べて今年の氣持ち、又來年はどう變つてゆくか、ます〳〵私は新喜劇進出の希望のみであります。

新派も東京で二年以上打續け（その間に一度大阪へ參つたきり）古いレコードを破つてある種の光明を見とめました。

初夏陽ざしうら〳〵とした道頓堀の薫風に、小旗ひるがえる第二の鄕土第一の鄕土よりはぐまれた、恩のある大阪一年振にまみえる嬉しさに、胸はおどつてなりません。

出來ることなら、三四ケ月大阪に居て見る人と演ずる人の氣持のピツタリとした芝居がやつて見たう存じます。終りに新劇壇の新派の只今の顏ぶれに代つた上演目錄をそえておきます。

思感

梅島昇

長い間の年月、私は當大阪の皆様に一方ならぬ御後援を頂いて居りました。

關西に於ける新派劇が一昨年あたりから、不振なくなりまして何日とはなしに皆散りぢりとなり、東京へ歸る人、地方へ姿を消す人、さては喜劇へ飛び込む人、等々、私達の懷しい〳〵道頓堀から忽も映畫溶暗のやうに、その影を沒してしまひました。

私なども其餘波とでも云ひませうか、錦も飾らずに故鄕の東京へ昨冬無據歸らなければならないやうな次第となりました。さうして私はこの一月から市村座の新派大合同劇へ加入さ

せて頂くやうになりました。

處が何と云ふ思ひがけない事でせう、此六月興行が私の懐かしい第二の故郷、しかも道頓堀中座で開演するといふ事は…。皆様、長い事私は自分勝手な芝居ばかり致して居りました。私に取りましては、まことに好い修業場で、恐ろしい（藝の）人が澤山居りますから、ちつとも油斷が出來ません、心身緊張して勉強して居ります。

東京へ參りまして第一に自分で氣のつきました事は自分の藝が非常に拙くなつた事です、野球の選手にはよくスランプと言ふ事があります、山下や宮武のやうな猛打者でも時々まるで打てなくなり、ボールが當つても飛ばなくなると言ふやうな期間が來るさうですが私共役者にもスランプ（少し妙です）のない事はありません。

東京へ參りまして久し振で大一座に加入致してどうも思ふやうに、自分の藝がにじみ出ませんから（これはスランプだな）と思ひましたが、だん〳〵考へて見ますと、さうではなく、私が長い間自分勝手な芝居を致して居る間に東京の劇壇の人達が長足の進歩をなされたのだと言ふ事が解りました。

これは役者に取りまして一番恐ろしい事でございます。

お伽噺の兎と龜のやうに晝寢をして居る間に遲れたのですから、これから決勝點まで大變な努力で追かけなければ、皆さんと同時にゴールには這入ません……で私は今一生懸命にかけ出して居ります。何卒皆様御後援を願ひます……。

今度の中座上演の狂言は御承知の通り、第一『原敬』。第二『クレープトメーニア』。第三『怪談小車双紙』。第四『受難華』で、この中で私は第一で、岡總監。第四で、前川俊一、の二タ役をやらせて頂きます、第一はこれぞと言ふ役でもございませんが、實在の政界の名士であるだけに、似て居る……居ない、の問題で相當なやまされます。

岡さんは、原さんが暗殺された當時の警視總監です、役者はありがたいもので、私も興行日數二十二日間は警視總監のやうな心持で居られます。新聞辭令の總監よりも例令嘘でも芝居でも總監振が現實に出來るんですから妙な職業だなと今更ながら可笑しくなります。

第四の前川は原作やキネマでは大した役ですが、今度の脚色は所謂高速度劇ですから、サァこれから芝居をしやうと思ふと暗くなつて次の幕になり、どん〳〵場面が變化致しますので、御見物には目先が變つて面白いでせうが、役者達には甚だ物足りない、呆氣ない、どつちかと申せば迷惑な役でございます、然しお客様さへ喜んで見て下されば私共は職業でありますから、緊張して熱演致して居ります。

この劇の脚色者である、川村花菱先生なども、『この高速度劇は決して本當の芝居ではない、テンポの早い目先の變化するのは非常に好い事だが、もつとヂツクリと落付いてその役者に

も味を出させたい、此一座の役者は皆相當に修業もし、苦勞もして來た腕のある人達ばかりだから、高速度劇や、薄つぺらな芝居をさせるのは惜いが併し復活してから後なら理想もよからうが、今はその道程だから仕方がない、流行のレビュー式にやるさ、僕も當世向にモダン臭く書くよ』なんて悲觀だか樂觀だか解らない事を言つて居ました。

當一座は、伊井先生、喜多村先生、花柳氏、小堀氏、英氏、水谷氏、などの外に、河合、井上兩先生も時々加入されまして東京では最近珍しい八ケ月の長い期間を市村座で打ち通しました。

それに就いて大谷社長も大層喜ばれまして四月廿三日麴町の御本邸で園遊會を催され、座員一同を祝福して下さいました。社長も夫程までに力瘤を入れて、この一座の將來を期待されて居らるゝやうでございますから、私共に至るまで働き甲斐があると申すものでございます。

どうかこの機會を失せず、一同仲好く亡びかけた新派を復興させたいものだと存じます。

好劇家の皆樣方におかせられても何卒此上とも御同情、御贔負を私共のために否新派劇の上にお惠み下さいますやう切におが願ひ申上る次第でございます。

「原敬」その他

小菅一夫

田中首相と伊井蓉峰

午後、伊井と小生夢坊氏と三人して、麴町永田町官邸へ田中首相を訪問『原敬』劇について親く高說に接す——。

これは、去年の八月、新橋演無場の『原敬』劇上演に先だつて、田中首相が伊井氏に逢ひたいといふので訪問した時のわたしの日記です。小生氏は、企畫部として——。わたしは、文藝部として——。

そて日はあやにくの雨で、官邸の玄關わきの、靑い水鏽の浮いた古池に、枝蛙が、しのびやかに鳴いてゐました。

夏柳の見える應接室には、もう各社の新聞記者と、寫眞班が

つめかけてゐて、首相と伊井氏の會見を固唾をのんで待つてゐました。

やがて、扉が開いて、首相が現れました。――瀟洒な和服姿でした。

『伊井君、しばらくじやつたのう。』

首相の言葉に、伊井氏は、はつとして記憶をたどるやうに、首相の顏を見守りました。

『二十年ほど前ぢやらう。露西亞で逢つたことがあつたよ』

首相は、再びかういひました――。社聞記者をはじめ、わたしたちも、伊井氏の答へに興味の耳を傾けました。

伊井氏は、起立したまゝ謹直な態度で『閣下、わたくしは、閣下にお目にかゝるのは、只今がはじめてでございます』と、何時もの明快な調子で、ズケリといひました。――その時、わたしは、伊井氏の温顏に、ふと『原敬』の偉大な風貌を見出したことを忘れません。そして伊井氏の、飽まで『役者』らしくない、貴人に對しても、阿らない、清廉な人格に、ある教訓を受けました。

――これは、あとで聞いたはなしですが、伊井氏の歸つた後首相が、新聞記者に『伊井は紳士ぢや』と、しみ〴〵賞嘆されたさうです。

事實、首相の逢つたのは、露西亞へ遊學中の故藤澤淺次郎だつたそうです。

挿話

その初日のことでした。『原敬』劇が終つた時、伊井氏の部屋へ訪れたのが、當時、警視總監だつた岡喜七郎氏でした。

伊井氏、久闊を叙する間も待たず『何故、わたしたちに臺詞をいはせないのです』と、岡氏は、伊井氏に詰問しました。

――ありようは、大詰の原邸奥の闇通夜の場で、元田鐵相、中橋文相、岡警視總監などに扮する役者が無言で居並ぶだけなので納まらないのでした。伊井氏は、早速、その旨を、作者の中村吉藏氏へ傳へました。――中村氏は、笑つて、二日目から岡氏が弔詞の臺詞をいふやうに書足しました。

『小車草紙』

去年の七月、川開きの夜人形町まで買物に行つて歸りに、明治座で『立ち見』をしたのが、今度上演する怪談『小車草紙』でした。竹藁――。蚊帳――。蚊遣火――。雨音――。狐囃子――。鐘の音――。流れ灌頂――。怪談劇の要素をあつめた涼み芝居でした。幕が開いて、理由なく、いきなり幽靈の出るのも在來の怪談劇の異表に出てゐて珍しく、ことに二幕目の、幸次とおつやとの戀愛的な會話の巧緻さは、さすがに、鬼才瀬戸氏を思はせるものがありました。

喜多村は、持ち役の、おふさの幽靈とおつやの二役で、今度小堀の役の幸次は友右衛門、伊井の役の萬吉は八百藏でした。だが、わたしには、友右衛門にも、八百藏にも折合ふことが出

來ませんでした。友右衛門の幸次は、堅氣な、善良な職人が、ある動機から瀨惰に身を持ち崩して、博奕打になるのですが、たゞ、善良さだけが描寫されてゐて、それには『苦悶』も、『頽廢』も少しもにじみ出てゐませんでした。八百藏の萬吉は、案外無事でしたが、何時もの癖の、好い役者ぶる片鱗の見えるのが氣障でした。伊井、小堀兩氏に期待をします。

去年の夏は、毎日、入梅のようによく雨が降りました。今年も、入梅空で、毎日、陰暗な日が續いてゐます。でも、大分夏めいて來て、この間、三社祭に、紗羽織に、夏帽子をかぶつた人を見かけました。——大阪の夏もさぞ暑いことでせう。わたしは、伊井氏と、三十日の特急で東京を立ちます。そして芝居が果てゝから、あの石垣の高い、蒼い、油のやうに靜かに澱んだ、道頓堀川にボートを浮べて、夏の月を仰ぎながら、また旅愁に耽るでせう。……（市村座にて）

「小車草紙」のこと

喜多村緑郎

御當地のお目見得は、一昨年の十一月、浪花座の『婦系圖』以來でございます。此度、中座の大合同へ出演いたしまして上演の怪談『小車草紙』は、昨年の七月、東京の明治座におきまして、瀨戸英一氏が、わたくしのために書卸して下さいましたもので、今月御當地の上演は、怪談劇といたしまして、ちと季節が早いと思ひましたが、久方振の御目見得には手頃の好脚本と存じまして上演するはこびになりました。

この脚本の面白いのは、在來の怪談劇といたしまして、筋の錯節してゐない、非常に簡要なことだと思ひます。それに妹のおつやが姉のおふさの幽靈の乘移た眞似をしながら、結局乘移るのですが、そこに瀨戸氏一流の上手さがあります。これは亡くなられた小山内薫氏も、當時、朝日新聞紙上で激賞しておられました。

配役中、伊井氏の扮する萬吉は、伊井氏の身柄にない役を、わざ〳〵出て下されたことを、さぞ御迷惑と推察しておりますが、それと同時に、伊井氏らしい演出を期待してゐる次第です

大阪の皆様へ

水谷八重子

久しぶりの道頓堀、嬉しくない事はありません、特に大阪には東京にもまして、私を大變に可愛がつて下さる方々が多いので御座いますもの、私としては今度の中座出演を非常に樂みと致して居りますのは當然で御座います。

しかし、また一方から見ますれば、折角の大阪出演ですもの何とかして自分の腕を揮つて見たい、氣に入つた芝居をやつて見たいと云ふのが山々で御座いますが、さて此の度のやうな大一座、特に一種の聯合軍的……統一のとりにくい一座では若手の私なんどが、さう〳〵身勝手も申されませんし、結局皆様の仰せのまゝに從つて行く外はないので御座います。

申すまでもなく私がこの度出演いたしまする『クレプトメーニア』と『受難華』いづれも原作は立派な結構なもので御座いますけれど、不幸にして私には欲らない、私としては誠に自信のないものばかりで御座います。

自信のないものを久しぶりの出演に御目にかけることは、如何にも辛い苦痛なので、さいさい御斷りを致しましたけれど、どうしても許しては下さいません、仕方なく〳〵出演の次第、心中何卒御察しを願い上げます。

それ程いやならばなぜ斷つて休まないか、出演しなければいゝじやないか……と云ふ御叱りもありませうけふれど、團體生活として見れば、そこには自分勝手ばかりも云へない義理や人情もあり、特には折角大阪へ參る機會が出來て懷しい皆様に御目にかゝれるのに、そのチャンスを逸するのも殘念ですし、たつての御勸めをそのまゝに參る事となりました。どうぞその邊御酌取り下さいましてあしからず御高覽を願い上げます。

と申して、いくら自信がないからと云つて怠る心は毛頭も御座いません。自信がないだけに自分では一生縣命の研究です。從つて初日から最終日までいろ〳〵に樣子を變へてやつて見る積りで御座います。ですから、もしほんとうに私を御覽下さる御好意がありましたら、一日や二日でなく、少くとも五度や六

度は劇場へ御運び下さいまして、それから、いろ〳〵御叱りの御注意も頂きたいと存じます。一度や二度の御見物で漫評を下さいますのは、私としては心細い情ない事のやうに存じます。

甚だ無遠慮に何かと申しましたが、前にも申上げる如く、此度は伊井先生や喜多村先生その他先輩同輩の皆様方のお尻につゝいて、たゞほんの頭數として出演いたしますばかり、水谷八重子としての本領はむしろ他の機會に發揮させて頂く事と存じます。

どうぞ、さう云ふ日の一日も早く參りますやう、偏に皆様の御力添を仰ぎたいと存じます。

「スブギ」固煉齒磨

本品を使用すれば幼時より老年に至るまで齒牙を完全に保つ事が出來ます。

何故なれば、ギブス煉齒磨は刷子がとゞかぬ微細な間隙へ侵入して常に齒を美しく清潔に保ちますから齒の腐蝕を防ぎます。

齒を清潔に信つ事は取りも直さず身體の健康を計るのでありますから毎日二回必ずギブス煉齒磨を御用ひ遊ばせ、さすれば氣分は爽愉になられます。

本品は美しきアルミニューム罐入りで桃色の固煉製であります、有名な百貨店、藥店及化粧品店に賣つて居ります。

大形　壹個　金七拾錢
大形中味　壹個　金六拾錢
小形　壹個　金四拾五錢

ロンドン　パリス
デイ・エンド・ダブリユー
ギブス株式會社

日本代理店　株式會社　横山商店
東區豊後通三番地

八軒長屋

中田　正造

二三日前の日曜に、突然窪田といふ職工風の男が訪ねて來た、いかにも懷しさうに、懷舊の情に堪えないといふやうな口振りで話しかけられるので、すつかり面喰らつて、どなたですと口ごもりながら聞くと『へえ、わたしはあの八軒長屋の主人ですがな』と得意さうに答へる、やつと思ひ出した。二十年前早稲田に通學してゐた時、自分は、乞食小屋のやうな、八軒長屋の一角を借て住んでゐたのだ。

八軒長屋には、色々變つた人ばかりが住んでゐた。一番端に佐々木さんといつて柔道四段で、早稲田の柔道部長をしてゐる人がゐた。この人は長屋の誰が何を話しかけても、へえ、と優しく返事をするきりで、肯て口を開いたのを見た事がなかつた。夕方になると、いつも、二百目の豚肉と、葱を下て歸つて來る。誰も使用しない古井戸の水で、料理をして、默々として、ペロリ平げて、平然としてゐる人であつた。ある時貧乏長屋の、子供が死んだ時、一尺も長さのある墓口から紙幣を鷲掴みにして、呉てやつたので長屋の神様といふ尊稱を奉つた。

その隣に窟州といふ、矢張り早稲田の學生で、穴熊のやうな感じのする男がゐた。おデコで、小さい眼が、落窪んだ奥の方に光つてゐて、猫脊な風貌はどうしても、洞窟に潜んだ、獸としか思へなかつた。誰いふとなく窟州といふ尊稱を奉つた。

その隣には、早稲田の法科を出て以來三十年間、うまずたゆまず、年中勉强して、高等文官の試驗を受けてゐる人がゐた。芳紀正に五十有幾才、頭はもう既に雪白となつてゐた。理想は高く雪を頂いてゐるので、尊稱して富士君と申した。

長屋はかうした、一風變つた、人ばかりで、占領されてゐた。早稲田大學の裏戸塚村にあつたので、自然、早稲田に因緣のある人のみであつた。

或夜長屋の一角から、靜寂を破つて、盛にデカンショの聲が聞える。繩張りを荒されたやうな氣がして不愉快だつた。どうも、騷ぎ方が、引越の祝ひ酒に醉つてゐるらしい。翌朝起きて行つて見ると玄關が二疊で、あと六疊一間しかない、所へ十人許りの一高の學生が寢てゐる。寢るのに餘程苦心したものと見えて、本

箱を眞中に置いてその周圍を布團で卷き塔の形を造り、各々塔にもたれ、足で襖を突張り、まるで部屋中を人間詰にして寢てゐる、のではない、立つたまゝ寢てゐるのには流石長屋一統を驚かされた。聖人のやうな富士君も、穴から出ない窟州も見物に來た。物を云つた事のない佐々木さんが『やあ、これは!!』と云つたのでも、如何に驚異の有樣であつたかゞ想像されやう。

それから毎日夕方になると、二三人の屑屋が、必ず、そこへ集まつて來た。屑屋の手によつて、本箱が飛び、布團がかつぎ出される。本箱は酒になり、酒はデカンショになつて、毎夜々々騷ぎはつゞいた。一週間許りたつと、ふつつりと、屑屋の聲がしなくなつた。とその晩はもう、威勢のいゝデカンショの聲もあがらなかつた。もう引越したのかと翌朝行つてみると、この間とは、まるで正反對な形態をもつて、十人の人々が死んだやうに寢てゐた。いつの間にやら本箱も、布團もきれいに取り拂はれて、たつた一枚の布團を眞中に、置いて十人が四方から足だけを入れて、聯隊旗の形になつて寢てゐた。

それから後は、デカンショの聲は聞えなかつたが、その前を通ると、演技座がどうの、歌舞伎座の芝居が、どうのと、よく議論をしてゐるのを聞いた。たまには、新宿論や吉原論に火花散らして議論をしてゐる事もあつた。

今から考へると、その連中の中にゐたのか、遊びに來たのか知れないが、その當時の新思潮の同人、久米正雄、松岡讓根本、黑田等の英傑がゐた事は確であつた。

× ×

八軒長屋はある大きな別莊の北側の、年中じめ〳〵した陰氣なところに、どこかで、破れ木を、ひろい集めて建たやうな乞食小屋だつた。疊もしいてなかつた蓆のやうな、ふちのない疊だつた。家賃は四圓五十錢だつた。その長屋の取締をしてゐたのが窪田だ。

窪田は嬉しさうに天下でも取つたやうに、ニコ〳〵しながら、自分の出世のやうに話した。

私の家から、日本一の小說家も出ました。日本一の役者も出ました。富士君も三十二年目に高等文官の試驗が通つて、今ではえらい方になつてゐられます。佐々木さんも皆出世をせられました。私はその當時のあなたの行李を、預つてゐます。今だに大事にしてゐます。中に三百枚ほどの原稿に小說が書いてあります。その後、それを見ては小說家になられたかと、思つてゐましたが、役者になつてよう出世をして下さいました。

有難う御座いますと自分の事のやうに禮を云つて歸つた。

× ×

我等の前途

名越仙左衛門

舞臺勞働者として、日夜勤勞に追はれてゐる自分たちには、纏まつた感想を綴述する遑もありませんが、其漸次移り變つてゆく時代に應じて、我々の舞臺も、不知不識變化してゐることは、否定することの出來ない事實でありまして、我新聲劇に於きましても、私が加盟當時とは大いに其舞台構想を異にしてゐることは著しい事實であります。

文藝が大衆的になつたからと云つて、決して墮落を意味する譯ではなく、劍劇と云つても演劇の墮落と稱せらるゝものではないと思ひます。併し活動劇の受け容れらるゝ時代は、何の時代でも思想上の過渡期であることが想像されます。大南北の出現が爾うであります。默阿彌時代が矢張り夫れです。新劇運動から胚胎して新國劇を組織した澤田正二郎君が、矢張り之れに直面して、劍劇の開組の樣に賞讃されて、遂に名をなした近代的に劇界の偉人でありました。我新聲劇も其分流であることは御承知の通りであります。併し時代は又一轉機の時期に循環して來たのではありますまいか。

爰に一寸我々も內省的に考えさせられる時期が來たと思はせられます。既に社會的には、思想上の分解作用が行はれて落着く處へ落着こうとしてゐる曙光を認めまして我演劇界にも漸く變化期に直面してゐるが如く考察されるのであります

然れば如何に變化してゆくかと云ふことが、尤も我々にしては重大な問題でありまして、此考察が、來るべき新時代を豫感して、適當に夫に策應して行くのが次の時代の劇界の達てものであると思ひます。舞台巧致の奈何より、時代を觀るに鋭敏なのが、獨り劇界と云はず優勝の位置に据はり、成功者の桂冠を贏ち得るのであります、澤田氏抔は其尤も適例の人であります。

爾こで現在我々が所屬してゐる新聲劇の將來は、果して什う云ふ風に進展して行つたら良いか……之が尤も忽かせにならない問題でありませう。澤田氏逝いた後の我等が劇界は果して何人が牛耳することになるのでありませう。彼れ是れと見渡し、數へ上げると、誠に寥々たるものでありまして、自惚る譯ではありませんが、我新聲劇團に尤も重い責任のあることを認めなければなりません。恁麼事に考え至りますと我々も大に愼重に勇躍しなければならない、强い々々責任感に

打たれて、深甚なる用意と、細密なる注意が必要であることを直感いたします。

此意味で我々の前途は益々多端であると云はねばなりません。

「朝鮮朝日」の由來

辻野良一

さうですね。……現在の劇團からみると昔……と言つても、私が始めて役者になつた頃の事ですが。その當時の團の制度の方が非常に家族的だつた樣に思はれます。さう言つた意味の事が舞臺上に及ぼす弊害の有無は別問題として。

自分の出發した處が極めて家庭的な藝術座であつたせいかも知れませんが、何にしても一家族の樣な氣持ちで旅に出る樣な事は最近は皆無です。時代の推移と共に……それだけ皆が悧口に、いや薄情になつて來のかも知れません。

それに就いて、さう〳〵神戸から嘉義丸に乘つて朝鮮方面へ巡業に出掛けた當時の事が想ひ出され、あの和氣靄靄たる一大家族の藝術座時代がゆくりなくも懷しまれてなりません。

その時の想ひ出話し一つ。

丁度一座が京城で開演してゐた時の事ですが、一夜座員揃つてお女郎屋に出掛たのです。所が偶然私の前に出た合方が一等地を拔いてのトテシャンなんです。他の連中の羨む事羨む事、私の得意たるや想像に餘りあり矣と言つた樣な具合でその夜の私は幸大もて。それから開演期間の三日間をせつせと通ひつめたのでした。然し流轉の役者稼業の悲しさ、いよ〳〵京城出立つの日が來ました。私はその悲しみを一杯胸に祕めて彼の女の許へお別れに出掛けたのです。——さて最後に袂を分つにのぞんで、彼の女は涙さへうかべた兩の眼に別離の情をこめて。

これを……と、何に新聞紙に包んだものを私の手に持たせたのです。まるで自分の心のすべてをそれにこめてゐるもの丶樣に、迚も大事さうに……。

私もハツとして、流石に眼に見えない彼女のあつい情に打たれて、それを大事に抱へると、一目散に停車場へと駈つけました。その汽車の中でそつと開けて見た新聞包の正體？、彼女の魂と思ひきや、案に相違の煙草の朝日が二十。私はそれから座員の連中に『朝鮮朝日』の尊稱、否ニツクネームを賜りました。

勿論皆は何等の邪心なくつけて呉たのですから、甘んじて肯定してゐました。

爾來幾星霜私は今度は素晴らしい『日本朝日』に會へる日の一日も早からん事を祈念してゐるのです。

僕のページ

田中總一郎

僕は、これから、この頁で月々の感想をかきしるして行きたいと思ふ。

何をかくと、はつきりきめないで、思つたこと、感じたことを、卒直にかいてみたい。

從つて、ある時には、固くるしい議論をかくこともあらうし、ある時には、とりとめのない漫筆になることもあるだらう。

× × × ×

僕は、大阪で仕事をする樣になつてから、もう五年になる。

その間に、僕としては、少し過勞である位、仕事はしてゐる。

多少、心に染まぬ仕事でも、頼まれるとどうしても嫌とはいへない性分なので、無理をしても引うけて來た。

色々の場合を、じつと想ひ起してみると、僕自身が、演出慾にかられて努力した脚本のいかにすくなかつたことか。

脚本のよしあし、自分の好みのよしあし、それがぴつたりと一致をした場合は、考へても愉快だがそんなのは今までに、十指に充たない位だ。

演出者としての最大の慾望は、どうしても、小山内先生の樣に幾度も幾度も、同じものを手がけてその都度、磨きをかけて行けたらなあと、思ふのだ。

× × × ×

僕は、近頃、自分の無形劇場を持ちたいと思つてゐる。

そしてそれについて、色々と考へてゐる。

大阪に於ける新劇運動の實際は、あまり微溫的でありはしないか。――でなければ、ひどくお先ばかりの獨りよがりでありはしないか。

僕は、それ等の實例を見知つて、多くの不安を持つてゐる。

そこで、僕は、僕自身のプランをたてようと思つたのだ。

僕は、その無形劇場を、僕の演劇的意志として、社會に働きかけたいと思ふ。

僕の立場は、常に、一演出家である。演出家とは何ぞや――。こんな愚問を弄したい程僕は、シニツクではないのだが、まあ、それに就いて少し考へて貰ひたいと思ふ。

大阪と言ふ所は、面白い所だ。新作と言へばどんな作品でも、必づ、舞臺監督何の某と言ふ肩書がついてゐる。――と、皮肉な言を弄してゐるのは、曾ては大阪にゐたこともある東京のある演劇批評家である。

だが、この皮肉はあたつてゐる。

尙筆者に、舞臺監督或は、演出者と言ふものの職責がはつきりと判つてゐないらしい。いや、判つてゐないと斷言してもいい。

作家卽演出者と言ふ考へ方が失せないのだ。

作家が演出家であり得る場合はあるが、作家卽演出家と斷じるのは早計である。

演出家或は舞臺監督と言ふ言葉を認めるならば、その獨立した一つの立場を判然と認めなければならない。

僕は、あくまで、演出家の獨立した立場を樹立することにつとめたい。

× × × ×

かう言ふ風に、僕が、演出家の立場を強く要求するの謂は、決して僕一個の功利的な欲求からではない。

大阪の劇壇の將來にとつて、これは當然すぎる位當然な要求だからである。

僕自身の仕事は、たとへ棄石にならうとも甘受し得るだけの決心は持つてゐる。

六月の辨天座上演

堺事變

一幕八場

食滿南北

作並に挿畫

一、櫛屋町の軍監府

堺櫛屋町の元總會所左關口、土佐藩の歩兵稲田貫之丞、楠瀬保次郎、北代健助の三人左關口に腰をかけてゐるもの、歩き廻つてゐるもの、樹に凭れてゐるもの。さゐづり位にて幕明く。

稲田　實際退屈だな、藩主の御意見で後藤象次郎さんが、さう〳〵慶喜公を說いて、大政を返上されたのは意外だつたよ。もう德川も末だな、末だ。時が來たのかな。

まだ歩行いてゐる。

楠瀬　さうだ末に違ひない。伏見鳥羽の戰爭、のザマは何んだ、三河武士の血を受けた旗本と言へるか、いよ〳〵薩、長、土の働く時が來たぞ。

北代　大阪は薩摩、兵庫は長州、この堺はわが土州藩で取締る事に朝命を受けたのだ。軍監府を置いて、こうして守備してゐるが一向何事もないな、あんまり無事だから隊長の笠浦が妙な餘裕のある芝居をして見せるのだ。

楠瀬　ハハ……やくな〳〵。

稲田　堺へいのうと泣いた蘇鐵がある堺だから、隊長の處へ嫁に行きたいと泣く娘があるのも當り前かも知れないぞ。話してゐる處へ眞田屋の娘お花、下女のお竹と出る。

お竹　北代さん。

北代　やッ來たな。

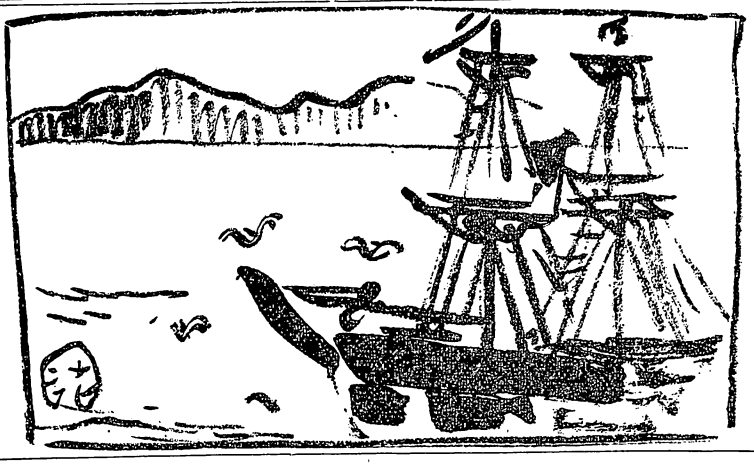
お竹　あのう。

言ひ憎さうにする。

北代　わかつた〳〵、オイ隊長と交代だ。
二人　ハハ……
ト、笑つて這入る。
箕浦猪之吉、（陣笠、陣羽織、袖なし、太刀を負ふ）
箕浦　やかましい奴等だ。
出て來る、お竹、お花をつきやつて下手へ這入る、一人顔見合す。
オイ、軍監府は厳格な場所なのだから
さう〳〵度々來ては困るな。
お花　お邪魔？
箕浦　邪魔といふわけぢやアないがね。
お花　乳守から美しいお方が來やはりまんの
箕浦　莫迦、藩の命令で、堺軍監府第六番歩兵隊長箕浦猪之吉だからな。
お花　まア豪いお方だすな。
箕浦　オイ〳〵茶かしちやア困るね。
お花　それでも私がうちにゐると、おかアはんが、妙なことばつかり言ふて當こするのですもの。
箕浦　また繼母と喧嘩でもして來たのか。
お夜　エヽ、
箕浦　仕方がないな、改めてわしから公式に申込みやアいゝのだらう。
お花　エヽそないしとくなはると本間にあゝのやけど。
箕浦　よし〳〵、いよ〳〵事がないと極まれば、結婚問題の方へうつゝてもいゝからな
お花　本間だつか。
箕浦　本當だとも。
この時、町年寄木津屋惣兵衛あわてゝ出る（町人、袴、羽織）
木津屋　アヽ隊長様〳〵。
箕浦　惣兵衛か、何んだ。
木津屋　大變です。
箕浦　顔色までかへて何うしたのだ。
木津屋　異國の船が天保山へやつて來、した
箕浦　さうか。
木津屋　あの——イギリス、フランス、アメリカの黒船がいかりを下ろしました。その中からフランスの黒船の兵隊がもう住吉の方まで來てゐます。
箕浦　よし、取調べて何分の沙汰をする。
木津屋　おたの申します。
箕浦　お花を見てけげんな顔して這入る、
箕浦　大分面倒なことになつて來た、お花、けふ歸る方がいゝな。
お花　ハイ。
本意無さそうな顔をする、お竹出る
箕浦　オイお竹、早う連れて歸つてくれ。
お竹　イヱ、まだお話がのこつてまんねやろ
箕浦　莫迦、けふは其處どころぢやアない。
お竹　ヘイ〳〵ピ……
お花の手をとつて、下手へ去る、西村佐平次が出る。
西村　箕浦聞いたか。
箕浦　聞いた、宇和島候から通達があつたのか。
西村　無い、何の通達もなかつたぞ。
箕浦　外國事務係伊達伊豫守から、フランスの兵が堺へ行くといふ通知もないので、陸路をやつて來るのは無法だ。
西村　大和橋まで出かけて免狀の有無を取調べなけりやアならんぞ。
箕浦　さうだ。
以前の三人出て、
三人　俺達も行くぞ。
箕浦　フム、我等が預かつた堺の土地を異狄にあらされはせんぞ。
ト、勢ひ込む。
よろしく
——返し——

二、堺　港

（何か象徴した幕をひき、洋樂でつ



なぎ）

（鐵砲の音しばらく聞こゆ）

すぐあける。

嵐のあと、さんざんの鐵砲、刀、等落ちる堺港にフランス兵を追ひしりぞけたあとの光景。

爭つた箕浦、西村、稻田、楠瀨、北代、大石甚吉、竹内民五郎、横田辰五郎、火消、旗持梅吉等立つてゐる

箕浦　莫迦な奴等だ、大和橋で通行切手がないから堺へ這べる事を許さんと遮ぎると、ボートで海を廻つて來なんて怪しからん奴等だ。

西村　しかし愉快だつたよ、大分斬つたな。

梅吉　ヘイ、西村隊長のおうで前は素晴らしいものでしたぜ。

稻田　誰か隊旗をもつて逃た奴があつたやうだな。

楠瀨　それは隊長が見事に斬つて奪ひ返したぞ。

北代　胸がスクやうだつた、

竹内　どうも吾等、若い血のみなぎつた者は事がある方が面白い、たはこ計りのんでゐてはつまらんからな、

横田　もう再び堺へはやつて來まい少々どきも拔かれよつたからな　ハハハ……

大石　皆はどうした。

箕浦　あそこの漁師のうちで疵の手當をしてゐる。

一同　さうか。

杉紀平太、馬から下りた體、馬丁をつれて出る。

箕浦、西村、佛國兵はどうした。

杉　打はらひました。

箕浦　フム、死傷者があつたか。

西村　よく調べませんが、大分やつつけたやうです。

杉　藩士は

箕浦　疵をうけただけです。

杉　事が面倒になりはすまいか。

箕浦　面倒な事が起つたら吾々が引受けます藩主には迷惑はかけません。

杉　さう旨く行くだらうか。

西村　大監察杉を呼かける。

杉　何んだな、

西村　我藩が松山藩討伐のために賜つた錦の御旗を本國土佐へ護送の折柄、フランス人が一行を遮ぎつて、公武一和ちやと事に通じたやうな顏をして錦旗を奪はうとした佛

人、いつも土佐藩を敵とするフランス人を斬つたのは會心な事ぢやありませんか、

杉　其處だがな。
　考へる。

箕浦　堺を守る爲めの軍監府ぢやなかつたのですか。
　つめよる、

杉　可なり面倒な問題だからな。

西村　よろしい、吾等が引受ます。
　この時橋詰愛平出る、

橋詰　どうした。
　勢ひよく出つて大監寮杉を見て
　オツ大監寮、やつゝけましたぞ。

杉　それで心配してゐるのだ。

橋詰　ハハ……何んです。不景氣な顏をして

杉　少し亂暴すぎたやうだからな。

橋詰　兎も角も藩主へ訴へて下さい。

杉　よろしい。
　馬丁をつれて急いで去る。皆々見送つて

箕浦　大監寮杉紀平太は常からあんな男なんだからな、時に疵をうけた連中は大丈夫かね。

橋詰　大丈夫皆ピン〳〵してゐます。

箕浦　さうか。

大石　もし藩主から妙な御沙汰があつたらどうする。
　大石はちよつと不安心な顏をする。

北代　そんな事を心配してゐてどうする軍監府へ引上げるか。

西村　梅吉。

梅吉　ヘイ。

西村　よくあとの處を氣をつけてくれ。

梅吉　ヘイ、大丈夫です。

箕浦　一同。
　呼びかけるのが〃木の頭〃
　引あげやうか。
　よろしく　――返し――

三、　鐵砲鍛冶眞田屋の店先

舞臺は鐵砲鍛冶眞田屋の店先、店にはお花は腰をかけてゐる。下女のお花はのれん口の處から顏を出してゐる。繼母のおみきは店火鉢をひかへてたばこをスパ〳〵のんでゐる。番頭の喜兵衛が鐵砲の出來上つたのをしらべてゐる。この體鐵砲鍛冶の槌の音聞へる。
　しばらく無言。

おみき　お花。

お花　エ、

みき　櫛屋町へいたかてもうあけへんやろ。

お花　エ、

みき　ゑらい事になつたのやとな。

お花　ねゝ。

お竹　とうさん、今のうちにお仕事しなはつたらどうだす。

お花　そやな。
　行きかける、

みき　どこへ行くのや、

お花　お仕事しまんね、

みき　そない急にせんかてよろしおますこゝへおいなはれ。

お花　エ、

みき　おいなはらんか。
　ガミ〳〵いふ、

お竹　お家はん父ごことだつか、

みき　あほ、だまつてんか、

お竹　ヘイ〳〵、
　ツンとする、

みき　な、お花、

お花　ヘエ、

みき　鐵砲かじの娘やさかい、土佐の藩士がちようどよいと思つてなはるのか。

お花　おかアはんそんな事。

みき　そや〳〵、何んでもこないだの濱の騒動かて、あの箕浦はんが一番鼻に立つてつてやりやはつたのやそうな、お前どないする氣やね、土佐のお方もあれからこつちお役御免になつて大阪のお藏邸にゐてはるのやさうな、どつちみち打首やろな。

お花　エッ、

みき　輕うすんだかて流しものやで、あほらしい、そんな人のこと考へてたかて仕樣がないやないか、考へなほしたらどうや、旅籠町の鹿島屋はんからお前を貰ひに來てはるのやで。

喜兵衛　とうさん鹿島屋の息子はちよつとたりまへんで、

みき　あほ、お前の知つたことやない、だまつて仕事しなはれ。

喜兵衛　へイ〳〵鐵砲屋だけにボン〳〵いふな。

みき　何やつてね。

喜兵衛　エッ、ゑらい筒の出來が惡いな、ごまかす。

みき　ほんまに皆しようない人ばつかりやな

お花、お前があんまりいふこと聞かんよつてみんなお前に見習ふのや、

お竹　お家はん、そんなことおますもんか。

喜兵衛　そや〳〵お家はんが、ツイおなかを痛めんとうさんやさかい、

みき　喜兵衛はげしく叱して何云ふてんのや。

喜兵衛　へイ、首をひつこめる、

急ぎ足に眞田屋傳兵衛歸つて來る、

傳兵衛　オッ、お花うちにゐたんか。

お花　ア、お父さん、

お竹　どうだした。

傳兵衛　お竹よつてくる、あかん、ガツカリする、

一同　エッ、びつくりする。

おみき一人微笑む。

傳兵衛　やつぱりフランスの兵隊を斬つたのが惡い事になつて、西村さんも箕浦さんも大阪のお邸あづけ、とても生命は助からんかもしれんな。

喜兵衛　旦那はん、そんな無茶な事おすもんか、向ふから通行切手もなしにドン〳〵あがつて來て、こつちがそれをとめたさかいといふて、鐵砲うつたんやおまへんか、阿呆らしいそれでこつちの生命が無かつたらむちやくちやがな、

傳兵衛　處がな喜兵衛、

喜兵衛　へイ。

傳兵衛　フランスは黑船といふ奴をもつてるで、あの大砲でドンとやられたら、やつぱりお國はメチヤ〳〵やさかいなア。

喜兵衛　こうなつたら土佐ぶしでもあきまへんか。

しほれる。

お花　お父さんどうしまひよ、

傳　衛　とりつく、お花お前の心の内はよう知つてる、どうぞして箕浦さんを助けてあげたいな、

みき　そんなこと出きまつか、

傳兵衛　エイ、お前はだまつて、

みき　ゑらいお花がひねきでおますな、旅籠町の鹿島屋はんの口はどないなりますのや

傳兵衛　あんな〳〵、阿呆のところへやるもんか。

みき　そんなら首のない箕浦はんを聟にしまんのか。

傳兵衛　エイ、お前の知つた事ちやないだまつてんか、

みき　イエ。

ひらきなほり

だまつてられまへん、お花はあんた一人の子だすか。

傳兵衛　そや〳〵、わし一人の子や、お前の腹をいためん子や、そやよつて鹿島屋へでもやつてしまふと思ふのやろ、お前のまゝにさしてたまるもんか、

みき　何やて、もう一遍言ふて見なはれ、

傳兵衛　云ふたる〳〵、何遍でも云ふたる、繼母はやつぱり繼母や。

みき　エッ、近所へ見つともない、繼母だすへイ〳〵私は繼母だすエ……

泣き出す。

傳兵衛　やかましい、うちに行くをお花とめる。

お花　お父さんまつとくなはれ。

傳兵衛　あんなこといひくさるのや、

お花　待つとくなはれ〳〵、わたいさへ思ひ切つたらよろしおますのや。

お竹　とうさんそんな無茶なこと、

お花　エイ、だまつてゝ、やつぱりお母はんの云ふ通りします。

傳兵衛　あんな阿呆のとこへ行くのんか。

お花　へイ。

傳兵衛　イヤ、そりやわしがやれへん。

喜兵衛　さうだすとも、あんなとこへやりなはんなや。

みき　エイ、皆でさういふてわたいひとりいじめなはれ、出ていたらよろしいのやろ、繼母のわたいはサッサと出て行きまつせ、皆よつていじめ出したら本望やろ。

立つ。

お花　もし、お母はん。

みき　ほつといて、

お花　お母さん、まつとくなはれ〳〵。

みき　ふらい漕まなんだな、我儘はつかりいふて箕浦はん聟はんに貰ひなはれ、土佐ぶしやさかいようだしが出るやろ。

憎々しくいふ。

サア放しんか、出て行くのや、はなしんかいな。

お花　まつとくなはれ、鹿島屋はんへ行きます。

みき　嘘や〳〵、

イエ、本間に行きます、

みき　本間か、

お花　へイ

みき　フンさうか、ふらい孝行な子やな、

傳兵衛　お花そんな氣になつたんか。

お花　へイ、

喜兵衛　とうさん。

お竹　しようむない事云ひなはんな。

お花　イヤ、喜兵衛もお竹も何にも云はんといとおくれ、

みき　ほんまにかじまやへ行くのやな。

お花　へイ

うつむく〃木のかしら〃

みき　ホホ……あんた、やつぱり賢しこい子やな、

皆々ジツとなる　――返し――

四、　住吉鳥居前

住吉の鳥居まへ、鳥居と燈籠だけ一切墨まくにする。

ト駕が二挺出る。

西村　まて、

駕屋　ハイ、

ト下ろす、駕の中から西村佐平次出る。

西村　箕浦住吉だ、もうこの社も見おさめかもしれないから拜禮して行かないか、

箕浦　さうだな、

箕浦猪之吉も出る

二人はるかに社前にぬかづく。

西村　部下一同の命乞ひをしてやらう、一切

は二人で責を受る事にすれば解決は速かもしれんぞ。

箕浦　無論だ、堺の守備として軍監府隊長としてするだけの事をしたので、いけなければ隊長の責任だ。部下は命令に隨ふたのだ寧ろ部下は憂めてやつていゝのだ。

西村　さうだとも

この時そつとお花のぞく、西村早く見つけ、

西村　オイ駕屋、大阪へはもう一息だが一バイのましてやらう、俺について來い。

駕屋　有難うございます。

箕浦　何處へ行くのだ。

西村　ちよつと一口のんでくる、すぐかへるトスタコラ行く。

箕浦　相かはらずのみたがろ奴だな。

お花ツカ〳〵出る。

お花　箕浦さん、

箕浦　フムお花、どうして來た、ハヽン西村め一かど粋をきかした氣だな。

お花　もう大阪へ出なはつたらもう堺へはかへて來やはれしまへんな。

箕浦　サアそれはわからん。

お花　あのお母さんが旅籠町の鹿島屋へ嫁入せいと云やはりますの。

箕浦　さうか、それは丁度よかつた、どの道わしの命は無いのだから、そんないゝ口があるならお前の身のおさまりだ。

お花　エツよろしまんのか。

箕浦　どうせ俺は死ぬのだから丁度いゝぢやないか。

お花　エ……

ト、泣き臥す。

箕浦　お花何んで泣くのだ

ト、背をさする。

お花　あんたに見すてられたら、わたいも死にます。

箕浦　莫迦な事を云ふもんぢやない、見捨てると云ふわけぢやないよ、死んでしまふのぢやアないか。

お花　一緒に死ねと何んでいふてくりやはれしまへんのや。

箕浦　困つたな一緒に死ぬといつたつて藩邸へ連れて行くわけにはゆかないし　いつまでもこの箕浦に妙な義理を立てないでお前はお前で、身のおさまりをつけたらどうだね。

お花　エ……

ト泣く。

箕浦　ナニお花、お前にはこの箕浦一人の外に母もあり父もあるのぢやアないか、殊にお前の母は繼母ぢやアないか、其處に人間の義理といふ物がある筈ぢやアないか、ねお花。

トなほないてゐるお花をなだめる。

お花なほも泣き入つてゐる。

西村がソツと出る。

西村　お花さんか、

箕浦　ア西村、飛んだ處を見つけられて面目ないよ。

西村　イヤ羨やましい、俺なんか、打首になつても誰も泣いてくれるものがない、お花さんシツカリ箕浦をつかまへて放すな。

箕浦　オイ莫迦な事を云ふな。

西村　ハヽヽヽ、さうだつたな。

ト淋しく笑ひ、

お花さん、まだ什うと極つてゐるわけぢやアないのですからマアけふは堺へ歸つてゐなさい、どんな事で箕浦もこの西村も助からないとも限らないからね。

お花　ハイ、

西村　お花さん早まつちやアいけないよ。

お花　ハイ。

箕浦　サア西村もア、云ふのだ、けふは歸つてくれ。

お花　ハイ、
西村　けふ藩邸へ行つた結果は何とかの方法でしらして上げるからな。
お花　ハイ、
箕浦　サア早く歸らないと又誰かに見つかると大變だからな。
お花　本間にしらしとくなはるか。
西村　知らすとも。
お花　別れともないけど。
箕浦　マア命を大事に早まつちやアいかんよ
お花　ハイ、
ト二人してなだめやう〳〵にお花思ひきつて泣きながら見かへりがりには入る。
西村　オイ箕浦、さう〳〵俺まで泣かしよつた。
トこの時北代健助、楠瀬保次郎、橘詰愛平出る。
北代　隊長、あの提灯は何んだらう、
ト指さす
箕浦　フム、藩の定紋だな。
西村　吾々の爲めに迎ひに來たのだらう。
楠瀬　まさかそんな事はあるまい。
橘詰　妙だな。
トこの時加賀芭左衛門馬上、家來をつれ、十佐守豐範籠にのつて槍もち等出る。
加賀　オツ各々これから藩邸へ行かれるのか
箕浦　ア下横目加賀殿か、何處へ。
加賀　君公のお供して堺へ。
箕浦　エツ君公
トこの時籠の内にて、
豐範　乘物立て。
一同　ハツト
籠の戸を明ける、
山内土佐守豐範出る。
豐範　加賀、誰ちや、
加賀　ハツ箕浦猪之吉、西村佐平次以外一同大阪の藩邸へお呼寄せの道でござります。
豐範　さうか、
箕浦　恐れながら君公には
豐範　予か、堺沖のフランス軍艦へ
箕浦　エツ
西村　何の爲めにわざ〳〵お越しでござります。
豐範　事を穏かにおさめやうと思ふためこは予が自身で出かけなければならない。
箕浦　君公御自身で、
橘詰　ソソそんな事は無い、君公、フランスの軍艦へお越しになる事はこの橘詰がおとめいたします。
豐範　イヤお手前達のためにもなる。
箕浦　猶々恐れ入ります。
西村　では吾々が引かへしてフランスの軍艦へ行きます。
楠瀬　さうだ。
北代　オイ出かけやう。
一同息込む。
豐範　まて
橘詰　君公に御苦勞はかけられません。
豐範　まて〳〵
一同　行きます。
加賀　君公のお言葉ぢや、ひかへぬか。
一同　ハツ……
ト一同、是非なくひかへる。
豐範　マア予が、ロツシユに逢ふた上解決をつけで見やう。
箕浦　それはあまりに恐れ入ります。
豐範　イヤ、ひつきやう國家の爲めぢや。
一同　ハイ、
ト一同平伏する　——返し——

五、佛艦の甲板

なるべく雛臺をカンタンに佛艦の甲板を見せる。

佛人レオンロッシュ、傲然と出る。

通辯　これにしたがひ、外に海軍兵出る。

甲板の下手から以前の豐範、加賀甚右衛門をつれ、外に通辯をつれて出る。

双方上つて握手する。

豐範　土佐の藩主山内豐範

トこれを通辯、

通辯一　……

ト、ロッシュにいふ。

ロッシュ握手を再し、何かいふ。

ロッシュ　……

通辯二　佛國レオンロッシュ、扨當エニュス號へ來られたのはかつて堺港の藩士の不都合をわびの爲めでせう。

豐範　イヤ。

ト云ひかけたが思入れ

土佐守豐範ジキ〳〵貴艦まで參りましたのは藩の者の不都合に對し謝罪の爲めです。

ト二、ロッシュにいふロッシュ通辯二にいふ。

通辯二　つまりこの際、要領だけを申上ます

土佐藩の隊を指揮した士官二人プランス人を殺害した土地即ち堺に於て死刑に處する事それから殺害されたフランス人の家族の爲め扶助料として十五萬弗を支拂ふ事の二つであります。

豐範　すべてに死刑、十五萬弗の扶助料。

トちよつとムッとする。

加賀押へる。

豐範思ひ入れ、

承知しました。

通辯一　一切の御要求に應じます。

通辯二　……

ロッシュにいふ。

ロッシュ　……

通辯二　……

ト二豐範に向ひ

イヤそれで解決したといふものです、何處か場所をあらんで下さい。

豐範　當所妙國寺を刑場と致しませう

通辯二　妙國寺よろしい。

トロッシュにいふ。

通辯二　……

ロッシュ　……

通辯二　ではロッシュじき〳〵檢死する事にします。

豐範　豐範委細を藩士に傳へます。

通辯二　御苦勞でした。

ト一同意氣やう〳〵と甲板を下る。

豐範殘念相に行かふとするを加賀とめる、きつとなる。

——返し——

六、土佐藩邸

藩邸の廣間、これも簡略を要す。

家臣深尾鼎、大目付小南五郎右衛門双方から出る。

小南　御老臣、けふのお役目御苦勞です。

深尾　御老公ジキ〳〵に箕浦、西村外一同に御對顏あらせらるゝ、心をつけてこれへ通して下さい。

小南　ハイ……

ト下手に向ひ、

堺軍監府、歩兵六番隊々長、箕浦猪之吉、八番隊々長、西村左平次、各々小頭はじめ部下一同召連れて通らつしやい。

一同　ハッ、

ト答へて、箕浦猪之吉、池上彌三吉、杉本廣五郎、勝賀瀨三六、山本啓助、森本藏吉、北代傑助、稻田貫之丞、柳瀨常七、橋詰愛平、岡崎榮兵衛、川谷銀太郎、岡崎多四郎、楠瀨儀次

郎、八番組、西村佐平次、大石甚吉
竹内民五郎、土居德太郎、金田時次
郎、武内彌三郎、榮田治左衛門、中
城淳五郎等、一同無刀、下手に居並
ぶ、箕浦、西村は一歩前へ進む。

小南　一同まかり出ました。

深尾　佛國の領事、レオンロッシュよりの要求によつて各々を召出しました、御隱居樣御病中ながら特に拜謁を賜る、一同有がたく思はれい。

一同　ハツ、

ト平伏する、山内容堂小姓をつれて出る。

容堂　皆、揃ふたか

一同　ハツ、

箕浦　御隱居樣、うるはしき御尊顏を拜し吾等恐悦仕候　堺奉監府歩兵六番隊々長箕浦猪之吉

池上　小頭、池上彌三吉
杉本　卒、杉本甚五郎
勝賀瀨　勝賀瀨三六
山本　卒、山本啓助
森本　卒、森本茂吉
北代　卒、北杉健助
稻田　卒、稻田貫之丞
柳瀨　卒、柳瀨常七
橋詰　卒、橋詰愛平
岡崎　卒、岡崎榮兵衛
川谷　卒、川谷銀太郎
岡崎　卒、岡崎多四郎
楠瀨　卒、楠瀨儀次郎
西村　八番隊長、西村佐平次
大石　小頭、大石甚吉
竹内　卒、竹内民五郎
横田　卒、横田辰五郎
土居　卒、土居德太郎
金田　卒、金田時次
武田　卒、武田彌三郎
榮田　卒、榮田次左衛門
中城　卒、中城淳五郎

箕浦　其他は佛人に射撃しなかつた濱田反二郎以下二十人

西村　永野峰太郎以下二十一人

箕浦　コレ等はお構ひなしといふことで御池通り六丁目の商家に御沙汰を待つて居ります。

容堂　左樣か、時に容堂はお前達をわしが臣下の者だとは思はないで御國の民として改めて禮を以て申入たい事がある。

箕浦　勿體ないお言葉恐れ入ります、やはり臣下として、

容堂　イヤさうでない、異國の兵を斬つたのは今日の國是としては止むを得んことで惡い事とは思つてゐない、しかし佛國領事レオンロッシュから大分過酷な要求があつたのでわしはお前達にそれを傳へるに忍びない、だが云はなければ到底この緒を見る事ができない、時は伏見、鳥羽の戰ひに幕府が敗北した、官兵はまさに江戸城總攻撃に移らうとしてゐる、全く國家多事の場合、今、外國から妙な事の言ひかがりで內患外から一時に起つてはどの勢で向ふのか、どの軍備で防ぐのか實際容堂も當惑してゐるお前達のした事が死に當る事でないかも知れないがこんな理由で領事の要求によつて彼等佛人を射撃した二十人の者に死罪を言ひ渡さねばならんのぢや。

箕浦　死罪でござりますか。

容堂　サア其處なのだ、容堂が病中おしてお前達に逢はねばならないといふ大切な要點は其處にある。

西村　恐れ入りました。

容堂　箕浦　西村つまり高い價ぢや、お前達の血で土佐藩のみでない、我國の無事を贖ふといふのは少し片手落のやうだが時が時ぢ

や、一つ容堂に免じて命をくれると云ふ覺悟をして貰いたいのぢやが。

箕浦　御理解よく會得しました、吾等決して命を惜しむやうな卑怯なる者ではござりません。

西村　しかし御隱居、隊長が打てと命令を下して其命令に服從した部下は何の罪もありません、從順な歩兵卒です、つまり罪は吾等二人にあるのではありますまいか。

箕浦　無論、御隱居一同の者の助命をお願い申上ます。

橋詰　隊長そんな莫迦な事はない、佛人を斬り佛人を討つたのは同じ事です、そんな莫迦な事はない。

大石　一同の者は同じ罪です、どうか同じように御處刑を願います。

容堂　イヤさすがに藩の若い者ぢや、しかしレオンロツシュはつまり二十人だけ刑罪に處せいといふのぢや、だから一切は神の命に任せる事にした、藩邸内の稻荷のやしろに供へた御籤を引いてくれ、赤が當れば死白い方が當れば生といふ事に定めてあるのぢやが。

箕浦　至極結構です、箕浦、西村、小頭の池上、大石この四人は責任がある外の者一同で引いてくれ。

楠　ハツ、

ト、進み出る小性三寶に乘せた籤を持つて出る、楠瀨引いて

赤、赤、楠瀨傳次郎、

ト喜んで下がる、

岡崎出て引く、

岡崎　ア白ぢやく、

箕浦　岡崎助命ぢや

岡崎　イヤ隊長、それはいけません、岡崎多四郎助命の御沙汰はうけません

箕浦　いけない神の御命令ぢや、

岡崎　でも、

箕浦　下がれ、

岡崎　ハツ、

ひかへる。

橋詰出る。

一同、これをとられい。

一同へ持つてまわる。

一同　赤ぢや。

一同　白ぢや。

口々にいふ。

箕浦　白のものは下がれ。

西村　赤のものは殘れ。

一同　ハツ。

これにて榮田治左衛門、中城淳五郎楠瀨保次郎はシホく下へよる。外の者は赤のくじを高くかゝげて上手へよる

箕浦　籤は極つた、榮田、中城、楠瀨立たつしやい。

楠瀨　イヤ隊長、吾れ等退出はいたしません

中城　誰か籤を取りかへて下さい。

榮田　生き殘る事はいやです。

西村　莫迦、御隱居樣の仰せぢや下がれ。

三人　いやです。

箕浦　無駄な命は捨てるに及はぬ、下がれ

三人　ハツ。

是非なく下がる。

容堂　箕浦、西村外一同の者盃とらす。

箕浦　ハツ。

小姓持つて行つて容堂に呑ます、箕浦の處へ持つて行く。

容堂　藩邸の名殘りこの世の名殘りぢや打くつろいで充分にすごせ、予がこれに居つても如何、許せ

よ、一同と共に入る。

侍女、おきく、お谷、お艶等盃と銚子を持つて出る。

お菊　皆樣、御隱居樣からのお盃で御座りま

す。

箕浦　左様かイヤ御隠居様はさすがに粋ぢや皆遠慮なしに頂戴する事にしやう。

西村　藩邸の大廣間でこんなにくつろいでのめるとは知らなんだ。

北代　堺で飲むのと違つて灘の一本生、これなら冥途の土産になるぞ。

お谷　あほる。

お谷　大分おのみなされますな。

北代　まア、二升か。

お谷　ねゝ。

北代　ハ……。

稲田　オイ北代、さう一人でのんでどうするか。

よる。

大石　時に皆美しいな、ア、箕浦隊長、お花の事を思ひ出しはなさらんか。

箕浦　お花……

一寸暗い顔をして、

ハ……莫迦な、

打消す。

お艷　では隊長様はお美しいのが御座りましたのか。

西村　あつた〳〵、これへ來る道でも紅涙萬丈。

箕浦　おい、つまらん事をいふな。

橋詰　ハ……、隊長赤い顔をしましたな。

皆々笑ふ、この内北代はぐん〳〵呑んでゐたが。

北代　何んだか面白くなつて來た、よし劍舞をやるぞ、誰か詩吟をやつてくれ、

杉本　よし。

杉本かまへて。

雲耶山耶呉耶越耶、水天髣髴、青一髮万里舟泊天草洋、烟横蓬窓日漸没、瞥見大魚波間跳、太白當船以明月。

舞ふ、

一同　ヤンヤ〳〵。

囃す、竹内も出て

竹内　よし、僕もやるぞ、「利休へおぢやるなら、わらじはいてござれ、利休は石原、小石原、

山本　僕もやる、一土佐はよい國南をうけてさつま嵐がソヨ〳〵と、

一同　サツサ、よた〳〵してがん〳〵。

この時まで橋詰は考へてゐる。

北代　オイ橋詰、何に考へてゐるのだ、少し陽氣にやらんか。

橋詰　莫迦、俺は死方に就いて考へてゐるのだ。

北代　それこそ莫迦ぢやないか、死ぬに二つがあるか、おぬし未練が出たな。

杉本　イヤさうぢやない、皆あすは打首になつてもいゝのか、

北代　なるほど。

橋詰　隊長〳〵。

呼ぶ。

箕浦　ウム成る程、コリヤ大切な事だ、皆しつかりせい。

西村　打首、フム橋詰のいふ通り死罪はいゝが、打首はいやだな。

橋詰　どうです、一つ切腹をお願ひしては。

箕浦　よがろう、お奉行〳〵、

呼ぶ、小南五左衛門出る。

小南　充分にまゐられたかな。

西村　御盃は過分に頂戴しました、しかし御隠居にお願ひがあります。

小南　もう先刻でお話はつきてゐるのではないか。

箕浦　イヤ我等一同、死罪に就ては特別のお扱ひを受たいと思ひます。

小南　ソリヤ困りますな。

北代　何が困る。

小南　お構ひの身で御隠居ぢき〳〵お盃を賜

はるさへ望外のお情ぢやアないか、その上押てお願ひなぞは困る。

橘詰　ナニおかまひの身とは何んだ、我々は皇國の爲に明日一命を捨るのだ、取次ぎをしなければはかまはん、ぢきにお願ひする。

立つ。

西村　まア待て。

この時容堂一間から出る。

容堂　イヤ押て參るに及はん

一同　アッ御隱居。

平伏くする。

箕浦　ア、輕輩の吾々に死罪に就いては特別のお扱ひを願ひたいと思ひます。

容堂　よい〳〵分つた、お身達を十分に取立てるぞ。

西村　い、上分に。

容堂　足輕の身では切腹も致されぬ、十分に取立て明日は腹切ることにせい。

箕浦　い、、切腹お許し下さいますか、一同御禮を申せ。

西村　ハッ過分の御意、有がたう存じます。

一同手をつく。

容堂　一同に紋服をとらせい。

小南　ハッ。

小姓一同に紋服を持つて出る。

容堂　死出の晴着ぢや、

一同　ハッ。

容堂　箕浦、立つか。

箕浦　ハッ、甚だ不つ、かですが。

容堂　よい。

箕浦　謠「網はしるしを賜はりて、御前の立つて出でけるが……

「立歸り、方〳〵は人の心をみちのくの安達が原にあらねどもこもれる鬼をしたがへずは二度また人に面をむくる事あらじ、これまでなりやあづさ弓、引はかへさじもの、ふのやたけ心ぞおそろしき〳〵

容堂一同と別れを惜む。

ちよつと幕をひく。（しりあげ）

七、鐘樓堂

舞臺は鐘樓堂の横。に霊がいくつもならべ各〳〵名札がはつてある、

。見物人がワヤ〳〵いふてゐる、を伴僧妙托とめてゐる。

妙托　ヱ、這人つては、ならんぞ〳〵。

一　イヤ〳〵見せとくなはれ、十佐の藩士が切腹しやはるのやないか。

二　異人さんを斬つたつよい人が見とおます

のや。

大ぜい　イヤ／／／。

妙托　コレ／／、妙國寺は見せ物やない、サア門外へ出た／／。

三人　ケチ／／云はずと見せてくれ／／。

妙托　ならん／／。

門外へ出す。

ヤ、ヤット落ついた、河内や攝津からワザ／／見物に來ると云ふさわぎ、イヤ大ていぢやない。

こゝへ、土居鑑太郎、竹内民五郎、横田辰五郎出る。

横田　ヤア、この瓶へ入れてくれるのだな、オイ土居、見ろ、君と隣同士だ一つお心安く願ふぜ。

土居　さうか横田、隣同士の心安立てに女ののろけなん云つちゃ困るぜ、

横田　大丈夫／／隊長樣ぢやないからな。

土居かめの中へ這入つて、

土居　横田／／、竹内。

横田、竹内　何んだ／／。

土居　どうだ、中々這入り工合がいゝぞ。

竹内　莫迦、氣が早すぎるぞ、こんなにしなくつたつて今に入れてやるよ、出て來い。

土居　處がちよつと出られんのだ、

横田　どうした。

土居　這入る時とちがつて瓶のふちは高し、内面はすべ／／してゐるから。

竹内　だからいそがなくつてもいゝと云ふのぢやで、死んでからにすれば、出る世話がないぢやないか。飛んだ司馬溫公だ。

手をもつて上げてやる。

土居　ハ……安產だ、

妙托よつて。

妙托　どなたもお氣樂で御座りますな、

土居　ハ……けふは、一代の解決がつくのだか面白いよ。

妙托　ヘーン。

感心する。

北代儀助出て、ッカ／／と鐘樓の方へ行く。

モシ／／どこへお出でなさるな。

北代　鐘を一つつくのだ、

妙托　メ、メ、減相な、

とめる。

北代　のけ、仲間は辭世の歌なと作るが酒より外に藝のない北代だ、あの鐘を、冥途のみやげにつくのだ。

土居　よからう、北代つけ。

北代　よし。

行きかける。

妙托　モシ／／此の混雜の中で、鐘がなつたら、それこそ又さわぎが大きなります、どうぞそれだけは御了簡／／。

拜む。

北代　イヤ、是非ともつく。

爭ふ。

この時、西村出る。

西村　北代どうした。

北代　隊長、此世の名殘に、かねを一つつかふと思ひましてな。

西村　寺で迷惑するのだろう。

妙托　ハイ／／迷惑いたします。

西村　ぢや、よしてやれ、

北代　さうですか、殘念だな。

西村　お坊主。

妙托　ハイ／／。

西村　これに少々金があるが、もう用のないものだから、どうせ死んだあとで世話になる、お前さんにあげやう。

渡す。

妙托　ヘ……お布施で御座いますか。

西村　まづさうぢや。

北代　金か、金なら俺もある、サア坊主やるぞ。

土居　俺もやらふ。
二人　俺も、俺も。
　　皆々渡す。
妙托　へ……鐘はついて貰ふよりたゞ貰ふ方が結構／＼。
　　いたゞく。
西村　サア、そろ／＼出かけやうか。
土居　もう刻限もせまつて來たぞ。
三人　行かう／＼。
　　皆々は入る。
妙托　妙托、見送つて。
　　今死なふと云ふのに、氣樂な人達ぢやな。
　　ひとりごと金を頂いて這入る。
　　お花、そつと出て鐘樓によつてうかゞふ。
箕浦　肥山の靈霧、薩海の風、遊凝を回首すれば、すべて雪鴻。
　　うたひながら出る。
お花　箕浦さん。
箕浦　よる。
箕浦　ア、お花か、どうして來た、
お花　あの、妙托さんにたのんで。
箕浦　さうか、いよ／＼最期の日が來たもうあんたも覺悟して外へ嫁入りする事にしなさい、よろしいか。
お花　箕浦さん、嫁入り先を極めました。
箕浦　それアよかつた、旅籠町こやらですか
お花　イエ、もつと西の方。
箕浦　西、ハハン戒島の方ですな。
お花　イエ、もつと。
箕浦　淡路へでも行くんですか。
お花　イエ。
箕浦　何處です。
お花　お供して行きます。
箕浦　お供するつて、何處へ行くのです。
お花　箕浦さん、この鐘がなつたら、私もお供するのやと思ふて。
箕浦　エッ、この鐘。無分別を出すのぢちやアないのですか。
　　この時。
聲　箕浦さん、隊長、時刻です。
箕浦　ア、今行く、オイお花。
お花　一しよに行きます。
箕浦　莫迦な事をいつちやアいかん。
聲　箕浦さん、隊長／＼／＼。
　　口々に呼ぶ。
箕浦　今行く、莫迦な事をしてはいかんぞ。
　　云ひ捨てゝ去る。
　　お花ヂッと見返る。……返し

八、妙國寺の庭

妙國寺の庭。
正面に外國事務總裁御名代、衣冠束帶で控へる、左側にフランス人、公使レオンロッシュ、これに二人つきそふ、
山川、渡邊、馬場ひかへ、上手に深尾、小南ひかへ、九人目の北代が切腹の座についてゐる、
北代、フランス人を睨んで腹を切る
佛人ふるへる、
十人目は箕浦猪之吉だつたな、
役人　さうです、
小南　呼出しなさい、
役人　ハイ、箕浦猪之吉
　　呼ぶ、
　　箕浦靜かに出る、
　　黑維紗の羽織に袴を着し座につく、
　　三寶をいたゞく、グッと、レオンロッシュをにらみ、
箕浦　この箕浦は君達の爲めに、腹を切るのぢやアない、御國の爲め、わが十佐藩の爲めに切るのだ、日本男兒の切腹を見て置けオッ、さうだつた、僕にも辭世がある、

妖氣除却シテ答二國恩一
豈二決然一人言可レ省
唯敎大儀傳二千壽一
一死元來不二足編一

かねの音、

ヤッ鐘、

小南　どうした、

箕浦　ハ……みんなは一人で行くが僕は二人だ、ハ……

腹を切る、すぐ首をうつ、

小南　十一人目、西村九平次、を呼び出せ、

役人　ハッ、西村九平次、

西村　ハイ、

ツカ〳〵と出る、座つて、

深尾　辭世は、

西村　歌、イヤ歌は御免蒙ります、たゞ七度び生をうけて、國難に報ずると一句だけが辭世です、オイよく聽け、二十人の魂はお身等に取ついてはなれんぞ、ハ……オイ小阪、

小阪　何んです、

西村　西村の首はかたいから斬りそこねるな

小阪　ハイ、

西村　聲をかけるまで、待つてろ、

小阪　ハイ、

切腹して切りひらく、

西村　うて、

小阪　うつ、

小南　十二人目橋詰愛平を呼べ、

役人　橋詰愛平、

愛平座につく、

ロッシュびく〳〵して座を立つ、一同びつくりしてついて行く、

橋詰　オイ檢使、役人どこへ行くのだ、莫迦だな、マアいゝゆつくり辭世と云ふ奴を考へるか、

あぐらをかいて、

エイと、君がため惜しからざりし命をも、何んだか、あつたやうだな、

深尾鼎、出る、

深尾　橋詰、

橋詰　御檢使ですか、やりますぞ、

腹を切りかける、

深尾　まて、

橋詰　何んです、

深尾　公使がさいぜんからの健氣な切腹にすつかり感心してしまつたのだ、もうあとはいゝから助けてやれと云つて、今ふるへてゐるのだ、

橋詰　ハ……さうですか、イヤ皆の精神が通じたのですな、しかし僕は死なして下さい

深尾　それがいけない、

橋詰　イヤ、そんな馬鹿な事はない、

又きりかける、御名代出る、

名代　まて〳〵切腹には及はんぞ、助命せよ

との公使の言葉です、

橋詰　イヤ有難う御座いますが、十二人目の僕になつて、イヤそれは困る、

名代　イヤ、生はかたく、死は安し、早まつてはいけない、

深尾　御名代のお言葉ぢや、

橋詰　ハイ、十一人の生愚聞いたか、君達のけなげな覺悟に、佛公使も驚いたのだ、さうしてあとの者は、助命される事になつたしかし生と死の界に立つた橋詰愛平は、生もいやだ、皆まつてくれ、

腹へ突立る、

ア、橋詰が、

深尾　オッ、

一同よる、櫻散る。

――幕――

戯曲

人物

小野小町
大伴黒主
文屋康秀
喜撰法師
僧上遍照
在原業平
深草少將
實ハ僧上遍照
侍女

第一景　夜ざくら

×

バックは黑色に十佐風の繪、夜櫻に霞、霞は金泥、櫻の花には金のふちを取る。

前には丹途の燈籠二ツ、上と兩側は櫻花の切出し。

月の光が朦朧と照る。（但し紫の勝た光線）

幕あきから終りまで、極めて遠く琵琶の音が聞いて居る。

幕明くと。

中央に小野の小町が一人立つて居る

それより少し放れて侍女一、蹲いて居る。

共に下手の方を眺めて居る。

小町　いつもの時刻は遠に過ぎて居るのにね何故今夜はこんなに遲いのだらう。

侍女一　ほんとうにどうなすつたのでせう、如何な雨の夜でも風の夜でも、ものゝ四半時と時刻を違つた事はございませんでしたのにね。

小町　ひよつとしたら病氣でもなすつてゐらつしやるのぢやないかしらね。

侍女一　（一寸びつくりして）は、何でございますつて、あなたはあのお方を御案じなさるお心がおありになつたので御座いますか

小町　今更病氣にでもかゝられたら、氣の毒だと思ふわ。

侍女一　まあ初めて承ります、それほどのお心がおありになるのでしたら、何だつてむごたらしくも此の長い月日、まあ數へても御覽なさいませ、あの方が通ひ初めてから昨夜が恰度九十日目、今夜が百日目で御座いますよ、それだのに今日まで只の一度だつて御顏を見せてあげた事もなし、一言のお言葉をおかけになつた事もないでは御座いませんか、雨降る夕べ、雪散る宵、またしても無駄足を踏んでは、とぼ〳〵と、もすそを濡らす野末の露のそれならで、涙にそでを絞りながら、元來た道をとぼ〳〵と影のやうに歸つて行く、あのむごたらしい後姿を見送つては、何でもない私達までが胸迫つて思はずほろりとすることも度々でございました。それほどのお心がおありだつたら、せめて物越しにでもおいなと聞か

してお遣りになつたらよかつたぢやございませんか。

小町　それがお前たちの淺はかな考へと云ふものよ、男といふものは女の方が弱く出れば、いくらでもつけ上るものよ、男つてものはいつも飢ゑた野犬か何その樣に女の弱味ばかりつけ覗つて居るのだもの。一寸でも此方に弱味でも見せやうものなら、うるさくつきまとふのが男なのだよ、それをまた一ぱし凄い顔前のやうに考へるのも男といふ曲者さ、そのくせ此方が何處までも強ければ、蛇に見込まれた蛙か、猫に睨まれた鼠のやうに、それは意氣地なく弱いのも男の拵前なんだよ。

侍女一　そうしたら、いつでも男の前には強くなつて居なければならない。といふ譯になりますね。

小町　勿論一寸の際だつて見せられないわ、時に本當らしい男があるとしても、それは大方ほんの一時の熱で。眞がない、それが證據には、私の所へ通ひ出した人も五人や七人ではないが、一人だつて五十日と通ひつづけた人があつたかい。あの武平朝臣などは十五日にはもふ外に女が出來て居たといふぢやないか、右近の君の二十二日、兼盛王の三十六日、あの眞面目な藤枝中納言殿ですら四十九日目を最後にして遂々匙を投げてしまふたぢやないか、大抵男は手に握る處まで行かずに、途中でヘコタレてしまうのぢゃ、それは取りも直さず、眞といふ心が無くつて、ほんの一時の熱に浮かされた氣まぐれの證據ぢやないか。

侍女一　そう仰しやれば、そうかも知れませんが、でもあの深草の少將の君こそ今日が百日目本當の實ある君ではないでせうか。

小町　さ、本當をいふと、私も實はあの君には近頃心が動いて居るさ、だから少將の君が百日間完全に通ひ終ぜたら、その時は自分の心も打ち明けてと思つて、近頃では百日目の來るのを心待ちに待つてゐたのに、（急に氣のいらつ表情になつて）こんなに遲いのは、矢張り九十九日も通ひ乍ら、もふ一と夜さの辛抱が出來なかつたほどの不實な、あれも矢張り並みの男だつたのかもしれない、若しさうだつたら……（急に足を蹈み鳴らして）あゝ口惜しい〳〵。

侍女一　どうなさいました。

小町　私は負けた、妾はあの男に負けたんだあゝ口惜しい、あの男は九十九日通ひとうしてもふ一日の間際で捨てたんだ、それをそれを私はもふ大丈夫と思つて、うつかり此處まで出て來てあの人を待つ氣になつたんだ。妾は結局あの男に乘せられて、妾の本心を見せてしまつたんだ　九十九日まで見向いても見せずに來て、只一日の所でうつかり背負投げを食はされてしまつたんだ。

侍女下手を見入つて、

侍女一　あ、來ましたよ、來ましたよ、

小町　（下手をのぞいて）どれ〳〵。

侍女一　そら、向ふを、慌かにそうですわ。

小町　ふむ、矢張り來たわね、あゝよかつた私は矢張り負けなかつた。ぢやね、今夜は家へ入れてあげるつもりだから、お前行つて部屋を奇麗に掃除して置いて頂戴、お花も取り替てね、それから几帳も新しい方のにしておくれ。出來るだけ奇麗に飾つておいて頂戴。

侍女一　畏りました。

侍女去る。

小町は顏粉黛を直したり、衣紋など整へ、何食はぬ風で、靜かに四邊を歩いて居ると、下手から深草の少將（實は僧上遍照）出て來る。

少將　あなたは小町殿ではありませんか。

小町　（驚いた樣にふり返つて）　あなたはどなたですか。

少將　私は毎夜通ひ詰めてゐる深草の少將です。

小町　まあ、貴郎が少將の君ですか。まあお初めて。

少將　祈禱ならば今日が滿願とも云ふべき百日目、我ながらようもたゆまず通つたものだと驚く位です。私の心の實もこれであらまし御判りになつたでせう、どうでせう、まだ私の戀を容れて下さる譯には參りませんか、お前を愛すと云つては頂けませんか

小町　まあ貴郎は百日位で女の心が摑めると思つてゐらつしやるの、

少將　ぢやまだこの上……そうですか、いや通ひませう、貴郎の愛を得るまでは例へ五百日でも千日でも通ひませう。

小町　ぢや貴郎はそれほどまでにしても、私を欲しいのですか。

少將　そうです、恐らくは斃れて後止むのかも知れません。

少之しく悄然となる。

小町凝つと見下ろして、

小町　そう、あゝ私水が欲しくなつた。

少將　持つて來ませうか、

小町　い、

小將四邊を見廻して、大樹の影へ去る、

小町遠くへ草履を投る。

小將、木の葉に水を掬つて持つて來る。

小町　あらちつとも無いぢやありませんか。

少將　來るうちに漏つてしまつたのです、持つて來ませう、

また去る。

小町あとからそつと覗いて居る、戻つて來るのを見ると、またツンと虛勢を張る。

少將再び水を持つて來る。

小町　まあこれツばかり、何にもならないぢゃありませんか。

少將　幾度でも運びますよ

行きかける。

小町　もふ宜しい、ね少將の君、濟みませんがその草履を取つて頂戴。

少將　これですか。

苦もなく拾つて小町の前に出す。

小町それを穿く。

小町（少將を見つめて）判りました。

少將　私の心が。

小町　さ、お坐りなさいますが、私の家へお伴致しませう。

少將　では私の此の燃ゆる樣な胸中を、

小町　そう、燃ゆる樣な私の心も、家へ行つてゆつくりとお話致しませうさ少將の君。

小町、少將の手を取つて去る。

これを透して見るやうに大伴黑主出て來る。中央に立つて、

大伴　ふゝむ……そうか、

大きな吐息をついて默考、大樹の蔭より喜撰法師出てくる。大伴の肩を叩く、

喜撰　おい黑主、何をぼんやり考へ込んで居るんだね。

大伴（一寸見て）　おい喜撰坊、今のを見たか。

喜撰　うむ見た、小町の奴め、ふざけた眞似をしてやがるな。

大伴　俺達は今迄彼女に一杯食はされて居たのだ、曾だん彼の女は男といふ者に對して全く何の感興も起らないと言つて居るから事實さうと信じて、我々六歌仙の誰でもが內心ちつとかたんと、あの小町に戀を持つてゐない者は一人もないが、頭で彼女は男嫌ひ、中には不具者だとまで言つて近頃で

は誰一人手出しをする者がなかつたんだ。

喜撰　男嫌ひどころか、男を引張つて行くあの狂態はどうだ、まるで飢ゑた狼の樣だ。

大伴　もふ恁ふしてはゐられない、大の男が五人もゐて、萬綠叢中紅一點を、餘他の男に手折られたでは我々六歌仙の名折れだ、斯くなる上は、勿論お主や私の面ラ構へであの小町に當ることは無理だ、先づ吾々五人の中で一番年若で、一番男振の好いあの業平をして彼の女を奪ひ返すのだ。その爲には勿論お主を始め四人の男は潔よく各自の戀を捨てゝ專ら業平の爲めに出來るだけの後援をしなければならない、俺はこれから業平の所へ行つてくる、一方お主は茲に張り番をして、あの男が果して何者であるかを慥めるのだ。好いか、しつかりやるのだぜ。

喜撰　黑主行きかける。

喜撰　一寸待て、こんな仕事をただでさせる氣か。

大伴　また初めやがつた、言はは已れの爲めぢやないか。

喜撰　いやだ、只ではいやだ。

大伴　じれつたさうに。

大伴　いくら欲しいんだ。

喜撰　今夜の寢酒代だけあれば好い。

大伴　そら、（と金を渡す）

喜撰　（受取つて）有り難ふ。

大伴　賴んだぞ。

大伴走り去る。

喜撰　あれも尋の割にひどく感傷的な男だ。樹木の蔭の方へ去る。

深草少將と小町出てくる。

少將　（馬鹿に横柄な態度で）もう好いよ。

小町　私が風でも引くと不可ないと思ふの。

少將　いや一人で歩く方が氣持が好いからさ

小町　あら、ぢや、あなたは私と少しでも長く一緒にゐたいと思はないの、私と別れて歸るのが悲しくないの。

少將　それほどでもない。

小町　まあ……。

小將　どうも此んなものを被つてゐると窮屈で不可ない。

と、鬘と烏帽子を取る。彼は即ち僧上遍照である。

小町　（坊主頭をつく〳〵見て）でも貴郎が眞逆遍照さんだとは夢にも思はなかつたわ

少將　遍照でいやになつたかい。

小町　いゝね、でも貴郎は先刻とは隨分態度が變つたのね。

少將　さうかい。

小町　私は取返しのつかない事をしてしまつた。

少將　今更悔いても始まらないよ、出來合ふまでは女が強いが、出來合つてしまふと男の方が強くなるのよ。

小町　あゝつまらない。

二人の袖の下から喜に顏を出す。

二人驚いて飛び退くと喜撰は二人の袂を摑つてゐる。

喜撰　おい遍照、凄い腕だな、小町殿、すつかり渡金が剝けちまつたね、物は相談だがな、この場合此の俺を何とかしないと此の納まりはつくまいぜ、俺は黑主からこれだけ貰つて、お主の正體を見現す役目で茲に張り番をしてゐるんだが、此の上先づどれ位の見當だい。

少將　（無言で若干の金を與へる）

小町　（同じく與へる）

喜撰　忝けない。

小町　決してね、賴むわよ。

喜撰　心配しなくても好い、俺は釋尊の子だよ。

「暗轉」

第二景　滿開

×

天上一面の櫻花。バックは同じく七佐繪風、下には緋毛氈を敷く。下手に幕を張る。

うらゝかな日の午後、遠くにほがらかな樂の音。

そこには各々短冊と硯とを前に置いて、毛氈の上には僧上遍照（第一景の深草少將と同一人）と、喜撰法師がゐる。少し離れて幕

六歌仙の圖……中井泰孝の筆

を張つた柱に凭れて文屋の康秀が同じく歌を考へてゐる。（然し彼は聾者である）

暫くすると遍照は文屋の方に見ぬやうに氣を配りながら、懷から一通の文を出して讀む、時々嬉しさうに抱いたり頬に當たりする、喜撰これを盗み見て、嘲つた態度で横を向くと、これも懷から財布を取り出して、手をさし入れて嬉しき表情

文屋　おい、お主達はこそ〳〵ど何をしてゐるんだい。

二人は慌てゝ物を押隱して、短冊を手にして考へる動作をしながら、

遍照　（大聲をはり上げて）歌を考へてゐるんだよ。

撰喜　どうも今日は頭が變だ。

文屋　一ッ聞いてくれ、恁ふ言ふのだ。「坊主さて、なぜ獸にあらぬ身の、戀も欲しかり金も欲しかり」

喜撰　おい、あいつめ變な歌を詠みやがつたぜ、彼奴め、俺達の事を知つてるんぢやあるまいか。

遍照　大丈夫知らないよ。

喜撰　おい遍照、毎度濟まないが、少々貸て

くれ。

遍照　またかい、昨晩遣つたぢやないか。

喜撰　宵越の金は持てねゝ男だつて事を知つてるだらう。

遍照　困つた男だな、貸せないと言つたらあれをバラすと言ふのだらう。

喜撰　流石お前は好い頭を持つてゐる、愉快だ、貸せ。

遍照　そら、今日はこれで我慢して置け。

喜撰　有難う。

文屋　おい、お主達は一體歌を考へてゐるのか。

喜撰　うるせいな（大きな聲で）考へてゐるよ、そら、聞いてくれ「此の世にて多くは望みは持たねども、酒の湯風呂で骨休めたい」

文屋　（ほゝ笑んで）　聲し得て妙なり、遍照はどうだ。

遍照　「天津風雲の通ひ路吹き閉けよ、乙女と共に我れ行かんかな」

文屋　眞情春風の如し。

大伴　大伴の黒主、興奮して出て來る。お主達は何たる悠長沙汰だ。

遍照　また何かに興奮して來たね、おゝは顔の割に氣が小さいから不可ないよ。

大伴　これが興奮せずに居られるか、お主も喜撰坊から聞いたゞろうが、彼の小野の小町が、我々聯盟の、誰もの戀も入れなかつたのは、決して彼女が根からの男嫌ひではなく、そこには大きな理由のあることを、はしなくも俺は發見したんだ。

遍照　といふと。

大伴　彼奴は我々六歌仙以外の男とは交際しないといふ聯盟規約を無視して、深草の少將といふ男をこしらへて居やがつたのだ。

遍照　はゝア、あの小町に、男が出來た。愉快だね、

大伴　愉快……おい遍照誤解するなよ、小町はな、餘他の男と好い仲になつてゐるのだぞ、大の男が五人も居て、一人の女を餘他の男に取られてお主は口惜いと思はないのか。

遍照　おい、もふ少し頭を冷靜にして、言葉靜かに話してくれないか、どうもお主の話はまるで早鐘を聞くやうで要領が得にくひよ。

大伴　（文屋を見て）むゝ、ぢれッていなア（云つて文屋の側へ寄り）おい、文屋、何をぼんやりしてゐるんだ、早く此方へ來て相談に乘つてくれ、大騒動が持ち上つてゐるんだ。

文屋　おゝ黒主、久濶くだな、早速名作を聞こう、

大伴　（ぢれつたそうに）　此の男と來たら歌より外に融通の利かない男だ。

文屋　早く聞こう、（と耳を傾ける）

大伴　（ぶり〳〵しながら、吐き出す樣に）「更たけて社の奥を通り見れば」ゝゝぢれッてい、「暗に二つの影うごめきてあり」

文屋　實景見るが如し。

大伴　こいつは駄目だ、（元の座へ來て）おい、主達も、俺にばかりじり〳〵させないで、ちつと神經を興奮さしてくれ、

遍照　全體お主はどうしやうと云ふのだ。

大伴　どんな手段を以てゞも好い、一時も早くあの小町の心と體をその深草の少將なるものゝ手から奪ひ返して、我々六歌仙の中の誰かのものにしてしまうのだ。

遍照　それは止した方が好いだろう、そんな生木を裂くやうな事をしちや罪だよ、それほど惚れ合つてる仲なら、奇麗に添はしてやつた方が好いだらう。いくら我々六歌仙内の誰かに戀しろつたつて、此の道ばかりは義理や人情づくで出來る仕事ぢやないからね、義理で止むを得ず戀をした例は古往

今來聞いた事が無いからね、ね、二人を心持ちよく添はしてやろうよ。

大伴　俺は忌やだ、我同盟の女を人に取られるなんて、耻辱の最もなるものだ、俺は忌やだ。

遍照　でも小町がその深草の少將と死んでも放れたくないと云ふものを、無理に引放す權利は俺達にはないだらう、ね喜撰そうだらう、

喜撰　うむ、そうだ、その權利はないな。

遍撰　だらう、俺は寧ろ手傳つても二人を添はしてやりたいよ。

大伴　たまらない、あゝ業平の奴め歸りが遲いなア、旨く行かないのぢやないかなア。

遍照　（少し心配そうに）　業平がどうかしたのか。

大伴　兎も角應急の手當に、我々仲間のうちで一番奇麗な一番戀の上手な業平を、小町の處へ口說かせにやつたんだ。

遍照　（初めて眞劍な氣持になつて）　おい本當かよ、黑主、そりや本當かよ。

大伴　旨く行つてくれゝは好いと思つて居るんだが。

文屋　（聲高に。）

文屋「來ぬ人を松保の浦の纖衣、干しては濡らし濡らしては干す」

照　おい止せやい、おい黑主、そんな大それた罪な事を我々に相談なしにするなんて法はないぢやないか、もしもそれが爲に小町の心を惑亂させる樣な事があつたらどうするんだ、

大伴　それが此方の望みぢやないか。

喜撰、一人窃かに笑つて居る。

遍照　あゝ俺は頭の中が沸くりかへる樣だ俺は恁ふしては居られない、俺は少し歩いて來る、（と、立ち上る）

大伴　（正直さうな目で、不思議さうに見ながら）おい遍照、お主が急に興奮し出してくれたのは賴もしいが、どうも興奮の見當がはづれて居やしないか。

遍照　あゝ胸の中が早鐘を撞く樣だ、おい黑主、お主は戀して居る若い者の心の中が如何に切實なものだかといふ事を知らないから、そんな慘ごたらしい事が平氣で出來るのだ、あゝ俺は二人の事を思ふと可哀いさうで人事とは思はれない、あゝ俺の心臟は高浪のやうに激しくなつて來た。

業平、極めて悄氣て出て來る。

大伴　おゝ、業平が歸つて來た、首尾はどうだつた。

遍照　おい業平、早く報告してくれ。

業平　（投るやうに腰を下ろし、泣き聲で）とても齒が立たん。

大伴　どう齒が立たないんだ。

業平　小町はな、お前さんは犬に喰はれて命をおとす人だと云つたよ、

遍照胸をなで下ろして、ほゝ笑む。

大伴　あいつめ、そんな事を云つたか。

業平　もふ俺は駄目だ、せめて俺は病氣で死んで行きたい。

この時文屋聲高に。

文屋「人の身の戀にうつゝの抜けた時、涙も出ずず、屁も出なくなる」

大伴　うるせいな、止せやい、面白くもない

（大きな吐息をして考へに沈む）

業平　おい黑主、俺はどうすれば好いのだ、あゝ目がぐらくする、俺の心臟には血が一ツ滴もなくなつちまつた、俺の目の底に小町の顏が俺を潮笑つてゐる、あゝ俺は犬がおそろしい、犬が恐ろしい。

文屋「戀に病む靑つらの首くり抜いて、灯をともしなは面白かるらん」

大伴　（矢庭に立ち上つて）ね、止せツ、おい業平、しつかりしろ。

業平　この上の手立があるか。

大伴　ある。
業平　どうするんだ。
大伴　深草の少將を叩っ斬って此の世から葬つちまうんだ。
遍照　（飛退つて）おい黑主、本當かよ。

「ダークチエンヂ」

第三景　櫻ふぶき

或る庭元へ張つた幕（正面）、左右に櫻樹、頻に花が散つて居る。夜明け近い時刻——。幕には背部より光線を當て、その前を通る時影が映る（その光線は月光か若くは、或る家より射す光線）幕の前に大伴、業平、文屋、喜撰の四人、各刄を携へて立つてゐる。家の硝子が開いて光線が幕に映る、（月元なれば最初より射して居る）と、そこから少將と小町の影現る。四人の人々腰をかゞめて後をつける（即ち影）喜撰戻つて來る。同時に遍照の少將と小町出て來る、遍照は烏帽子と刀を喜撰に渡し喜撰から拔刀を受け取る。

喜撰の少將と小町去つて、また影になる、三人出て來る。遍照と共に又影を追ふ。三回程繰返す、遂に影にて二人を捕ゐる。

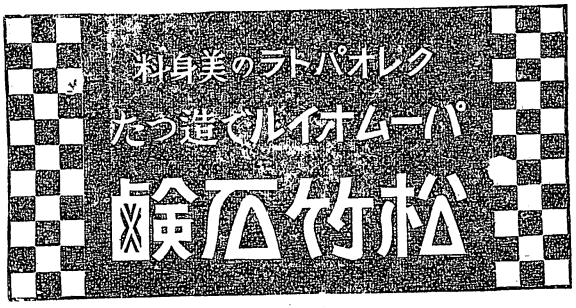
バック下がる。

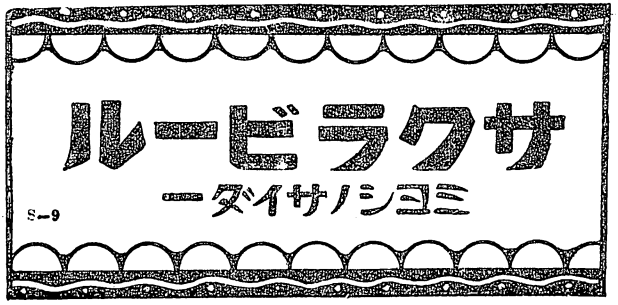
第四景　花散る里

花の堤。
明るい朝。
大伴を始め業平、文屋、喜撰など遍照の少將と小町の拉して出て來る
（遍照と知つて）ゐゝッ、お主は遍照だな。
大伴　なに遍照、
文屋　眞と遍照主だ。
業平　（態とらしく）これは意外だ。
喜撰　皆さん、私は決して六歌仙の同盟規約を破つては居ないのですよ。
小町　小町は決して異端者の手に渡つては居なかつたのだよ、矢張り小町は我が六歌仙中の人だつたのだよ。
遍照　この時業平一人悄然と放れて沈思。
文屋　一首あり、「むべ山の戀の靡風も吹きやみて、目出たしと見て目出たくもない」
喜撰　（獨言のやうに）今夜は久しぶりで錢の出ない酒にありつくだらう。
遍照　黑主、これでいさこさはあるまいな。
大伴　どうも俺には判らなくなつて來た。
小町　でも皆さん、思ふ通りになつたのぢやなくつて？。
業平　だからと云つて、俺には滿足出來ないよ。
小町　何故？、
業平　俺は本當にお前さんに惚れてゐたからさ。
小町　濟まないね。
業平　左樣なら。
小町　何處へ行くの。
業平　東の廊へ下るんだ。
花、頻に散る。

——幕——

× × × × × × × × × × × ×


科身美のラトパオレク
たつ造でルイオムーパ
松竹梅


ルービラクサ
ーダイサノシコミ
S-9

劇壇その日〳〵

五月四日　新裝せる大阪港へ始めて投錨した米國東洋艦隊は午前大阪市中を見物し、午後は同艦隊司令長官以下廿四名の將校等に、同國領事並に領事館員附添の上辨天座の文樂座人形淨瑠璃を見物す。

五月五日　野崎觀音は慈眼寺の裏山に二百年來雨露にさいなまれ、名物の女夫菓子と共に傷々しい姿をとゞめてきたお染久松供養の塚に、せめて屋根でもといふので、この程文樂座が施主となり木の香新しい小さな御堂と、その周圍に津太夫、反次郎を筆頭に古靱、土佐、新左衛門、吉兵衛、清六鰹、叶、大隅等文樂座幹部連が名を刻りつけた石の玉垣を奉納した。この落成を紀念する大法會が野崎詣り賑ふ五日慈眼寺の尾崎一廣法主の導師の下に行はれた。

【寫眞一】出來上つた御堂と中央が慈眼寺の一廣法主、右が津太夫、左が反次郎

五月九日　樂天地に出演した新潮劇は出し物「琵琶歌」が稀有の人氣となり、同日打上げの所を三日間日延べし十二日まで打續けることになつた。

五月十日　浪花座五月の新舊合同劇の出し物で問題の長谷川伸作「股旅草鞋」二幕は上演に先立つて上演却下となり其後漸く當局との諒解があり蓋を開けたが、主人公の兎鳥の富五郎は壽三郎が扮し、これが近來の嵌り役となり各方面に好評を博してゐるが、松竹白井社長はこの壽三郎を大いに宿望する所あり、近く新劇團を組織すべくその計畫をめぐらして居る。尚ほこれが實現されるなれば關西歌舞伎からも新劇俳優が送り出される事であらう。

五月十日　昨年十二月の顔見世興行をお名殘りとして改築工事に從事した京都南座はその後着々と工事進行し本日午後上棟式を擧行した。

【寫眞二】上、工事中の南座全景　下、上棟式當日の狀景。

五月十二日　▲角座松竹家庭劇のお目見得狂言は本日を以つて打上げ。▲樂天地に出演してゐる新潮劇お目見得狂言は本日限り明十三日より二の替りを出す。

五月十三日　新潮劇二の替り初日を出す。狂言は第一「掟」一幕四場第二「三人の親」五幕七場。

五月十五日　角座出演中の松竹家庭劇は本日二の替り初日を出す。狂言は第一川竹五十郎作ナンセンスコメデー「南京虫」一場第二和老亭主人作「曇り後晴れ」三場、第三法門生脚色「無斷借用」四場、第四蔦林

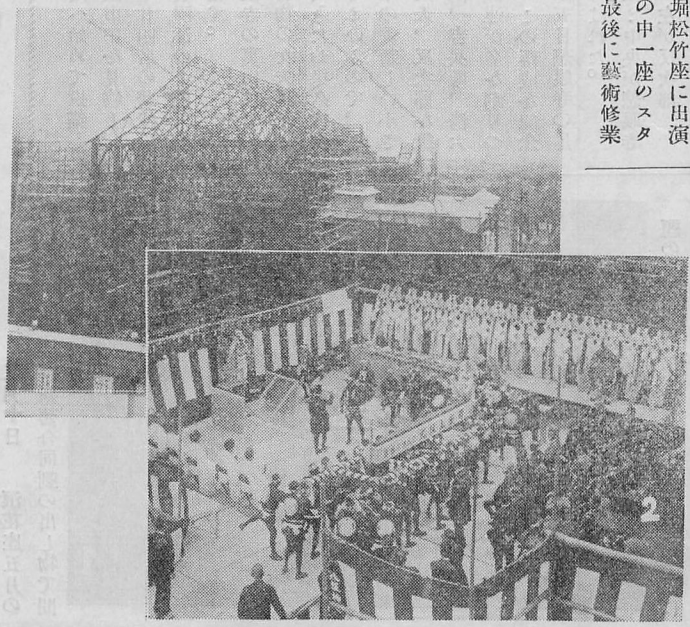
寺文福詩賀里人合作「赤い旗」一場、第五大和田想外作「狸汁」二場。

五月十六日　本日より道頓堀松竹座に出演してゐる「河合ダンス」一行の中一座のスター駒菊嬢はこの度の出演を最後に藝術修業のため渡佛行脚に出る由

五月二十日　辨天座人形淨瑠璃は本日打上げ。

五月二十二日　樂天地新潮劇二の替り狂言は二十一日限り本日よりは三の替り「三千兩」二幕五場「神田兒」三幕五場を出す

五月二十三日　▲佛蘭西人トルカット氏夫妻の指揮する「鷄のレヴュー」道頓堀松竹座に上演▲涙花座五月興行の　股旅草鞋」で松田種次氏の嶄新な舞臺裝置と片岡秀郎の扮する船頭源兵衛が最近の出來榮へとて白井社長は兩君へ賞品及び賞狀を與ふ▲二十日打上げた辨天座文樂座人形淨瑠璃のあとへ熊谷武雄、山田九州男、久保田清等の大衆新派劇が約一年振りで出演、この度の狂言は第一「故郷の家」第二「艶魔帳」



五月二十四日　舞踏家高田雅氏は同日午前七時五十分東京自邸にて逝去行年三十五歳

五月二十五日　志賀廼家淡海一派は本日初日を出す、狂言は第一阪本水仙作「喧嘩放送」二場、第二中井泰孝作「或る日の父さん」一幕、第三壽賀稻里作「親類」一幕第四足立萬里作「二つの影」三場で毎日晝夜二回開演、その總配役は左の如し。

母親お玉(龜鶴)長男安雄、按摩幸吉、友人原山、(辨慶)女房お定、父與平(樂太)夫細谷、友人加茂川(白石)次女涙子、從妹お愛、藝妓花奴(かもめ)次男貞夫、友人兼田(伊吹)父庄左衛門(老松)家令渡邊(樂祐)三男正夫、店員太市(樂三)藝妓辰之助(富士野)弟子三公(銀波)母親るい(式部)藝妓豆千代(紅葉)ウエターとも子妻定子(るり子)藝妓玉菊(友子)三女民子(靜子)藝妓松吉(千代子)長女初子、松島妻文江(春江)妻小夜子、市太郎妻お種(辨天)女將みき(多景島)大工長五郎、弟幸雄(源五郎)會社員中村、父千藏(十太郎)叔父六兵衛(太郎)父鈴木、兄市太郎會社員松島(淡海)

六月一日　角座六月興行は新聲劇の歸演で本日初日を出した。狂言は第一中井泰孝作「おいてきぼりの時代」二景、第二大毎連載大佛次郎原作德田純宏脚色「海の隼」五幕十場、その總配役は次の如し

佐野屋惣吉(辻野)漂流民金太郎、流山桐太郎(新田)尾影塔十郎、八幡屋銀之助(小波)相良典膳(武澤)中學教諭鈴木逸孝漂流民平助(鈴木)會社員東海三郎、三木原伊織(中田)怪僧覺田和尚、伊織の役僕金剛(名越)お船手奉行白鳥(山本)土屋喬四郎、蠣崎主殿、丸子の吉五郎(芝田)土屋主水正、赤崎屋五兵衛(藤本)大學助教授上山、田島屋重兵衛(伊川)東海三郎の妻光子(和歌浦)社交婦人聯盟幹事中島(若柳)同大澤(濱地)女中玉子(富士岡)社交婦人聯盟幹事高山、露西亞の孤兒アルシャ(若宮)女中お春(金剛)社交婦人聯盟幹事森(吉野)同田上、銀之助の亂母お谷(澤井)光子の母常子(中村)伊織の娘春江(富士野)

六月一日　六月の中座は大新派劇の出演で本日初日を出した。狂言は

第一中村吉藏、大關格郎合作「原敬一三幕十場　第二益田太郎冠者作「クレプトメーニヤ」一幕、第三瀨戸英一作「怪談小車草紙」一幕、第四菊地寛原作川村花菱脚色「受難華」二十一場でその總配役は左の如し

原敬、万吉(伊井)愛國會壯士、秀助、宿屋の番頭(藤井)愛國會壯士、正太、長沼(菊波)富樫營業部長、中岡艮一、藤本信一郎(白河)女中、桂子の母(川島)賣捌人丙驛員一(吉岡)高橋光威、ドクトル、バークレー、幸次(小堀)首相令弟誠澤圭子林健一(花柳)小島公爵、檜井柳太郎、釜吉、望月敏三(伊志井)賣捌人甲、元田鐵相、番太郎(雪岡)女將お久、長沼照子(英)山下大將、小林清太郎、ブランク、ロー、守山義雄(柳)賣捌人乙、議長、講演者(宮島)愛國會壯士(田邊)夜勤記者(青山)夜勤記者(根本)召使おしま(守富)コック兼女中兼看護婦ベギー、おとよ(西條)グレース、ロー、菊岡壽美子(水谷)賣捌人丁、杉山公爵、中橋文相(南)夜勤記者、召使おせん(若井)宮相、職人(山田)詰襟の記者、或る女(瀨戸)淺子夫人、女房お房の靈、おつや(喜多村)岡總監、前川俊一(梅田)三浦梧樓、森久保作藏、寶石商人(梅島)驛員、若い外國人(花和)

六月三日　熊谷、山田、久保田等の大衆新派劇は本日打上げた。

六月四日　六月の辨天座は八日初日開場を以て關西歌舞伎の花形中の花形を網羅して新作、時代、世話、所作の十狂言を選擇して晝夜二部に別ち上演するがその陣容は、中村政治郎、中村扇、市川眼童、中村魁童中村駒之助、實川美鴈、實川延郎、中村鴈之助、實川八百藏、さらに嵐吉三郎、實川延太郎、片岡我久之助、嵐珏藏、片岡秀郎中村福太郎、市川右若、市川升藏、嵐橘三郎の新進精鋭が轡を並べて左の狂言に潑溂たる新演技をやる、晝の部一番目、雜誌道頓堀所載食滿南北作同舞臺監督「堺事變」八場、中幕「藤彌太物語」一幕淨瑠璃竹柴其水作「三人片輪」常盤津連中、長唄連中、二番目川口松太郎作同舞臺監督「河内屋與兵衛」二幕大喜利「本朝廿四孝」奥庭狐火の場、夜の部雜誌道頓堀所載中井泰孝作、同舞臺監督喜劇「六歌仙戀愛爭奪」四景、一番目岡本綺堂作日比繁次郎舞臺監督「長崎の兄弟」三幕中幕榎本虎彦作「安宅關」竹本連中、長唄連中二番目「新版歌祭文」野崎村の場、大喜利「橋辨慶」五條橋の場と決定したるが「廿四孝」と「橋辨慶」の人形振に於て、女義界の立者、豐竹昇之助が始めて芝居の舞臺を勤めることになってゐる。

× × ＋ × ×
× × × × ×

編輯後記

松本泰三

□

櫻咲く春かと思へば、銀光に映える青桐の初夏となりました。この潑溂たる新緑の候に、新派の精鋭伊井、喜多村が、天下の名華水谷八重子と共に、新裝堂々、久しぶりの大阪に斬新な舞臺を見せ、稍もすれば倦怠を感じさせられる劇壇に、この光彩離陸たる異類の出演は、誠に一服の清涼劑でもあるかと思はれます。

涙花座の淡海劇、角座の新聲劇、いづれも六月の道頓堀に相應しい狂言と新演出を見せてくれます。それに八日よりの辨天座は、壽三郎、吉三郎、政治郎等を始め新進の出演になる若手大歌舞伎で、これまた若鮎の如く意氣潑溂たるところを見せてくれる事でせう。

□

偖てわが「道頓堀」ですが、この精氣ある六月の劇壇に優るとも劣らざるの意氣込で種々刷新を試みました。

まづ表紙です。これは創刊以來石版刷のものでありますが、その第一歩として、また一層の美化を謀る意味から、愈よオフセット刷に致しました。

次に口繪寫眞です。この種の雜誌の編輯で一番苦心をするのは、なんと云つても口繪寫眞でせう。その月の寫眞をその月の雜誌へ掲載しやうと思へば、どうしても初日の舞臺を利用しなければなりません芝居の初日、これこそ實に修羅場です。俳優は勿論道具方、走りに走るまで血眼の奮闘で、樂屋は鼎沸の大混雜を呈して居ります。それも道理、普通なれば半年もかゝる家を十分か、十五分の短時間で建上げるといふのですから……。この混雜の間を利用して撮るのですから並大抵の仕事ではありません。斯くして出來た寫眞へ御覽の通りの説明を加へる事に致しました。この方が從來の説明より寫眞に一層の情味を加へる事が出來るでせう。

□

本號に掲載さして戴きました脚本、食滿南北氏の「堺事變」中井泰孝氏の「六歌仙戀愛爭奪」は八日よりの辨天座に上演されるもので、何れもテンポの速い、そして面白い作品です。

□

御多忙中わざ〳〵執筆を願ひました日比繁次郎、大川殿江兩氏の「明治初年の道頓堀」中井泰孝氏の「三平の舊邸を訪ふ」は紙數超過のため、殘念乍ら次號へ讓らして頂きます。

當編輯部より懸賞脚本を募集する計畫です。その規定は追つて發表致します御待期下さい。

昭和四年六月五日發行
月刊雜誌『道頓堀』第四年第三十三輯

◇誌代は前金でお拂ひを願ます。
◇郵券代用は一割增にて御註文を願ひます。
◇御相談の上廣告掲載の儘めに應じます。

定價 金參拾錢（郵稅 送料五厘）

廣告取扱所
大阪電報通信社
大阪市北區中之島二丁目
廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越し下さい

昭和四年五月三十日印刷
昭和四年六月五日發行
大阪市南區久左衛門町八番地
松竹土地建物興行株式會社
編輯兼發行者 鳥江鐵也
大阪市西區江戸堀南通二丁目三二
印刷者 林善次郎
大阪市西區江戸堀南通二丁目三二
印刷所 村田文泉閣
大阪市南區久左衛門町八番地
發行所 松竹土地建物興業株式會社
道頓堀編輯部
電南（二二四〇番）（六六八五番）

住吉菖蒲園
秋明月
大阪唯一◇模擬店◇園遊会の設備
電話住吉三二五〇・三二五一番

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和四年五月三十日印刷
昭和四年六月五日發行

道頓堀
第四年六月號

金參拾錢
（郵稅一錢五厘）

若く明るい顔になる
レートー白粉
東京 平尾賛平商店 大阪